
やさしい殺人者

早見徒雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やさしい殺人者

【Nコード】

N63360

【作者名】

早見徒雪

【あらすじ】

ある都会の片隅で「彼」とささやかな同棲生活を送っていた「私」は、ある日「彼」を付け狙う謎の黒服の「男」に遭遇する。「男」は自らを「殺し屋」と名乗り、ある「依頼」を受けて「彼」を殺すべくやって来たというのだ。そこで「私」は「彼」の命を救うために、その「依頼」内容の真相を探り、「男」に対して一人で必死の抵抗を試みるのであった。ところが事件はやがて「彼」だけでなく、「私」や「男」の過去や秘密を巻き込んで、思いがけない展開へ進んでいくことになるのだが……。

プロローグ

これから私が書こうとしている物語は、一種の寓話、単なるおとぎ話にすぎないのかもしれない。

今、私の手には見えない鉛筆が握られ、目の前には見えないノートが置かれている。私はここにあの事件についてのすべてを書いていこうと思っている。

別に誰かに読んでもらうために書くのではない。何より自分の記憶や感情を整理するために記すのだ。時がたてば、私はことの仔細を忘れ、記憶を自分の都合の良いように捻じ曲げ、美化してしまうかもしれない。それは嫌だった。また今後様々な憶測や噂から、まったく無関係な第三者による誹謗や中傷にさらされるようになって、その為にあの時の気持ちを封じ込め、あの時の感情に嘘をつくことになるかもしれない。それも嫌だった。以前の私ならば、ただ流されるままに、それらを受け入れることになったかもしれないが、あのことだけは、できる限りありのままを残したい。だからあえて、あまり思い出さたくないこともすべて書き記そうと思う。

そう、「すべて」を書き記す。……何故、空想のノートと鉛筆を用いるのかという理由がここにある。なぜなら私は、あの人たちに「すべて」を話していないからだ。そして、これからもあの人たちには「すべて」を話すつもりはないからなのである。

あの人たち……警察の人間には。

私が今いるのは、いわゆる留置所という場所なのだ。私はあの事件が原因で、逮捕され拘留されている身の上なのである。私は法的に罪を犯した人間なのだ。

その罪状は、

殺人。

私が「彼」を死に至らしめたのだ。

もちろん、私はどんな処罰も厭わない。たとえ死刑の判決が下さ

れようと、それを受け入れるつもりでいる。また決して弁解や後悔の念で、これを書こうとしているのでもない。

ただ、警察には話すことのできないいくつかの「真実」がある。

これは私が口外しない限り、誰にも知られるはずのないことである。それらを忘れてはならない。それらをしっかりと心にとどめておかなくてはならない。そしてそれを正しく記すためには、あの事件のこと、私と「彼」のこと、それらすべての出来事をきちんと記述していかなければならないのだ。それはかなり長い物語となるだろう。私にはそれらを綴る文才があるとは思えないが、でも空想上の世界でなら、それは苦にはならないだろう。時間はまだ有り余るほどある。一字一句、何度も反芻しながら、しっかりと刻み付けて行きたいと思っている。

今度のことはたとえ誰かに話しても、非現実な話と思われるだけかもしれない。ならば、無理に信じてもらえなくてもいい。私が特定している読者は、「彼」、ただ一人だけなのだから。すなわちこれはある意味、「彼」に捧げるためだけの物語なのである。

もし「彼」に出会うことがなかったら、今の私は存在していなかったのではないだろうか。

どこから書き始めるべきか迷ったが、やはり、あの冬の日の朝からにすることにした。私はあの頃、己が作った粗末な箱庭の中にいて、そしてそこでの生活が永遠に続くものと信じていたのだった……。

その一

ゆっくりと、できる限りゆっくりとまぶたを開く。頭はもうすっかり冴えている。もう二度と眠りに落ちることなどできないこともわかっていて。でもまだ。冬の朝。まだ暗く、冷たい一月の朝。私はその日もまた、布団の中でむなしい抵抗を繰り返していた。長い長い、それでいて実は、ほんの一瞬の心の葛藤。

やがて無慈悲なアラーム音が、小さく鳴り出した。まだ二コール目ぐらいで、すばやく、そっとそれを止めた。私には選択の余地はない。答はあらかじめ決まっているのだから。

もうかなり前から、目覚ましになるよりも早く起きてしまう習慣が身についてしまっていた。起きる時刻はほぼ毎日決まっているのだから、体がそれに順応しきってしまっていたのかもしれない。前の晩にわざわざアラームをセットするのも、無駄な行為のように思えた。だが夜になれば、私は目覚ましをセットして眠ることだろう。そして次の日もその次の日も。このことをずっとずっと続けていくことだろう。……たぶん。

たぶん……？ たぶんだって？ ここに物事に対してすべて断定してしまうことを、どこかで恐れている私がいる。なんだか少しおかしくなって、私は寝たまま小さく肩をすくめる。

相変わらずねあなたは。

と、ここでもうひとりの私が顔をだした。

でも、今日は……今日はいつもと違うような気がしない？

私の問いかけに対して、別の私は笑って答える。

あなた、昨日も一昨日もその前もそのまた前も、そう言っていたわよ。そして明日もあさってもその次もそのまた次も、そう言うんでしょうね。

違う。違うわ。違うのよ。なんだか今日は……今日こそは……たぶん。

たぶん、ね。

と、ここでまた笑われた。

……。

さあ、おしゃべりはおしまい。早く布団から出て、朝ごはんの用意をしなくっちゃ。……彼のために。

彼のために……。そうだ。もう答は決まっている。私は暖かい布団に後ろ髪を引かれながらも起き上がり、すぐそばで目覚ましの音にも気づかずに熟睡している彼を起こさぬように気をつけながら、すばやく猫のように台所へとすべりこんだ。

フローリングの床の冷たさが、一晚かけて培われた私の体のぬくもりをすべて奪い去ってしまった。私は小さく震えながら、ケトルに水をいれてコンロの火をかけた。勢いのよいのは初めだけで、すぐに小さくかぼそくなつた炎がケトルを暖めだした。それでもこのコンロにしてみれば、精一杯の強火のつもりなのだろう。

もっとキッチンが広がったらよかったのに。と、いつも私は思っていた。単身者専用に使われたと思いきこのキッチンは流しも狭くコンロも一台しか置くスペースがない。だからまずお湯が沸くのを待つてから、次にお味噌汁を作り、それから炒め物にとりかかるという段取りを踏まねばならず、手間も時間もかかり過ぎてしまうのだった（炒め物が終わるころには最初の湯はすっかり冷め切っている）、また暖めなおさなければならぬ。しかもこの季節、こんな寒い場所で立ちっぱなしで待つていなければいなければならぬ。ないなんて、冗談じゃない。

この次の給料日には、電気ポットかホットプレートを買おう。本当は電子レンジがよいのだけれど。そうなれば朝晩の料理がだいぶ楽になる。でも、これ以上電気製品が増えたら、アパートのブレーカーが落ちたりしないだろうか。すでにこの段階でさえ、何度か停電になったことがあったのだ。アンペアだかボルトだかわからないけれど、電力を上げる工事って、どれほどの費用と手間がかかるものなのだろうか。安くすばやく済んでくれればよいのだが。そうで

なければ、また彼が機嫌を悪くしてしまうだろう。部屋の電力を上げることが、無駄な行為でないということをどのように説明すればよいのか、私は見当もつかなかった。

ケトルがシンシンと景気よく湯気を立て始めた。あわててコンロからそれはずして、夕べの残りのお味噌汁が入ったなべを出す。やれやれ。もう何も考えないようにしよう。どうせ答えなど出ないのだから。いや、答えはあらかじめ決まっているのだ。何も変わらない。何も変わるわけがない。彼のお給料と私のバイト代で買えるものなど、たかがしれている。それにきつと彼は、もう次の給料の使い道を決めてしまっているに違いないのだ。生活に関する支出は、私の乏しいバイト代から賄わなければならない。そうだ、私がほんのちよっぴり我慢すれば、わがままを言わなければ何とかなっているのだ。私は考えることを止めて、黙々と朝食の準備を進めることにした。

居間に戻ってコタツの上にお皿やお碗を並べた。結局今朝のおかずは、お味噌汁と目玉焼き。考えるのを止めたときは、どうしても一番簡単な献立になってしまう。さらに冷蔵庫からお新香（これも昨日の残り）とふりかけを出して、とりあえず準備完了。後は彼を起こして、ご飯とお味噌汁をよそうだけだ。もつとも、彼を起こす、彼を布団から引きずりだすというのが、毎朝の一番の大仕事なのだが。

「哲ちゃん、哲ちゃん」

彼の方を何度も大きくゆすった。彼は「ああ」とか「うーん」とか、声にならない声をあげて、なかなか起きようとはしなかった。

「哲ちゃん、早く起きて。お味噌汁冷めちゃうよ」

「あ、ああ……。うーん」

と、今度は私に背を向けるように寝返りをうった。

「哲ちゃんつてば……」

「うつさいなあ……。いいよ、いらねえよ、朝メシ……」

「駄目だよ、哲ちゃん。ちゃんと食べないと」

「……」

「……哲ちゃん」

「別に毎朝ちゃんとつくるこたあねえんだよ。朝飯なんてさあ……。それよか、もう少し、寝かせてくれよ……」

一緒に暮らすようになってからはじめて知ったのだが、世の中には毎朝ちゃんと食事をしないで、そのまま学校なり会社なりに行ってしまう人が本当に存在するのだった。私にはそれがどうにも信じられないでいた。私のように、あんな家庭で育った者ですらも、朝食だけは家族全員でちゃんととっていたというのに。彼に言わせれば、自分は低血圧だから、朝は弱くて食欲もわかないのだということだが、その実単なる宵っ張りなだけで、夕べも遅くまでゲームに熱中していたらしく、見ればテレビの側には無造作にそのソフトが転がっているのだった。

私はあきらめずにもう一度声をかけた。

「もう、哲ちゃんてば、早く起きてよ。ねえったら、哲……」

と、私がまた彼の肩に手をかけたとき、背を向けていた彼はいきなりその手をつかんで、ぐいと自分の方へ引き寄せた。私はそのまま彼に覆いかぶさるように倒れてしまう。そして彼は振り向きざまに、下から強引に私の唇に自分のそれを合わせてきた。彼の唇はかさかさ乾いていて、その感触もただ痛いだけであった。私はすぐに離れようともがいたが、いつのまにかもう一方の手が私の後頭部を押さえ込んでいて動けない。彼はそのまま体勢を回り込ませて、いつしか彼が私に覆いかぶさるようになっていた。その舌が無理やり私の口をこじ開けようとしている。さらに今度は、さっきまで私の手をつかんでいた方の手が、私の胸の辺りを撫で回し始めた。

「だ、駄目。駄目だよ、哲ちゃん」

なんとか口を離しながら私は言った。

「いいじゃんかよ、な？」

彼の愛撫も彼の接吻も、ただ痛いだけで、苦痛でしかなかった。

「だめ、駄目だったら……」

彼の息が荒くなってきた。私は必死に抵抗していた。

「ゆうべもしたじゃない。だから……」

「すぐに済ますからさ」

彼の舌が、私の首筋へと流れてくる

「……こんなこと、してたら、会社に遅れちゃうよ」

「いいんだよ、……あんな会社なんて……」

「やだ、駄目！」

私はありったけの力で、彼の体を突き飛ばしてしまった。彼は私
がこれほど嫌がるとは思っていなかったのか、無様にその場にしり
もちをついて、あつけにとられた顔をしていた。

「……！」

だがそれはほんの一瞬のことだった。彼はすぐに不貞腐れてまた
横になり、布団を頭からかぶってしまった。さらにいかにも、とい
った感じの大きなため息までついて。

ため息をつきたいのはこちらの方だ。体の中から怒りと恥ずかし
さがこみ上げてきた。だがそれを表に出すわけにもいかない。せつ
かく作った朝食が無駄になってしまう。私は何とか理性の力で、そ
れらを押さえ込み、自分の服装の乱れを急いで直した。

「哲ちゃん……」

「わかつてるよ。うるせえなあ。起きるよ。起きりやあいいんだろ」
彼はぶすつとした表情で大声を上げ、布団を蹴り上げて立ち上が
った。わざと大股で歩いて、コタツの中に入り込むとすぐにテレビ
のスイッチを入れた。私は彼の布団を大急ぎでたたんで、彼の対面
に座るとご飯とお味噌汁をよそって彼の前に並べた。彼はわざと
私の方を見ようとはせず、テレビに集中している振りをしながら、
ゆっくりともそもそ朝食を口に入れ始めた。

本当はテレビを見ながらの食事など止めてほしかったのだが、あ
えてそのことは口には出さなかった。とにかく今日もなんとか彼を
この朝の膳に座らせることができた。それで十分だった。それにこ
の不機嫌な素振りも、彼の単なるポーズでしかないことも、私は知

っている。

彼はこれでも私より年上なのだが、なかなか自分の思い通りにならないことがあるとすぐに、拗ねたり甘えたり不貞腐れたり、まるで幼子のような態度をとる。特に最近はその傾向が顕著だった。実家にいたときもそうだったのだろうかと考えることもあるが、結局のところ、何事につけいつも私の方から折れてしまうような態度が、それを冗長してしまったのだろう。なにしろ私には、勝手にここに居座ってしまったという負い目がある。ここを追い出されてしまったのは、私には行くあてがないのだ。

食事は淡々と進んでいった。その間、二人は一言も口をきかなかった。彼はときたまテレビのチャンネルを変えたりしていたが、やがてすっかり食事を終わると、ごろんと横になり、続いてタバコを吸いはじめた。寝ながらタバコを吸うことに対しても思うことはあったが、何はともあれ今日も残さずすべて食べてくれた。なんだかんだいっても、そのことが私にはうれしかった。

私もあたふたと自分の食事を済ませ、食器を片付け始めた。彼はタバコを吸い終わると、のろのろと起き出して出勤の準備に取り掛かりはじめた。もう後はお決まりの段取りだ。ひげをそり、歯を磨き、パジャマを脱ぎ捨てて、適当にスーツとネクタイをそろえて身づくろいを整える。あまり時間はないはずなのだが、動作はどこか緩慢だった。言いたいことは山ほどあったが、それは彼にとっても同じことだろう。

「じゃあ、行くから」

彼が次にやつと口を開いたのは、もう玄関で靴を履き始めていた時だった。そこで私はいつものように、こう尋ねた。

「今日は、遅いの？」

「……さあ」

それに対する彼の返事は簡単なものだった。

「……そう」

私もただ、それだけ返した。

「いつてらっしやい」

「あ、……ああ」

彼が外へ出る。私はサンダルをつっかけて、後に続いて見送りに出た。彼はもう私の方は見ずに、大儀そうに中途半端に右手を上げただけで、そのまま駅に向かって歩いていった。

もっと話したいことがあるはずではないのか。

もっと聞きたいことがあるはずではないのか。

私が彼のアパートへ転がり込んできてから、半年ほどたっていた。望まれて一緒に暮らし始めたわけではないから、このようになってしまふのは仕方がないことなのかもしれない。それでも最初のうちは二人の間にコミュニケーションのようなものはあつたし、それを作ろうとする努力もあつた。それがまったくなくなってしまうのは、いつからだったろうか。彼の方が私を避けようとし始めているような気がするの、考えすぎなのだろうか。

何も言わなくても、何も語りあわなくても、本当に心から分かり合えるカップルもいるかもしれない。だが、私たちの場合は逆だ。言わなければならぬことを黙っているうちに、言うてはいけないうことばかりが口に出ようとしていた。そしてそれが、つい漏れてしまふ事が恐ろしくなっているのだ。それでこの関係が壊れてしまふのが怖いのだ。特に私は、それを非常に恐れていた。

でも、このままではいけないこともわかつている。まだ、遅くはないのだと思いたかった。二人でじっくり話し合う時間を持つ。そうすれば彼だってきつとわかってくれるはず。そしてお互いに至らぬ点を直していこう。私はこれから、彼と一緒に生きて行きたい。そのためだったら、どんなことでもするだろう。そう思っていた。

あの家には二度と帰りたくない。

あの人たちの顔など二度と見たくない。

とりあえず、結論は先送りとした。私は振り返ってアパートに戻ろうとした。

と、その時。

遠くに一人の男性が目に入った。

このあたりは同じ管理会社のアパートが均等に並んでいて、その真ん中を突っ切るように大きな砂利道が通っている。私たちの部屋はその並びの一番はずれにあるため、駅の方へ向かうには、まずはこの道をまっすぐ通り過ぎていかねばならない。そしてこの通りのほぼ真ん中に位置する辺りに男が立っているのだった。側のアパートの壁にもたれかかり、両の手をポケットに入れたまま寒そうにたたずんでいる。

こんな時間に、こんなところで何をしているんだろう。私はそう思った。おそらく誰でもそう思うに違いない。

なにより目を引くのは、その男の服装である。コートもズボンも靴もすべて黒、黒黒黒の黒一色だった。さらに黒い帽子を目深にかぶっているため、顔の表情もほとんどうかがい知ることができなかった。いったいいつからそこにいたのだろう。次第に明けてきたこの風景の中で、男が立っている位置だけが暗く、異様な雰囲気も立ち込めていた。

やがて彼がその男の前を通り過ぎた。すると黒い男はゆっくりとゆっくりと動き始めた。手は相変わらずポケットに入れたままで、背を丸め、体を小さくかがめるようにしながら、彼の後に続いて歩き出した。まるで彼の後をつけ始めたようであった。

尾行　。あまりにも不自然な行為であったが、私にはそんな言葉しか思いつかなかった。

もしそうだとしても、だが、何故？

彼の方は、そんな男の行動にはまったく気がついていない様子だった。男はそのまま影のように歩いていった。私は大声で彼にその男の存在を知らせたかったが、それより前に彼は通りのつきあたりまでたどりついてしまい、右に折れて見えなくなってしまった。

やがて男もその突き当たりにたどり着いた。だがすぐには曲がる

うとせず、その場に少し立ち止まっていた。

そして、その後。

男が、私の方へ、ふりむいた。

かなり遠く離れていても、そんな状態であつても、何故か私を見ていることだけは、はつきりとわかる気がした。

さらに、男は。

笑った。

「……」

それからまたゆつくりと、やはり彼の後を追うかのように、右に曲がって見えなくなった。

はつきりと確認したわけではない。何度も言うが、遠かつたし、帽子のせいで顔の半分は隠されていた。

だが笑ったのはわかった。わずかではあるが、唇が確かにゆがめられた気がする。はつきりと私を認識した上で、そんなしぐさをしてみせたのである。

私の体の中から、何かがつきあがってきた。体の震えがとまらない。もちろん冬の朝の冷たさのせいではないし、それどころか、恐怖とも違う感情のうねりだった。

ざわざわと指先にまでみなぎる緊張。あの男の存在が、何かを私に伝えている。これはいったい何なのだろう。

……いや、私にとってこの感覚は初めてのものではない。

ずっと暮らしてきたあの家を出ようと決意した時。

勤めていた会社を辞めてしまった時。

そして、彼に抱かれた時。

期待と不安、希望と絶望。予測できない、漠然とした思い。その後の私は、いつも今までの自分とは違う自分になっていた。

私は悟った。そうこれは、それまでとは何かが大きく変わることの予兆のようなものでないのか。虫の知らせ、という言葉もある。それとも単なる私の考えすぎなのであろうか。

でも、と一方で私は思う。あの男を見かけた時、あの男の笑みを

見た時、何故この感覚が感じられたのであろうか。私は勘の鋭いほうではないし、予知能力に長けているわけでもない。

あの男の存在が、私に何か大きな変化をもたらすとも言つのか。だが一体……どんな？

私にはわからなかったし、もはやあの男の姿もどこにも見えない。私はしばらくの間、ただ、その場に立ち尽くすだけなのであった。

その二

現実の生活という大きな壁の前には、私のちっぽけな空想など、いつも簡単に吹き飛ばされてきたものだ。

しかし、今回に関しては違っていた。アパートに戻って洗い物をしている時でも、バイト先のコンビニへ向かっている時でも、こうしてレジにたっている時でも、私の心の中にあの黒服の男の姿が焼きついて離れようとはしなかった。

あの男は一体何者なのだろう。何故、彼の後をつけるようなまねをしたのか。あの時の笑みの意味は……。それにしても、どうしてあんな異様な格好をしているのか、それともすべては単なる偶然で私の見間違いだっただのかも……。いや、しかし……。

はつきりとした答えの出るはずのない問いかけほど、いらいらさせるものはない。

ずっとぐるぐると同じような問答が、頭の中を駆け回っている。もはやこれだけで私はいささか疲労を感じ始めていた。これからが忙しくなる時間帯だというのに。私はまわりに気づかれぬようにそつと息をついてから、顔を上げた。

近くに大学と高校があり、アパート・マンションもこの近辺に集中しているせいか（ちなみに私たちのアパートも歩いて十数分程度の場所にある）、お昼から夕方、すなわちお昼休みから下校時間を過ぎたあたりまでの時間帯の、この店の込みようは半端なものではない。二つしかないレジをそれぞれフル稼働させても、店の中をぐるりと輪を描くように人の列が並んで、それが絶えることがない。目の回るほどの忙しさとは、このことをいうのだろう。

どうも人が大勢いるところが苦手な私にとって、この時間帯の人口密度の高さは拷問でさえあった。さらに加えていつ果てるともわからないレジうちの業務で、バイトが終わるころには、身も心も朽ち果てそうになるのが常であった。だが今日は、もう開始直前から

精神がなえてきているのである。 やれやれだ、まったく。

だからといって、この仕事を辞めようとか、手を抜いて楽をしようなどと考えたりはしなかった。別にバイトをコンビニに選んだのは、深い考えがあったわけではない。アパートから大して離れていないし、時給も悪くなくて、たまたま募集の張り紙を見て決めたに過ぎない。でも、何か資格を持つていてもないいい年をした女が始める仕事としては、こういう接客業が一番手っ取り早かったのだ。それにこの手の店なら、バイトの過去や素性について、あれこれ詮索されないだろうという読みもあった。きちんとそれなりに仕事をしていれば、それで文句はないはずである。また仕事であるのだから、きちんとしなければ、とも思っていた。

やがてぼつぼつとお客さんが入ってきたかと思うと、いつの間にか店の中はいろいろな人たちでごった返すようになっていた。学生、主婦、サラリーマン、人ごみの中を危なっかしく走り回る子供たちに、人の流れをせき止めてしまうお年寄り。目的のある人ない人様々だが、今の私の仕事は人間観察などではない。ただの会計係である。私はそれに集中することにして、次々と並んでいるお客の一人一人を処理していった。まるでレジうちの機械になった気分だった。相手に関心を持たず、何も考えず、ただ出された商品をスキャンし、値段を読み上げお金をもらう。おつりの間違いだけ気にしていればよかった。

ところが、何の気なしにたまたま店内に入ってきた一人の客を目にした時、たちまち私は機械から生身の普段の自分へと引き戻されてしまったのである。

あの男だ。

間違いない。いや、見間違うはずはない。今朝の謎の男である。全身、黒黒黒の黒ずくめ。ちらりと垣間見えた感じでは、シャツや靴下までも黒のようであった。私の立っているレジから入り口まで、それほど離れていないからよくわかる。それにまた、先ほどは気がつかなかったのだが、近くで見ると驚くほど背が高い。やや猫背気

味ではあったが、二メートル近くはありそうだ。

男はゆっくりとした足取りで店の中を歩き始めた。ほかの一般的な客のように、雑誌のコーナーで立ち読みしたり、パンや弁当を物色しながら立ち止まったりということもなく、しばらくの間、ただ歩き回っていた。一步一步、その足取りを確かめるかのように。男の顔はまっすぐにその進行方向を向いたままだ。自分の目的のものを探しているという風でもない。いろんな人で雑然としている店内を、静かにスローモーションのように歩いている。それにあれば目立つ出で立ちでありながら、誰もあの男には注意を払っていないのが不思議だった。まるで私にその姿を見せ付ける、ただそれだけのために徘徊しているかのようなうだ。見える人しか見えない、幽霊のような存在。事実、私は男の姿が気になってしまい、またその動きから目を離すことができずにいた。そして何故あの男がこの店に来たのか、私には理解できずに困惑していた。

「ちよつと！ お釣り足りないわよ！」

耳障りなその金切り声に、はっとしてすぐ正面を見てみると、小太りで眼鏡をかけた女性が、きつと私の方をにらんでいる。周りの空気が、一瞬きゅつと萎縮した。片手にまん丸に膨れ上がったうちの店のビニール袋を持って、もう一方の手のひらにレシートとお札交じりの小銭を乗せて突き出していた。

「え、あつ、あの、何でしょう」

不意をつかれて、とんちんかんな受け答えをしてしまった私を見て、相手はその太い眉をさらに吊り上げた。

「なんでしようじゃないわよ。あたし今、一万円札を出したじゃない、なんでお釣りがこれだけなのよ。五千円足りないじゃない」

声がいつそう高くなり、頭に響く。レジ画面にはまだその会計跡が残っていた。食料品やら雑貨やらがずらつと並んでいて、合計金額は三千百三円。預かり金をみれば、五千円となっている。

「あの。でもお預かりしたのは五千円のはずじゃ……」

「馬鹿言わないでよ。わたしは一万円札を出しました。あなた何を

見てたの」

私が見ていたのはあの男だった。なんということだろう。私はそちらに気をとられていて、この客が何を買ったのかも、いくらお金を払ったのかも、まったく覚えてはいなかった。無意識にすべてを処理してしまっただけ。さらに悪いことに、預かったお金までもうすでにレジの中に納めてしまったようなのだ。

「何をばうつとしているの。早く五千円返さないよ！」

店中の視線がここに集まってきているのがわかる。普通こういった場合では、いったんレジ業務を中止した上で、店長なり別な社員の立会いの下で、中のお金と記録されたお金の額を照らし合わせてみることになっている。だがこれはかなり時間と手間を必要とする作業なのだ。当然、このレジは停止せねばならない。その間、この女性をはじめ、他のお客にも待つてもらうか、別のレジに並びなおしてもらわなければならないのだ。まだまだ客の入りのピーク時は過ぎてはいない。さらに大きな混乱が予想され、胃が締め付けられる思いがした。それになにより、私には自信がなかった。もし本当にこの女性の言い分が正しかったとしたら？ この手の客が黙っているはずはない。さらに混乱は大きくなるだろう。私は怖かった。なんて時に、なんてミスをしてしまったのだろう。

私の目は誰かの助けを求めてさまよい始めた。店長の姿は、ざっと見たところ店内のどこにも見えなかった。おそらく裏で品だしが何かを行っているのだろう。私は隣のレジを見た。その二人は忙しそうに客をさばっている。この状況が伝わっていないはずはないと思われるのだが、私よりも古株のはずの二人は、変に係わり合いになるのを恐れているかのように、ことさら自分たちの客に集中しようとして、壁を作ってしまったていた。

女性の後ろには、こちらでも何人も順番待ちをしている客たちがいる。誰もみな、非難と同情の入り混じったような目でこちらを見ている。もちろん、私を助けてくれようなどとは、誰も考えてはいないだろう。私はすぐ隣で袋づめをしていた同じバイトの女の子を見

た。すぐ側にいるのだから、お金のやり取りも見ていたはずだが、駄目だった。客の剣幕に押されてか、下を向いてしまっている。早くこの身に降りかかった災難が、過ぎ去ることを願い、石になっている。だがそれは私も同じ思いだった。次第に私はひとり追い詰められていった。

「……どうも申しわけありませんでした」

結局、私はレジの中から五千円札をだして、そのまま手渡ししてしまった。相手はくどくどとしつこく悪態をつきながらも、やっと帰ってくれた。私はすぐに何事もなかったかのように、次々と残りの客の応対を始めた。だが頭の中は、怒りと後悔と自己嫌悪とがぐるぐる混じり合っていた。何もかもかなぐり捨てて、一人になりたかった。

もう何もしたくないし、考えたくはない。だが私はこの場を離れることはできない。仕事が終わるまで、まだまだ時間はあった。この業務をこなすことが、私の義務なのだ。店内には相変わらず多くの人がたむろっていた。しかし誰一人として、私を助けてくれる人などいないのに。

そうだ。あの男だ。元はといえば、あの黒服の男が現れたからなのだ。あの男のせいだ。だんだんと私の怒りの矛先は、そちらへと向けられていった。

「さっきの……アレ……ちょっとマズかったんじゃないですか」

消えているような細かい声が隣から聞こえてきたのは、やっとレジに並ぶ人が途絶えてしばらくしてからだった。

「さっきのって？」

私がそう言って隣を見ると、相手は下を向いてまた固まっていた。必死に自分の心の奥底へ沈めようとしていたものが、また全身に再び侵食し始めているのを感じていた。

「あの……さっきのおばさんの……お金……」

声はさらに小さくなったが、私ははつきりと聞き取ることができた。

確か近くの大学に通う女子大生だと聞いたことがある。夕方や夜ではなく、日中のこの時間帯に学生が入ることは珍しい。そのせいかいつも小さくなっていて、私を含めた他のパートの人たちに対しても、どこか遠慮ぎみに距離を置いているように思えた。

「ああ、さっきのこと。……でも、アレは、あの場合は仕方のないことだったじゃない」

「……でも……」

と、ここではじめておずおずと上目遣いに、私の方を見た。何ヶ月も一緒に仕事をしてきているのに、この娘の顔をはつきりと見たのは、これが最初のような気がする。それほど印象の薄い少女であった。そして今はその目の奥に、非難の色が見え隠れしていた。……勝手にお金を渡してしまうなんて……。

あなたに私を責める権利があるというの。あの時、かわり合いを恐れて、小さく石のように固まっていたのはどこの誰かさんでしたっけ。

「大丈夫よ。もし清算の時にやっぱり五千円足りなくなってしまうとしても、それは私が起こしたミスだから。私が責任を取るわよ。あなたは何も心配しなくていいのよ」

私は「私のミス」というところを強調して、できるだけ明るく笑顔で答えた。

「そうですかあ。……なら、いいんですけど……」
いいわけないじゃない。

私は怒鳴りつけてやりたいのを抑えて、つとめて冷静な振りをした。相手はまた視線をそらして、私との間に大きな壁を作ってしまった。

以前、町で偶然この娘を見かけたことがある。同年代の男の子を含めた何人かのグループで、通りのはずれでなにやら騒いでいた。大きな声でケタケタ笑いながらお喋りをし、煙草も手にしていたと思う。今のような、この仕事場での姿とはあまりにもかけ離れていた。なので、最初はこの目が信じられなかったものだ。

きつとあの時の姿が、本当のこの娘の正体なのだろう。ただ、ここでは猫をかぶり、責任やつらいことから逃れるために子供ぶつてさらに本心をひた隠しながら、ひたすらバイトの終わる時間を待っている。心は常にここではないどこかへと、飛び立っているに違いない。

私はついまさまざと、横目でその顔を見ていた。軽くパーマをかけたショートヘア。やや面長の顔立ちだが、整えられた眉に細い目、高く上がった鼻と小さな口。よく見れば、薄いメイクもしているようだ。耳にはピアスをつけている。背は私と同じくらいだが、やせていてすらりとした体形だった。なにより、美人だな、そう思える雰囲気がかもし出されていた。

ボーイフレンドもきつといるのだろう。甘えたしぐさも似合いそうだ。その指の指輪は、彼氏からのプレゼントなのだろうか。

でも、社会に出れば、あなたのような態度では通用しないのよ。そう私は言つてやりたかった。とても厳しくてとてもつらいものなのよ。すると、そんなことはわかっていて、と返されるかもしれない。だから、今を楽しんでいるのだと。

今を楽しむ……私にはできない生き方だ。

というより、できなかつたと言うべきだろう。今も昔も、時がたつのを忘れるぐらいに遊んだり、思いつきりその時その時を楽しんだりした記憶などない。私がうらやましいと思つたのも事実だ。私は人に甘えたことなどなかつた。いや、甘えさせてはもらえなかつたのだから。

私は幼い頃から、行動や言動に関する責任を、自分でとらされてきた。それは子供の自主性を重んじていたように見えて、その実はまったくの逆であつた。あの人たち　私の両親たちは、自分の子供を思いの通りにコントロールしようとしていて、無理な要求を私に押し付け、その成就を私に強いたのだった。あくまで決定権は両親にあり、なにをするにも厳しい目が光っていた。それでいて、その結果の不始末は全部私がとらされた。私の怠惰と傲慢が、失敗の

理由であるというのだ。そんなことが積み重なって、私はあの人たちの望む人間には決してなれないまま、成長していったのだった。

そのためかもしれないが、私はいつしか何に対しても誰に対しても、強い負い目を常に感じるようになってしまった。その人の嫌われないように、その人の望むように行動しようとする。いつも相手の顔色を伺い、たとえ相手から今日のようにひどい仕打ちをうけたとしても、笑顔を作り、何でもないのでという素振りを取った。そうすることで逆に、相手とのかかわりを最小限に食い止めようとしていたのである。かかわりがなければ、責められることもない。そうして私はずっといつどこでも誰からも、逃げて逃げて逃げ続けるようになっていた。

そして……いつか、彼からも……。

「いらっしやいませ」

お客さんの気配がして、私は仕事モードに戻った。またレジうちの機械になることにしよう。先ほどの出来事はあくまで特別なのだ。いつもこんなことばかりではない。ただこの日に限って……たまたま……。

私はまた固まってしまった。

目の前にあの男が立っていたのだ。

「……」

私は茫然と男を見ていた。まさに手が届く距離に立っている。間近で見ると本当に大きい。ただ全体にやせているためか猫背のためか、それほど威圧感を感じられなかった。顔は丸く、肌の色はひどく白い。年は二十代の後半ぐらいだろうか。下から見上げていった私の視線は、やがて男の目の辺りで止まった。

朝のあの通りの端で、ちらりと垣間見たような目。やはり帽子は深くかぶられていて、長めの前髪に隠れがちであったが、はつきりと確認することができた。そして大きな瞳はまっすぐ、私を見ていた。そしてそこに哀れみのような色を見たのは、私の思い過ごしであつたろうか。先ほどのあの客とのやり取りを見られたのかもしれない。

ないという恥ずかしさが、私の脳裏を掠めたからかもしれない。

「あの……どうかしたんですか」

隣からの声が、私を現実に戻した。見れば私たちの目の前には、缶コーヒーがひとつ、ぽつんと置かれている。私はあわてて、商品のバーコードをスキャンした。

こちら百二十円になります。シールで失礼してもよろしいですか。……恐れ入ります。はい、ちょうどお預かりいたします。レシートのお返しです。ありがとうございます。またお越しくださいませ……。

もう二度と来ないでもらいたい。

男は律儀にレシートを受け取ると、礼を言うわけでもなく、そのコーヒーと一緒に無造作にコートのポケットに入れ、またゆっくりとした動作で今度こそ本当に外へ出て行った。レジを離れてからは、私を見ることは二度となかった。

どうしてあの男はまた姿を現したのだろう。それも今度は、私のすぐ目の前に。あの男の目的は彼ではなかったのか。彼の後をつけていったように見えたのは、私の早とちりだったのだろうか。それとも……。

ひよつとしたら。

あの男の目的は……私？

……そんな馬鹿な。何を考えているんだ私は。

今度の考えも、何一つ確証などありはしない。あの男は、二度にわたって私の目の前に現れた。それだけにすぎないのだ。言葉を交わしたわけでもなければ、指一本、私に触れたわけでもない。

ただ。

あの目。

あの目がとても気になった。

何故、そんな風に思っただろう。私の単なる被害妄想に過ぎないのか。

何故何故何故……。

頭の中を暗い色をした渦が、すごいスピードで回りだした。渦巻きの中心にあるのは、あの男の目だった。その目はやさしかったが、冷たく、同情的で、何か確固たる信念があるように思えた。

それからはさらに、もう仕事どころではなくなった。私の顔色は見る見る悪くなっていたに違いない。私がレジを離れるまで、店全体を重い空気が占めているのも感じていた。それでも何とか最後までやりとおすことができたのは奇跡としかいいようがない。肝心な時にいなかった店長をはじめ、他のパート店員の人たちも負い目があるせいか、表面的にはひどく私をいたわってくれていた。

バイト終了間際のレジ点検で、きっかり五千円のマイナスが出た。しかし私にはそんなことはもうどうでもよく、店長も何も言わず、私のこの日の仕事はこうして終わった。

その三

全身に感じるだるさ。体中の血液が、重油かコールドールにかわってしまつたかのように、体が重く感じられる。私は店の外でしばらくの間、ぼーっとしていた。帰りたくなかつた。どこかであの男が待ち伏せしているように思えた。アパートへ戻れば、あの男がまた姿を見せるのではないか。あるいは、いきなり通りの向こうから飛び出してくるのではないか。

確かに根拠のないことだ。実際、この位置から見える範囲には、あの男の影すら何処にも見えはしない。先ほどの出来事などは、所詮は単なる偶然であつたのかもしれないのだ。

だが、私の心の中をその影が、夜の訪れよりも早く暗く包み込もうとしていた。

未だ経験したことのないことに対する怖れ。はつきりとした確証のないことへの不安。答えの出ない現状への苛立ち。

説明しようと思えば何とでもできる。しかし、そのすべてが正しく、すべてが間違つているように思えた。

わからない。いや、わかりたくない。

私はずっと店の前でぐずぐずしていたが、やがてやっと意を決して歩き出しても、まっすぐ自分のアパートへは向かおうとせず、反対へ反対へ、逆の方角へと歩いていった。そのままぶらぶらと町の中を彷徨つていった。

道の街灯が次々と明かりをつけていく。いつしか日は落ち、辺りもすっかり暗くなつていた。だがまだ時間帶的には早いせいか、学生街でもあるこの周辺は、人の往来が結構あつた。私はその流れの中を、縫うようにして歩き続けていた。

角に来れば意味もなく曲がり、うつむいたまま、のろのろと足を進める。そんな行為を何度か繰り返し、やがて何度目かの角を曲がつた時、私は大学の正門の前にいた。最期の授業が終わつたところ

なのだろうか。何人もの学生が連れ立って外へ出て来た。私はすぐ側の街路樹の前に立って、その光景を眺めていた。

一瞬、さっきまでレジで共に仕事をしていたあの娘が、友達を連れ立って中から一緒に出てきたように見えた。確かこの大学の生徒のはずである。しかしそれは、ただ髪型が似ていただけの別の女の子であった。なにやらささやき合って、何が可笑しいのか皆でクスクス笑いながら私の前を過ぎていく。あれが最近流行の服装や髪型なのだろうか。このところテレビも雑誌もほとんど目にしない生活だったので、流行に関してはまったくの無知になっている。私はただ無造作に後ろに束ねただけの自分の髪を、そつと撫でてみた。

もしも進学し、いずれ大学へと行っていたなら、私もあの女の子たちのようになれただろうか。あんな風におしゃれしたり、友達とふざけあったり、楽しい毎日を送れたらどうか。

……いや、あの家にいた限り、あの人たちと一緒にいた限り、それは無理なような気がした。ずっとずうっと悲惨な毎日を送っていたかもしれない。

でもやっぱり……進学はしたかった。特に何がしたい何を学びたいと言うことはなく、また特別な憧れのようなものではなかったけれど、少なくとも私には、ある自信のようなものを持つことができたはずだ。あの人たちに対しても、もっと違った接し方ができたはずなのだ。

だが結果は、現実はそうではなかった。私はますます肩身の狭い思いをするような境遇に陥り、あの人たちにとっては、自分たちの期待を裏切り続ける酷い厄介者となった。もしあの頃、彼と知り合っていなければ、どうなっていただろう。彼はそこから逃げる勇気を与えてくれたのだ。でも。

あの頃とどこが変わっているのだろう。

あの頃と何が変わったというのだろう。

私は首を振った。考えても仕方のないことだ。

学舎の中に入ろうと思えば入れた。一度はその中を歩いてみたい

とも思っていた。しかし私は向きを変え、外の壁に沿って歩き出した。この塀の向こうは、これまでもこれからも私とは別の世界なのだ。はからずも感傷的になってしまった自分を戒めて、もうなるべくここへは来ないようにしようと心に決めた。

私はまたしばらく歩き続けた。結局、どんなにあちこちを逃げ回ってみても、私の帰る場所はある部屋しかないのだ。頭をかき回し、自分の小心ぶりに立腹しながらも、それでもまだ、私はぐずぐずしていた。いつしか小さな通りのわき道に入ってきて、周りには誰もいなくなってしまうていた。独りぼちになっていた。

途端にさびしくなってしまう、私はやつとあきらめて、アパートへ戻ることにした。こんなところをうろろろしていても、何にもならないのだから、と自分に言い聞かせるのだった。広い通りに出るべく、振り返りもと来た道をたどり始めた。ところが。

あの男は、またしても私の前に現れたのである。

見間違うはずはない。私から十四五メートルくらい離れた通りのはずれに、あの男はいた。私がここにいることを知ってか知らずか、まっすぐにこちらへと向かっていた。本当にあの男は現れた。私はあわてて踵を返し、走り出した。

あの男から逃げなければ。

逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ……。

私の足であの男から無事逃げおおせるかどうか、自信はなかった。ひよつとしたら、ずっと尾けられていたのか。そうでなくとも、私のはあの男の姿を見た時、悲鳴をあげてしまったかもしれない。私が走り出したのを、目撃されたかもしれない。

私は走った。走って走って走り続けた。

こんなに走り続けたのは、いつ以来だろう。不意にそんなことが頭をよぎった。いつだったとしても、その時は何かの目標を目指して走っていたはずだ。だがこの時はそうではなく、はつきりとした

ゴールなど存在しなかった。ただ逃げるだけなのだ。息はすぐにあがり、太ももが張ってきて、かかところが痛くなってきた。でも立ち止まることも、後ろを振り返ることもできない。私の後ろには……。

あの男が追いかけてきているに違いないのだ。

あの男から少しでも遠くへ逃げるのだ。

やがて、なぜ逃げるのかということも考えられなくなっていた。

もはや本能的な恐怖で、私は走っていた。

走るスピードが次第に遅くなっていくのがわかる。やはり体力がついていかないようだ。それでも私は何とか気力を振り絞って走ろうとした。汗が流れ、目の中へと入ってきた。私は前がよく見えな
いままに、すぐ前の角を曲がろうと左におれた。

「いつてえっ!!」

ゴチン、という鈍い音がして、目の前を火花のようなものが光った。私ははね飛ばされて、真後ろにドスンと尻もちをついてしまった。頭に激しい痛みがはしる。その痛みに耐え、目じりの汗をぬぐって前をよく見てみると、そこに高校生ぐらいの三人の少年たちがいた。そしてその中の一人が、私と同じように頭を抱えて座っている。

「……このババアッ! どこに目エつけてんだよっ!」

その子が私に向かって怒鳴りつけた。確かに原因は私の不注意だった。いつもの私なら素直に謝つたろう。だがその時は違った。あの男に対する見えない恐怖が私をおかしくしていた。早く逃げなければ。私は頭と腰をさすりながら立ち上がり、急ぎ足でその三人の横をすり抜けようとした。

「……待てよ!」

ぶつからなかった方の一人が、私の手首をつかんだ。

「てめえからぶつかっておいて、謝りもしないで逃げるつもりかよ!」
そういつて私の腕をねじりあげ、正面に回りこんできた。顔立ちにはまだ幼さを残していたが、髪を茶に染めてサングラスをかけていた。

「ご、ごめんなさい。急いでいたものだから……。本当にごめんなさい」

私は腕の痛みには耐えながら、必死に何度も頭を下げた。その時はまだ、この三人よりもあの男のことが頭を占めていた。とにかく、早く開放されたかった。

「謝ったぐらいで済むと思ってんのかよっ！」

別の一人が私の髪をつかんで、強引に頭を上げさせた。謝れと言ったのはそちらではないか。見るとこちらは肩までかかった長い髪で、ひげも伸ばしていた。

「いててて……。おー痛て。なんて硬い頭していやがんだ、このアマ」

倒れていた最後の一人が立ち上がった。頭は丸坊主にしていて、耳と鼻と口にそれぞれ大きなピアスをつけていた。

「おい、大丈夫かよ」

長髪がピアスに声をかけた。

「ぜんぜん大丈夫じゃねえよ。痛てえなあ……。おい、見てくれよ。でっけえ瘤ができちゃったよ」

「どれどれ……。あー、こいつか。こいつはひでえな」

サングラスがピアスの頭をさすってそう言った。その間も、もう一方の手は私の腕をつかんだままである。

「いてえなあ。おい、あんまり触るんじゃねえよ。……。腰もよお、しこたま打ち付けたようだよ。いててて。こりゃ、骨まで折れちゃったんじゃあねえかな」

そんな馬鹿な。それぐらいで折れるはずなどないじゃないか。本当なら立つことだってできないはずだ。ピアスは口元にいやらしい笑みを浮かべ、何やら他の二人に目配せをした。

「そうかそうか。そりゃあ、大変だなあ……。ま、そんなわけだ。だからよ、ちょっと治療費の方もだしてもらわなきゃな。こいつのために」

この少年たちは何を言っているの？

サングラスが手にさらに力を込めてきた。激痛がして、思わず顔が歪む。崩れ落ちそうになる私を、長髪が髪をつかんだまま引き上げた。

「悪いのはぶつかって来たアンタの方だからな、これは支払うのが当然だな」

長髪は今度は私の頭を押さえ込み、また引き上げるといふ動作を繰り返した。私はそうやって何度も頷かされた。

「おっ、いいってよ。話がわかるねえ」

「今、持ち合わせがないんだったら、体で払ってくれてもいいんだぜ」

と言って、サングラスは私の胸の辺りに手を出した。私は必死になってその手を振り払った。

「へへへ。コイツ見かけによらず、けっこう胸あるぜ」

サングラスが下卑た甲高い声で笑った。

「どれどれ」

すると今度はピアスがすばやく私の背後にまわりこんで抱きついてきた。両の手で私の胸をわしづかみにし、さらに股間を腰の辺りにすりつけてきた。

「お願い、やめて！」

私は体を震わせながら叫んだ。

「おっおっ、結構いい感じじゃんかよ」

「このおねえさん、結構好きモンだぜ。せっかくだから、お言葉に甘えてやつちまおうか」

さらに悲鳴を上げようとする私の口を、ピアスの手が覆ってしまった。さらに私は三人に捕らえられたまま、ずるずると引きづられていった。

「おい、足持てよ足」

じたばたと暴れる私の両の足をサングラスが正面から抱え込んだ。多勢に無勢だ。まわりには他に人影も見えない。このままだここに連れて行かれて、なぶり者にされてしまうのか。嫌だ。そんなのは

嫌だ。誰か、誰か助けに来て。哲ちゃん……。

その時、

風が、

一瞬の風が、

私の頭上を通り過ぎた。

と同時ににぶい音がして、私の正面にいたサングラスが、ごみ屑のように吹き飛ばされていった。それから目の前が一瞬暗くなった気がして、別の人間が私の目の前に立ちふさがったのだった。

その人物こそ、……あの男であった。

あの黒服の男が、いつの間にか私に背を向けた形で、真正面に立っていた。

「……なんなんだよ、てめえ」

最初に口を開いたのはピアスだった。男はその言葉に応えるかのように、ゆっくりと私たちの方へ振り向いた。ずっと目深にかぶっていた帽子を、くいと上に上げてみせた。

「だ、黙ってねえで、何か言えよ！」

ピアスの体が、私の体を通して震えているのがわかる。精一杯、虚勢を張っているのだが、声はうわずっていた。男はしばらく私たちの方を眺めていたが、ポケットから右手を出して、その長い腕をすばやく伸ばしてきた。私は反射的に目をつぶってしまった。

「ぎゃっ！」

悲鳴と共に、ピアスが私の体から離れた。頬になにやら暖かいものがかった感じがした。私がおそろおそろ目を開けてみると、目の前には黒服の大きな握りこぶしがあった。指の隙間からなにやら赤いものが滴り落ちている。見れば、ピアスは口の辺りを押さえてのた打ち回っていた。

私はそつと自分の頬にかかったものをぬぐってみた。その手にも赤いものがついた。血だ。私は全身からすうっと血の気がうせていくのを感じていた。男はそんな私を見て、かすかに微笑んで見せると、そのこぶしを翻して開いて見せるのだった。その手の上には、

血にぬれたピアスがあった。男は力任せに、相手の唇からそのピアスを引きちぎったのであった。

「て、てめえっ！　なんてことしやる！」

最後に残った長髪がどなった。やはり震えていた。いったい何が起こったのか、信じることができないのかもしれないなかった。

「……その人から離れる」

はじめて黒服の男は口を開いた。不良たちとは対照的な、落ち着いた低い声であった。

「てめえ、このやろう……」

長髪の手が私から離れた。その手を硬く握り締めて、まっすぐ黒服へと挑みかかっていった。しかしその拳が相手に届くことはなかった。黒服の男は軽く一方後ろへさがると、すばやくその長い足を高く蹴り上げた。その足は突っ込んできた長髪のあごを、見事に捕らえていた。

「ぶぶっ」

ぐもった低い声を上げて、長髪はぐるぐると回転しながら、塀に衝突して倒れた。黒服の男は、例のゆっくりとした足どりで近づいていくと、片手で相手の襟をつかんで引き上げた。長髪にはもはや意識はなく、男の支えなしにはたつてはいられない状態であった。

男は開いてる方の手をポケットに入れ、何かを取り出した。それは小さなコーヒーの缶だった。それは何時間か前に、私のバイト先で私の目の前で買ったものであった。そしてそれを握り締めたまま、まっすぐに男の顔面にたたきつけたのである。

「ゴフッ」

ひどく嫌な音がした。長髪は後頭部を壁にうち据えられ、缶コーヒーとのサンドイッチとなっていた。男がそっと手を引くと、缶コーヒーも手から滑り落ちてところと私の方へ転がってきた。

私はその缶からも目を離すことができなかった。はつきりとそこには、長髪のどす黒い血と、男の手形が残っていた。長髪がずるずると塀に黒い線を引きながら崩れ落ちた。そして、それからピク

りとも動かなくなってしまうのだった。

「ぐ、ぐぞおうわあ！」

先ほど唇を切られたピアスが、何かわめきながら突っ込んできた。だが、ピアスも男までたどり着くことはできなかった。あの長い足が素早く、まっすぐに伸びて、ピアスのみぞおちのあたりを貫いたのだ。

「ぐおふっ」

ピアスは腹を抱えてうずくまってしまった。そしてその場に、胃の中のものを吐き出していた。男はゆっくりピアスのところへ近づいて行って、大きく足を振り上げ、その足をピアスの後頭部へと振り下ろした。

なんとも嫌な音を聞くのは何度目だろうか。ピアスは自分の吐瀉物の上に顔面からたたきつけられていた。そしてそれらはピアスの血痕とともにあたり一面に飛び散ったのだった。当然黒服の体にもかかっていたのだが、男はなんでもないかのように懷からハンカチを取り出して、それを軽くふき取るのであった。やがてピアスは何も言わず動かなくなってしまった。

ついさっきまで私に悪態をついていた連中は、みんな黒服の男の手によって無残な姿に変わり果てた。死んでしまったのかもしれない。すべて、あっという間の出来事であった。

次は私の番だ。発作的にそう思った。次は私が殺される。私の体は恐怖に震え、歯の根が合わず、小さく力チ力チと音を立てていた。男がついにこちらに向かってきた。私は逃げることも叫ぶこともできない。私はその場にへたり込んだままだった。そしてとうとう男は私のすぐ側までやってくると、ひざをついて、その顔を近付けてきた。私は視線もそらすことができず、そのまま男の顔を見ていた。

「……安心して下さい。あなたには何の危害も加えませんから」
男はにっこりと微笑んで、帽子をあみだにかぶり直すとそう言った。

「それより大丈夫ですか。どこか怪我はありませんか」

私は拍子抜けしてしまった。男はあくまで優しく、紳士的な態度で私をいたわってくれていた。その顔を見てみると、この場である少年たちを血の海に沈めた人間と同一人物とはとても思えない。大きくて丸い目。まだ少し幼さも見える顔立ち。そしてこの愛嬌のある笑顔。さつきレジで対峙した時よりも、さらに若い印象があった。この表情を見ると、この時までの出来事はすべて夢であったかのように思えてくる。少しずつではあるが、恐怖が薄らいでいった。遠くからかすかにパトカーのサイレンが聞こえてきた。どうやらこちらへ向かっているようである。誰かがこの現場を見て、警察に連絡したのかもしれない。

「いけない……」

男がそつと私の手を取った。あくまで紳士的な態度をくずさなかった。

「行きましょう。警察が出てくるとやっかいなことになる」

私は反射的に頷いてしまっていた。後から考えれば、私はあくまで被害者の立場だったので、警察が来るからといって、男と一緒に逃げる必要もなかったのだが、この時は共に行くことが当然と考えていた。何故だかはわからない。あれだけ恐れ、逃げ回っていた相手なのに。この男に対する好奇心というか、何者であるのかを突き止めたい欲求が勝ったためかもしれない。

「大丈夫ですか。立てますか？」

私は男の手を借りて、何とか立ち上がることができた。

「じゃあ、走りましょう。いいですか」

私はまた頷いた。男がゆっくりと走り出す。私もその手をしっかりと握ったまま走り始めた。その手は暖かで、そこから何か見えないう力が私に注ぎ込まれていくように思えた。

私はその一方で、これまでこの男に対して抱いていた感情について考えていた。はじめてその姿を目撃した時に感じた、あの思いとはなんだったのか。

とりあえず私は、この男にとことんまで付き合うこととした。この男の正体は一体何者なのか。あのやさしい目の奥には何が隠されているのか。私はすべてが知りたかったのだから。

その四

どのくらい走り続けただろうか。距離にすれば大したことはなかったのかもしれない。男に導かれるままに走っていたのが、私の体力はそろそろ限界に近づいていた。かかとがジンジンと痛くなり、足がもつれてうまく動かなくなっていた。もう休みたい。そう思った時、男はそれを敏感に感じ取ったのか、徐々に速度を緩めて振り返り、

「少し休みましょうか」

と言って、小さな公園を見つけると、そこへ私を誘った。すぐ上を高速が通っていた。猫の額ほどの小さな公園で、人気はまるでなかった。小さな街灯が煌々としていたが、なんとも薄暗い感じがしていた。

私は石でできたベンチに倒れるように座り込んだ。汗がどつと噴き出し、胸も苦しい。何度も大きく肩で息をついて、呼吸を整えるのどもカラカラだった。

「どうぞ」

顔をあげると、男がいつの間にかすぐそばに立っていて、どこで買ってきたのか、缶コーヒーを私に差し出してきた。私は何も考えないままにそれを手に取った。

「！」

次の瞬間、私はそれを手放していた。それは男が私の店で購入したものと同じコーヒーであった。そしてそれは、先ほどの不良たちの顔面にたたきつけた、恐るべき凶器となったものと同じ缶に見えたのだ。

缶はコロコロと男の足元へと転がっていった。男は腰をかがめてそれを拾った。よくよく見れば、それには赤い血痕などどこにもついてなどいない。あくまでそれは、先ほどの凶器とは同じ種類の別商品にすぎないのであった。

「……コーヒーはお嫌いでしたか」

私はなぜか大きく首を振った。

「こちらにミルクティーがあります。こちらならいいでしょう。どうぞ」

「……すみません」

私は頭を下げながらそれを受け取り、ふたを開けて一気に飲んだ。勢いよく飲みすぎて、器官に入ってしまったて、むせこんでしまった。「大丈夫ですか？」

私は近づこうとする男を手で制し、

「ご、ごめんなさい。だ、大丈夫です」

と、せき込みながら言った。

男はそんな私を見て、少し笑ったようだった。見れば、男の顔には一粒の汗も浮かんではいなかった。先ほど拾ったはずのコーヒーもいつの間にかその手にはなかった。自分で飲んだ形跡もないことから、あのコーヒーもこのミルクティーも、ただ私のためだけに買ってくれたもののようなだった。そういえば、あの三人を相手にした後、息ひとつ切らしてなかったことを思い出した。

そこでふっと、私は急に全身に寒気を感じ、震え上がった。汗で体が冷えてきたためではない。あの血まみれの惨状を、また思い出してしまったのだ。そしてそれを作り出した張本人が、私の目の前にいて微笑みを浮かべているのだ。

この日の朝に男をはじめてみた時から（すべてはまだ一日の出来事であるのだ！）、何度このことを考えたらう。この男はいつたい何者なのだ？ なぜ彼や私のまわりに姿をあらわすのか。この男の真の目的は何なのか……？

「それにしても、危ないところでしたね。怪我はありませんか」

私がああ三人のことを思い出していたことを知ってか知らずか、男はそうやって優しくそうにたずねてきた。私はその言葉にすぐに応えることができず、ややあってから小さく頷くのが精一杯だった。「そんなに怖がらなくてもいいですよ。あなたには何の危害も加え

ませんから」

男は笑った。まるで私の心の中などすべてお見通しだと言わんばかりだった。

「私の考えていることが、……すべてお分かりになるみたいですね」
私は思わずそう口にしていた。声が上ずっているのが、自分でもよくわかる。

「何故、そうお考えになるのですか」

男が逆に聞き返してきた。

「聞いているのは私の方です！」

馬鹿にされたような感じがして、思わず声が大きくなった。

「……まいったな。まあ、全部が全部というわけではありませんが。何となく、そうじゃないかと思えたことを話してみただけですよ」

男はそう言って頭をかいいた。

「……そうですか」

「さ、次はあなたが私の質問に答える番ですよ」

「えっ」

私は思わず男の顔を見てしまった。男は笑って、こちらを見ていた。なんだかその顔を見ると、本当に馬鹿にされているように、すこし腹が立ってきた。

「私の質問、聞いていらっしやいましたか」

「……ええ」

「じゃあ、答えてくれますか？」

「私の考えていることがわかるなら、……私が答える必要はないじゃないですか」

と、つい私が意地になって答えると、男はいきなり大声で笑い出した。その笑いは、まったく嫌味のないものであることはわかったが、そのことが逆に私の癪に障った。私はもうこの場から離れようと立ち上がろうとした。

「あ、危ない」

だが、私の足は私の意志に反して、まったく言うことを聞いてく

れなかった。立ち上がりかけたところで、よろけてしまい、そのま
ま前のめりに倒れそうになった。そこを男の長い手が伸びて、私を
支えてくれた。

「……大丈夫ですか」

「……へ、平気です」

「でも……」

「大丈夫ですつたら！」

私は男の手を振り払って、またベンチに腰を下ろした。足が思い
通りに動かせない以上、まだまだこの場に座っておかねばならない。
恥ずかしさと悔しさが入り混じったまま、私はしばらく黙っていた。
冷たい木枯らしがふいてきた。思わず私は身を縮める。

「寒くなってきましたね」

「……」

「……コートをお貸ししましょうか」

「……結構です」

「……そうですか」

また沈黙が続いた。もう汗はすっかりひいていたけれども、とて
も寒くなっていた。だが、この男の黒いコートを借りるなんてとん
でもないと考えていた。男は気づいているのだろうか。黒地のため
目立ってはいないが、近くで見ればいくつかの奇妙なシミが点在し
ている。それはまぎれもなく、あの少年たちの血であるに違いない
のだ。

「あの人たち……」

「えっ？」

思わぬ私の言葉に、男が振り向いた。

「あの子たち……死んだかもしれませんよ」

言ってしまった。

「かも、しれませんね」

男は私の言葉に動じず、ポツリと返した。

「でも、人間って案外丈夫にできていますから。あれぐらいのこと

では死にはしませんよ」

あれぐらい？ あの血だらけの惨状を「あれぐらいのこと」と言うのか。

「大丈夫ですよ。でもまあ、一生不自由な生活を送ることになるかもしれません」

そんなことはたいしたことではないとも言つように、男はさらに付け加えた。

「ぜんぜん大丈夫じゃないじゃないですか。その方が、もっと酷いじゃありませんか。可哀想すぎます」

「可哀想？ ひよつとしたらあなたの方が一生消えない傷を受けていたのかもしれないですよ」

「そんな。だからって……」

だからといって、相手にそれ以上痛い目をあわせることが正当化されるわけではない。

「他人に迷惑をかけたり、傷つけることを何とも思っていないやつらには、いずれ自分たちにもその分だけ、いや、それ以上の報いを受けうるのだということをわからせないといけないんです。でないと、余りにも不公平ですからね」

「あなたはそのことを自覚しているんですか」

「ええ」

男は頷いた。しかし、この男にかすり傷でも負わせることができる人間が、この世に存在するのだろうか。

「でもやっぱり酷いです。あそこまでする必要はなかったんじゃないですか」

「……あなたはとても優しい方なんです」
「やっぱり私のことを馬鹿にしているのか。」

「あ、すみません。また不愉快な思いをさせてしまったようですね。他意はなかったのですが……謝ります。ごめんなさい」

また私の心の中を見て取ったのか、男はあわててそう付け加えて恐縮していた。

ますます私は、この男のことがわからなくなってきた。真面目なのかふざけているのか、まともなのかおかしいのか、どちらにもとれるしどちらでもない。一体どういう人間なのだろう。

またしばらく間が空いた。私がこの男から聞き出したいことは、たった一つのことであつたが、それはなかなか口に出せないでいた。「正直言つて、あなたとは一度こうして二人だけでお会いしてお話したかった。……でも、かなり驚かせてしまったようですね。すみません」

また男の口からお詫びの言葉が発せられた。

「私のことを……以前からご存知だったのですか」

「いえ、まあ……ごく最近のことですがね……」

なんとなく男は齒切れの悪い受け答えをした。

「あなたは、一体何者なんですか？」

聞いてしまった。

男は驚いた顔をしてこちらを見ていた。そして少し悲しい表情となつた。だが、私の問いには答えようとしなかつた。

「答えてください」

私は男の言葉を促した。

「あなたには関係のないことです」

「答になつていません」

「……知らない方がいいでしょう」

「……何故です」

「あなたの為です」

意味がわからない。

「では、どうしてあなたは私の目の前に現れたのです？ 私に疑問を抱かせるような行動をとったり、私を助けてくれたのは何故なんですか」

「先ほどのあれは……あの時は仕方ありませんでした。あなたの窮地を黙って見過ごすわけには……」

「私のバイト先にも現れましたよね」

「あ、あれは単なる偶然ですよ。あそこであなたが働いていらつしやるなんて知らなかったんです」

「今朝、アパートの通りの角に立っていましたよね。そして彼を尾行していくかのように、後をつけていきましたよね」

「そんなことは……ありませんよ」

「でも、あなたは私の方を振り向いて、私を見たわ」

「……気のせいですよ」

「あなたのやっていることや言っていることは、矛盾ばかりで嘘ばかりです。ますます訳がわからないわ。私ははっきりとした、本当の答えが知りたいんです」

「わからないままの方が、いい時だってあるんです」

男は私に向かってそう言ってから、言葉を続けた。

「すべての真実を知ったからといって、それがよいことになるとは限りません」

「でも、私はあなたのことを知ってしまいました。あなたと直に話す機会を得てしまいました。あなたに対して、消えない疑問をたくさん抱いてしまいました。……この責任はどうとってくださるんですか」

「それは……。私のことは、もう忘れてくださいとしか言えません」

「そんなの、ずるい！」

とうとう私は立ち上がった。もう足も痛むことはなかった。

「私はあなたが思っているほど馬鹿ではありませんし、あなたにとつてそれほど都合のよい女でもありません」

「そう……なのでしょうね。でも……」

「……でも？ でも、なんです」

「あ、いえ。何でもありません」

男は背中を丸め、ポケットに手を入れて、寂しそうに二三歩ほど歩を進めた。

「逆に聞いてもいいですか。何故、そんなに私の正体を知りたいんですか」

私の方は見ずに、そう訊ねてきた。

「それは……知りたいと思うことは当然のことじゃないんですか」

「そうでしょうか。私みたいな怪しい人物には、係わり合いを持つまいとするのが、普通なんじゃないませんか」

「……」

「今も、逃げようと思えば逃げられるかもしれませんが。大声を上げれば、誰かが助けに来てくれるかもしれない。いや、ここに来るまでも、いくらでも逃げ出すチャンスはあったと思います。何よりあの場でパトカーのサイレンが聞こえてきた時、あなたは私と一緒に逃げる必要はなかったでしょう。それでもあなたはついてきた。

……何故です？」

「それは……」

あなたの目が……と言いかけて止めた。

「今は、お答えすることができません」

ずるいのは私も同じだ。

私はこの男を信じてしまったのだ。いや、信じたのだ。すべてを知ること、自分の気持ちを正当化したいのだ。だがそれを口に出すのはためらわれた。そのことで、自分がまた傷つくかもしれないことを恐れていたからだ。

「でも、知りたいと思ったから知りたいのだ、という言い方しかできません。たとえ今、私の疑問にすべてお答えされなくても、何もおっしゃられなくても、これからどんなことをしてでも、私はあなたが私に隠していることすべてを、突き止めようと思います」

「……おやめなさい、そんなことは。そんなことは、しない方がいいですよ」

「いいえ、止めません。どうしてもやめるとおっしゃるのなら……」

私は息をのんで、こう続けた。

「私も、あの三人のようになさったらいかがですか」

男は悲しそうな顔をして、それから大きなため息をついた。

「何度も言いますが、あなたに危害を加えるつもりはありませんよ。」

私の目的は、あなたじゃありませんから」

そして私の顔をまざまざと見つめながら、そう言うのであった。

「本来の目的？ …… どのような意味ですか。私以外の人間なら誰でもいいんでしょうか」

「いいえ。ここでの私の本当の相手は一人だけです。あの三人などはイレギュラーな対応でした」

「一人だけ？ じゃあ、その一人って、一体、だ……」

不意に、私の頭の中に、その相手かもしれない人物の顔が浮かんだ。

そんな…… まさか。

「…… ご推察のとおりです」

ゴクリと大きくのどがなる音がした。それが私のもののなのか男のもののかはわからなかった。

「近日中に、今、あなたが一緒に暮らしている人物、すなわち江藤哲夫さんには死んでもらいます。私が直接手を下すことになるでしょう」

「……」

「あなたの疑問にお答えします。私は実は、『殺し屋』なのです」
その時私の目の前が、一瞬、真っ白になった。

その五

白い光が消えても、私はまだそこにいた。頭上の高速道路には、何台もの車がせわしなくずっと行き交っていた。黒服の男は目の前に立っていた。小さなベンチ。夜の公園。さっきと何一つ変わってなどいない。あくまで表面的には。

それはほんの一瞬の出来事だったのだろう。だが私には、とてつもなく長い時間がたってしまったように感じられた。

……私は笑い出した。

笑って笑って笑い続けた。

無理して無理して無理して笑おうとした。

男は何も言わず悲しそうな表情のまま、こちらを見ていた。

「あなたは、やっぱり、頭が、おかしいんだわ」

とぎれとぎれに、なんとか私は喋った。私の方が変になりそうだった。

「……そうかもしれません」

男は答えた。

「わ、わかつているじゃない」

私は大きく肩で息をしながら、男から顔を背けた。男の目を、あの目を見ることができなかったから。

「こ、殺し屋ですって？ ああ、おかしい。最高の冗談だわ……」

あなたは、人殺し？ あはははは。そんな……人殺しって言うのは、何か、こう……わかるでしょ、誰にも知られず、こっそりやるもんでしょ。そうよね、ばれたら刑務所行きだものね……。それなのに、あなたは……何よ。なんでそんなに、堂々としているのよ。そんな、一度見たら忘れられないような目立つ格好して……。どうして？ なぜそんな姿で私の前に現れて、あまつさえ、『自分は殺し屋です』なんてことが言えるのよ！」

「すみません……」

「謝ってほしいんじゃないの！ 私は聞いているのよ！」

私は頭をかきむしった。私は何にいらだっているのだろう。目から涙が零れ落ちそうになるのを、必死で食い止めていた。

「いつもなら……いつもはこんな風じゃないんです。もっと人知れずに……それこそあなたがおっしゃったように……隠れて行動していました。ただ、今回は……今度に関しては……」

「今回は……何故なの？」

「……わかりません」

「わからない？ ……何なのよ、一体！」

私は両のこぶしを握って、何度も自分の足を叩いた。ひざから崩れ落ちそうになっていたから。

「あなたってさつきから『言えません』『すみません』『わかりません』って、そればかりで、たまにそれ以外のこと言っても、訳のわからないことばかりで、肝心なことは何も話してくれないじゃない。それともあなたは、何も理由もなく人を殺したりするの？ 何もわからないのに、『殺し屋』を名乗っているの？」

「……そんなことはありません。あくまで正式な依頼をもって……依頼がない状態で、誰も彼も殺してしまうということは、ありません」

「それじゃあ……もし、そのちゃんとした依頼があったら、お年寄りでも子供でも、誰でもみんな、みんな殺してしまうのね」

自分でもひどいことを口に出している自覚はあったが、止めるわけにはいかなかった。

「かも、しれませんが」

「……わたしでも？」

「……おそらく」

男はあくまで冷静だった。

「じゃあ、今回も、誰かの依頼を受けたのね」

「ええ」

「じゃあ、それは一体……？」

「誰？ 誰からの依頼なの？」

「……お答えするわけにはいきません」

「……ご立派だわ。依頼人の秘密は絶対守るって言うわけね。さすがプロだわ」

「……ええ。そうとっただいてかまいませんよ……」

私はくじけそうになる自分を、必死に奮い立たせた。両腕を大きく回して、何とか体の中から言葉をひねり出そうとしていた。まだ言わねばならないことがある。まだ聞かねばならないことがある。

「……何故……」

そう、何百回分の「何故」という言葉が、私の口から飛び出そうとしているのだった。わからないことばかりなのだ。理解できないことが多すぎるのだ。

「何故、『彼』が死ななくてはならないの？ 何故、『彼』なの？」私にとって行き着くべき究極の問いはこれだった。何の権利があつて、彼を私から奪おうとしているのか。

だが、男はまたしても私の問いには答えず、口を閉ざしてしまつた。

「何か言つてよ！」

しばらくした後、やっと男は淡々とした口調で、事務的な言葉を吐き始めた。

「……江藤哲夫。二十五歳。S県出身。三人兄弟の次男。同県内の小中高を卒業し、上京。都内の某大学経済学部へて、某食品メーカーの営業部に勤務中。上京してから住居も転々として、今はここX町のアパートに居を構えて……」

「そんなことを聞いているんじゃないの！ そんなこと、知っているわよ。彼のこと……彼のことなら、なんでも知っているんだから！」

「本当ですか？」

「えっ……」

私はおもわず振り返り、男を見た。いつしか男は厳しい顔をして、

まつすぐこちらを見ていた。先ほどの悲しそうな表情は消えうせていた。

「本当に……あなたは、彼のことを何でも知っているのだ、と言えますか」

「それは……」

私は必死になって、頭の中で彼の姿を思い浮かべようとした。彼と過ごした日々の思い出。彼との会話。彼のしぐさ。彼のぬくもり。しかしずっとずっと付き合ってきて、そして一緒に暮らしてもいるのに、彼の対する私の記憶は、何故だかその時、ぼうつとかすんで霧がかかったようになっていた。私は一体、彼の何を見て何を知っているというのだろうか。私は……。

このところの朝の彼とのいざこざが頭をかすめた。やっぱり私は逃げている。私は実はこれまで一度も、彼と真摯に向き合ってこなかったのではないだろうか。知ろうとすれば、すぐにできたことなのに。だがもし知ってしまったら。彼の本当の気持ちや本当の姿、そのすべてがわかってしまったら。それが私の望むものではなかったとしたら。私は……。

涙がでた。ポロポロとめどなく流れ落ちた。ずっと心の奥底に封じ込めていたものが、暴かれてしまったかのようだ。私はその場にうずくまり、声を上げて泣き出していた。

「……すいません。あなたを傷つけることになってしまったようですね」

やがて男は私の肩に手を置いて、そしてまた詫びの言葉を口にしていった。私はもうその手を振り払うことができない自分の弱さを、呪うだけだった。

「……あなたはご存知なんですね」

私はやつのことで尋ねた。

「私はただ、依頼の内容に嘘がないかを調べただけです」

「間違いはなかったのですか……。その……彼はあなたが殺してしまうに値する人間だったのですね……」

男は迷っていたが、やがてゆつくりと頷いた。

「私のことも、お調べになったんでしょう？」

「それは……」

「いいんです。……答えてください」

「……ある程度は……」

男はきつと、私のすべても調べたに違いない。何もかも知っているのだ。私の恥ずべき過去のこと。男が私から不器用に視線をそらしたことが何よりの証拠だった。

「……やはりお会いするべきではなかった。お話しするべきではありませんでした。私の存在が、あなたに余計な誤解や負担を与えることになってしまいました。……申し訳ありません」

だが、その時の私には、もう男の言葉は耳に入っていないかった。殺させはしません」

「えっ？」

「彼を、殺させはしません。絶対に。私が守ります、彼を」

「そんな……」

「できないと、思ってたっしやるんでしょう？」

私は決めた。決めたのだ。

「いえ……ただ……」

もう逃げない。弱気な自分は、嫌だ。負けたくはない。

「あなたは、彼を殺すことを止められないのですか？」

「……これは私の意志ではありません。あくまで依頼人があつてのことです。私はただ、それをそのまま実行することだけです。だから……」

「その方が、依頼を取り下げたら？」

「その時は……確かに……でも……」

「わかりました」

私は立ち上がった。涙はもう流れてはいなかった。男はまだ、私に告げたいことがあるようであったが、それを制した。

「もういいんです。何も言わないでください。私も、その意志に従

うことにします」

「……」

そんな顔しないで。あなたはあくまで私の敵なのだから。

「彼に、もしものがあれば……」

私はしっかりと男を見据えて言った。

「私は許しません」

これは私なりの、精一杯の宣戦布告である。

「ええ」

男は素直に、そしてしっかりとそれを受け止めてくれた。

「その人も、あなたも……その償いをしてもらいます」

「……」

「たとえ、あなたたちを殺してでも……」

こんな殺伐とした言葉が私の口から発せられたことに、当の私が一番驚いていた。余りも無謀な台詞だった。しかし、もし本当に彼が死ぬようなことになったら。たとえそれが、依頼主にとっては当然の報復なのとしても、その人間を、そしておそらく実際に手を下すことになるこの目の前の男を、私は決して許さない。やっと見つけた私の居場所を、奪う権利が誰にあるというのか。たとえ殺すことはできなくても、せめて一矢、心か体に一生消えないような傷をつけてやりたい。私はそう思っていた。

「……わかりました」

これは彼のためだけではない。私の、私自身を守るための戦いののだ。

そして私は男から離れて歩き出した。もう引き止められることもなかった。だいぶ遠くまで来てしまったが、大きな通りまで出れば、タクシーを拾うこともできるはずだ。私は帰るのだ。私たちのアパートへ。私の居場所へ。

内なる興奮が大きく私を包んでいた。できることなら、このままいつまでも歩いていたい気分だった。体が熱い。

私はおそらく生まれて初めて、自分の意志で自分のために前向き

に行動しようとしていた。私はその先に待っていることへの恐怖など、その時は微塵も感じてはいなかった。

その六

アパートへたどり着いたとき、彼はまだ戻ってはいなかった。私は部屋に入って、その場にペタンと腰を下ろし、そのままゴロンと横になった。

少しだけ、ほっとしていた。もし彼が先に戻っていたらどうしよう、と考えていたからだ。彼と会って、どんな顔をして何を話せばよいかわからない。決意だけは大きなものであったが、それに伴うものが私には不足していた。やはり相も変らぬ小心者にすぎない自分にうんざりした。

先ほどの興奮はすでに冷めていた。私にあるのは、疲労と不安だけだった。昼食時から飲み物以外口に入れていなかったが、空腹感すらない。……何もしたくなかった。

このところ、彼の帰りはいつも遅い。営業回りで、地方のスーパーにまで遠征せざるをえないのだとか、お得意先の偉い人の接待にかり出されたなど、理由はさまざまだ。なんでもないスーパーやコンビニの陳列棚の位置にも、それぞれメーカーの力関係のようなものがある、よい場所を確保するのは大変なことなのだと、以前話してくれたことがあった。それに比べて、お前は気楽でいいよな、と付け加えることを忘れなかったが。

彼はいつたい私のことをどう思っているのだろう。単なる世間知らずのお嬢さんだと思われるのは癪だった。これまで何の苦労もなく生きてきたわけではない。ただ、彼が知らないだけなのだ。私は自分の過去について、ほとんど話してこなかった。高校に行かなかったことも、家を出て来てしまったことも、結局詳しい理由を何一つ語ってはこなかった。話すことはおるか、それを思い出すことすら嫌だったのだ。特にここで一緒に暮らし始めた頃は、その思いが強かった。

彼も、そのことについては深く訊ねてはこなかった。それはそれ

でありがたかったが、後から考えるに、私に同情したからというより、単に面倒くさかった（もしくは余計なことに巻き込まれたくなかった）だけだったのかもしれない。これは一時的なことで、すぐに実家へ立ち戻ると考えていたのではないか。だがそれから長い月日がたち、何より私は二度とあそこへは戻らないと心に決めて、ここへやって来ていたのだった。

私が彼の元へ来たのは、自分には当然過ぎるほどの行動の結果だったと思う。あの時には、私が頼れる人間は、彼しかいなかったのだから。

彼とはじめて出会ったのは、私が職を転々として、近所のレンタルビデオ店で新たにバイトを始めたばかりの時であった。そのバイト先の先輩として、彼は働いていた。彼はまだ学生で、その店のキャリアは長く、不器用で失敗ばかりの私の面倒をよく見てくれた。ミスが原因で店長にしかられそうになったときに、私をかばってくれたことも何度かあった。明るくて話が面白くて、何よりも誰にも優しくかった。その店ではムードメーカー的な存在であった。私が彼に惹かれたのは、その優しさゆえであったかもしれない。それまで私は、人から優しく接されるという経験を、ほとんどしてきてはいなかったのだ。それは驚きであり、新鮮な体験でもあり、彼という存在が、次第に私の中で大きくなっていったのであった。

「頑張らなくなっちゃっていいんだよ」

ある日、彼が私に言った。

「よくさ、スポーツとか勉強をしている人に向かって、励ますつもりで『頑張れ頑張れ』って言うじゃない。俺、嫌なんだよね、言うのも言われるのも。なんか無理強いさせているみたいでさ。その人にはその人なりのペースって言うか、やり方みたいなものがあって、それに忠実な方がいいと思うわけ。遅くっちゃっていいんだよ。うまくいかなくなっていいんだよ。はじめのうちはどんどん間違って、失敗してもいいと思うんだ。最終的に目標にたどり着ければいいんだから。だから硬くならずさ、気楽にやればいいんだよ」

高校受験の失敗、実家や過去の職場で受けたつらい仕打ち。私はひどく落ちこんで、いつもナーバスになっていた。常に何かにおびえ、小さくなつて生きていた。そのビデオ店で働き出したのも、家や家族から逃げ出す口実がほしかったからに過ぎない。働く場所なんて、前と同じ場所であればどこでもよかったのだ。だが、そんな場所で彼と出会うことができた。彼のおかげで私は立ちなおり、彼の言葉で少しずつ前向きに生きる活力が湧いて来るようになっていた。

その彼と個人的に付き合う関係になったのは、バイトをはじめてからだいが立つてからのことだった。告白というほどのたいそうなものではなかったけれど、それが彼の口から、私と付き合つてほしいというようなことを言われたときには本当に驚きであった。私みたいな人間を好きになつてくれる人がいるなんて、とても信じられなかったのだ。

「何か……違うよね。他の女の子たちとはさ。そこが新鮮だった、ていうか……」

確かに彼のことは好きだったけれども、それを口に出すなんてことは決してできなかった。その思いは、ひっそり自分の心の中にいつまでもしまつておこうと考えていた。それが彼も私のことを思つてくれていて、私はなんだが自分だけが彼だけでなくこの世界全部から認められた思いがして、とてもうれしくなつて、その告白を受けた後で、思わず泣き出したことを覚えている。

こうして私たちは付き合い始めた。いつしか、それまで以上に彼は私にとってなくてはならない存在となった。幾度がデートを重ね、そして彼に抱かれるようになってからは、その思いはますます強いものとなつていた。いつまでもこの人と一緒にいたい。そう思った。それはずっとずっと変わらない気持ちだった。

その彼が殺される。

彼がいなくなってしまう。

そのことが私にとって、どれほどの衝撃であるか。もしそうなれ

ば、私は生きてはいられないだろう。彼は私のすべてなのだ。私が私であるために、必要な大切な人。それが彼であるのだ。

なんとしても、それは避けなければならぬ。

とはいっても、この私に何ができるというのだろうか。具体的な術については、私は何ひとつ思いつかないでいた。

彼に四六時中、ずっとつきまとうわけにもいかない。それは不可能であるし、何よりもしもの時でさえも、私があの男に太刀打ちできとも思えなかった。というより、どんな人間でも、あの男には敵わないのではないだろうか。私はあの三人の不良の無残な姿を思い出して、身震いした。

となれば、やはりあの男に殺しを依頼した人物を探し出し、そこから説得していくしかない。だが私には相手に依頼を取り下げてもらえるような自信はなかった。そもそも、一体誰が彼を殺すよう依頼したというのだ。それがわからなければ、説得も何もできるわけがない。

私はその場で大きく寝返りをうった。自分の手で彼を守ってやると大それたことを決意したまではよかったが、いきなり行き詰ってしまった。具体的に何をすればよいかかわからない。私は少しあせり始めていた。

それにしても彼を殺してやりたいほど憎んでいる人とは、どんな人間なのだろう。思うに、彼は人に憎まれ恨みを買うようなタイプではなかった。以前のバイト先でも、彼を嫌っている人物は思いつかない。しかしなによりこの度は「殺人」の依頼なのだ。彼に関しでは、私の知らない何かがあるのかもしれない。それは私と彼が知り合う以前の出来事であるのか。それとも……。

あの男の言うとおりだ。私は彼について何も知らないに等しいのかもしれない。気分がますます滅入ってくる。私は意味もなく、ゴロゴロと部屋の中を駆けまわった。

その時、不意に自分の携帯電話を見てみると、着信が二件入っているのに気がついた。マナーモードにずっとしていたので、気がつ

かなかつたらしい。確認すると、どちらも留守電メッセージが録音されている。あわてて私は続けて再生してみた。

「あ、俺だけ。今日は戻れなくなったから。それじゃ」

一件目は彼からだつた。まるでそっけない淡々とした言葉だつた。私は少し悲しくなつた。

あなたは命を狙われているのよ。

すぐにでも彼の身に危険が迫っていることを伝えてあげたかつた。だが、それを私の口から聞いたとしても、彼は一笑に付して、真剣に取り合つてはくれないであろうこともわかつていた。この日に私が体験した数々の出来事も、信じてくれないに違いない。

「私はあなたのことをこんなに大事に思っているのに……」

どうしてわかつてくれないのだろう。こんなに心配しているのに、どうしてそんな態度ばかりとるようになったのだろう。いつからこうなってしまったのだろうか。

私はため息をつきながら、もう一件のメッセージを聞いてみた。

それは彼の友人である、島崎さんからであつた。

「あ、えーと、島崎です。江藤君の携帯がつかないの、失礼してこちらにかけさせていただきました。えー、その、高校時代の同級生が亡くなりまして、そのお葬式のことについて、江藤君と相談したいことがあります。まあその、えー、よかつたら折り返し、ご連絡ください。では」

島崎さんというのは、彼の高校のときからの友人である。一番仲のよい友達らしく、このアパートにも何度か遊びに来たことがある。そのたびごとに、私のことを「奥さん」とか「若奥様」などと呼んでからかってくるのだった。籍を入れたわけではないし、私はそう呼ばれることが何とも照れくさくて嫌なのだが、島崎さんはそんな私の反応を楽しんでいるのか、決して改めようとはしなかった。

それはともかく、私は島崎さんからの短いメッセージの中の、「同級生が亡くなった」という言葉が引つ掛かつた。私はすぐに島崎さん宛てに電話してみた。ワンコールもせずに、元気な声が返つて

きた。

「ああ、これは奥さん。お久しぶりです。お元気ですか」

やっぱり島崎さんは私を「奥さん」などと呼んでいたが、私はすぐに亡くなったという彼の同級生の件について話を振った。

彼は最近特に仕事が忙しく、なかなか時間がとるのが難しいこと（もちろんこの日も仕事で戻れなくなったことを付け加えた）、しかし昔からの親しいお友達のお葬式なら、出ないというのも失礼に当たるので、よかったら私が代わりに出てもよいのだが、といったことを告げた。かなり強引な言い訳とも思ったが、島崎さんは特に気にしたようでもなかった。

「いやあ、奥さんにそこまでしていただくなくてもいいですよ。高校ん時に、ちよいちよいつるんでいたって程度の関係の奴なんですから」

「でも、高校を卒業なさった後でも、お付き合いはあったんでしょう？」

「そりやまあ、そうですね。俺の方はまあ、親同士の付き合いもあったんで、顔を出さなきゃならないんですけれども。江藤はどうかなあ。忙しいなら、また弔電の一本でもうつとけばいいんじゃないですかね」

「そうですね。……あの、変なことをお聞きするんですけれども、確か一月ぐらい前にも、お友達がお亡くなりになりましたっけ」

「ああ、そうですね。中島って奴ですけれど、やっぱり高校の時のダチです」

「そうですね……」

私が引つかかったのはこれだ。私が代わりに弔電をつつたから、よく覚えている。このときも彼は多忙であり、弔電のうちらや文句が思いつかず、面倒くさくなって私に頼んできたのだ。

「あいつはもう高校でてから縁遠くなっていたんで、俺も弔電で済ませたんですけどね。今度はさっきいったような事情でして。こう

忙しい時期にバタバタ死にやがるなんて、友達がいのない奴らですよ」

それにしても、島崎さんの口ぶりでは、かつての友人たちの死に対する悲しみや哀悼の意はまったく感じられないようである。

……彼も同じなのだろうか。

「なんか、どっちも事故みたいなんですよね」

私が二人の死因について訊ねてみると、そんな答えがかえってきた。

「今回死んだのが、仁科って奴なんですけれど、酔っ払って川に落っこちたらしくてね。中島は工事現場で働いていたらしくて、高いところから落ちたとか、何かものがおちてきたとかなんとか。……あれ、逆だったかな」

どうにもさっぱり要領が得ないが、どちらも事故というのが気にかかる。本当にただの偶然なのか。

「……わかりました。それじゃあ、今度も私の方から弔電をうたせていただきます。ご連絡先を教えてください」

「いいですよ。ちよつと待って下さい」

しばらくして、島崎さんが読み上げる住所をメモしつつ、なんでもない世間話をするかのように、私はちよつと話の矛先を変えてみた。

「でも……こんなときにこんな話するなんて失礼ですけど、私、ちよつと残念なんです」

「どうしてです？」

「ちよつといい機会だなおもって。一度彼の田舎ってどんなところか見てみたかったんです。彼、昔のことはあまり話してくれないし」

「恥ずかしいんですよ。それに、何もないところですよ」

いずれにせよ、彼の故郷へは一度行って見なければならないと考えていた。彼の昔の同級生が、二人続けて亡くなった。このことが今度の彼への殺害依頼と、何らかの関係があるかもしれない。その

二人の死は、ひょっとしてあの黒服の男の手によるものではなかったか。もしそうならば、事の発端は彼らの高校時代にあると見なければならぬだろう。私一人の力で何処まで調べられるかわからないが、うまくいけば、殺しの依頼者まで早くにたどり着けることができるかもしれない。そうでなくても、思わぬ重要な手がかりを得られるかもしれないのだ。

「高校時代の彼って、どんな人でした？」

私は本心を隠して、それとなく島崎さんに探りを入れた。

「どんなって言われても……。今とあんまり変わっていませんよ。俺もあいつも、少々ワルぶってはいましたけどね」

その「ワルぶって」という言葉は、少々意外で、私の耳に残った。「そうなんですか。へえ、……ひょっとして不良だったんですか」「いや、それほどのもんじゃないですよ。たった今も見ていたんですけど、笑いましたもん、自分の格好の可笑しさに」

「えっ？　今、何を見ていらっしやるんですか？」

「卒業アルバムですよ。高校のときの。これに仁科の住所が載っていたんで、引っ張り出してきたんです。最近じゃあ個人情報なんたらでうるさいですけども、この頃はまだまだ甘かったみたいですけどね」

卒業アルバムにクラス全員の住所が記載されているという。さらには彼ら一人一人の写真も載っているに違いない。私はそれがどうしても見たくなくなった。彼のものは、実家においてきたらしいのだ。「見てみたいなあ……。よかつたらそれ、貸していただけないでしょうか」

「あ、いいですよ」

島崎さんは、あっさりと了承した。

「本当ですか」

「他ならぬ奥さんの頼みですから。明日あたりどうです？　仕事帰りにそちらへよつてもいいですよ。俺もあいつに会いたいし」

それはちよつとまずい。今回の島崎さんとのやり取りは、できれ

ば彼には隠しておきたいのだ。私は彼は泊り込みが多くてしばらく帰って来れないのだと嘘をつき、わざわざ来てもらうのも悪いのでこちらから取りに伺う旨を伝えた。そして島崎さんが昼休みの時間に、仕事場の近くの喫茶店で会うことになった。

私はこれはちょっとした好奇心なのだということを強調して、無理に無邪気を装ってしゃべり続けた。島崎さんにあの黒服の男の存在について話したところで、信じてはもらえないに違いない。それに今度のことに、あまり他の人を巻き込みたくはなかった。これは私と彼と、あの男との問題であるのだ。その後もしばらく話をしたが、内容についてはうわの空で話す側からすぐに忘れてしまった。そして電話を切ったとき、手にはびっしょりと汗をかいていた。

とりあえず、自分のとるべき行動が見えてきた。一息つくのと、勝手に睡魔が襲ってきた。長い一日だった。だが私はまだ、あくまでこれからの長い道のりの第一歩を、やっと踏み出したに過ぎない。明日にはどんなことが待ち構えているだろう。くじけちゃいけない。頑張れ頑張れ。私はあえて、自分にそう言い聞かせた。

その七

朝になってから、彼の会社へ電話を入れてみた。彼の携帯にはまだ連絡がつかなくなったからである。会社の同僚の方の話では、すでに外回りに出てしまったらしく、会社にはもういない様子だったが、定時には無事出社していたらしい。私は少し安心した。彼はまだ生きている。ゆうべは何処に泊まったのだろう。食事はちゃんと取れているのだろうか。

私はバイト先にも電話して、体の調子が悪いので二三日休みたい旨を告げた。店長は昨日の私の様子から勝手に解釈し、「お大事に」とだけ言って深く追求もしなかった。私がいなくても、いつものシフトの人数で十分に店は回るはずだ。私とのコンビでレジを担当しているあの娘のことをちらっと考えた。だがすぐに頭から消し去った。私にとっては、こちらの方が大事なのだ。

私は朝食の膳を片付けて、急いで身づくろいをはじめた。簡単に化粧をし、グレーのスーツを引っ張り出した。私の唯一といってもいい、フォーマルな外出着である。以前職を転々としていた時に、いつかはちゃんとしたところで働きたいと考えて、なけなしの貯金をはたいて購入した品だ。

私のはじめての就職先は、市内にいくつかの支店を持つ、あるベーカーリーの製造工場だった。私は高校受験に失敗し、私立に進学することも許されなかった。慌てて勤め先を探したのだが、中卒程度の女がすぐに働ける場所は、そんなところしかなかった。中では白い作業着を支給され、ずっとそれを着せられていた。だがそこは結局一月と持たず、すぐに辞めることとなった。

そこで班長をしていた男が最悪で、作業になじめず、いろいろ手間取っていた私を、罵倒し徹底的に苛め抜いたためである。男はその工場では主のような存在であった。なぜあそこまで嫌われたのか、いまだにわからない。あれはあの男の性格のゆえなのか、私に相手

をいらつかせる何かがあつたためなのか。私のやることなすこと一つ一つにケチをつけていた。精神的にも肉体的にも痛手を受けてしまい、私は結果的に耐え切れずにそこを飛び出した。ろくに給与すら手にできなかった。働くことすらもまともにできないのかと、家族から責めたてられ、私はひどく落ち込んだ。

苛められるのは、馬鹿にされるのは、しつかりしていないからだ。ちゃんとしていないから、相手になめられ蔑まれるのだ。と、その頃の私は思っていた。だから思いつきり背伸びをする感じで、大人の女性に見えるようにと、このスーツを準備したのである。しかしその後実際の職場や面接の場で、この服を披露する機会はどうとう訪れなかったのであるが。

それも過去の話だ。それでもこの服を身に着けると、気持ちひきしまる思いもする。何しろこのところ、スカートをはく事すら少なくなってきたているのだ。大きな街に出ることも、とんとご無沙汰であつたし、彼とも二人で外出したり、買い物や食事に行ったりすることもなくなっていた。私は人ごみの中が苦手だつたし、彼は彼で、休みの日は家で一日中ゴロゴロしていることばかりであつた。

イヤリングをつけながら、小さな鏡を覗き込む。につこりと笑顔を作ってみた。大丈夫大丈夫。心配ない。ぜんぜんたいしたことじゃない。きつとうまく解決できるはず、私は鏡の自分に語りかけ、勇気づけた。

そして無事にことが片付いたら。二人でどこかへ遊びにいこう。うんと贅沢して、思いっきり楽しもう。私たちを覆う黒い雲は、すぐに過ぎ去っていくだろう。あとちよつとの辛抱だ。頼れる人は誰もいない。私が、私一人が頑張らなければならないのだ。私は拳を握り締め、気合をいれて立ち上がった。

私は彼宛てに、かんたんな置手紙を書き残した。もちろん島崎さんと会うとは書いていない。もしできるなら、調べられることは全部調べたいと考えていたので、帰りが何時になるかわからなかった。いろいろ考えたが、昔の友達と会うことと、帰りが遅くなるかもし

れない旨だけを書いた。念のため、冷蔵庫の中には、簡単なおかずになるようなものを入れておいた。

これでよし。私はやはり一足しかもっていないパンプスを履いて、外へ出た。

「お出かけですか」

玄関から外へ出たとたんに声をかけられ、驚いて固まってしまった。言わずもがな、あの黒服の男である。どうしてこの人は、いつも心臓に悪い現れ方をするのだろうか。

「……ええ、まあ」

「どちらへ」

「あなたには関係ないじゃないですか」

私は男を背にしてドアに鍵をかけ、できるだけそちらを見ないように歩き出した。自然と足が速くなる。

「彼は、ゆうべこちらへはお戻りにならなかったようですね」

「……よくご存知ですね」

男が後ろからついてくる気配がする。

「心配じゃありませんか」

「会社へは、いまさっき電話しました」

「ちゃんと出社してましたか？」

「ええ、そう聞きました」

「おや、直接お話はしなかったんですか」

「同僚の方にお聞きしただけです」

「本当ですかね」

「……どういう意味ですか」

私は顔だけを男の方へ向け、歩きながら言った。何が言いたいのだろう。

「何で会社の方が、私に嘘をつく必要があるのですか」

「アリバイサービス会社ってご存知ですか」

「……いえ」

私の心の中を不安の影がよぎった。

「風俗関係で働いている女性とか、あるいは会社をリストラされてしまった人たちなどが、そのことを家族や知人たちに隠すために、架空の会社に勤めているように装うサービスがあるらしいんですね」
「……」

私は立ち止まってしまった。

「名刺や履歴書の偽造はもちろん、時には偽の保険証も用意するそうですね。なかなか手の込んだやり方ですね。その人宛に家族から会社へ連絡が入った時には、担当者が来客中とか外出中とか適当な嘘をついて、すぐには電話に出させないんだとか。そしてすぐ担当者から本人に連絡をして、本人から折り返し連絡させるようにするんだそうですね。相手も簡単にだまされるみたいですよ。よほどのことがない限り、ちゃんとした会社勤めと思い込むでしょうね」
「何が言いたいんですか」

とうとう私は口に出して言うてしまった。

「いえ、……あなたが彼について、一体どれだけご存知なのかと思ひまして」

「彼は私の知っている会社に勤めていないと、おっしゃりたいんですか」

「そこまでは言うていませんよ。ただ人を欺くことは、非常に簡単なことだということです。家族に知られぬ小さな秘密を作ることなんてのはね」

「彼もその小さな秘密とやらを隠しているというのですか」

「それはわかりません」

「わからないのは私の方だわ！」

のせられまいと思いつつも、つつい声が大きくなってしまった。男は飄々とした態度で話をつづける。

「つまり何故嘘をつくのか。何故隠そうとするのか、ということですね。その理由ですね」

男は両手をポケットに入れたまま、すぐ側のアパートの壁に背をもたれた。それは昨日の朝、私がこの男を初めてみたときと同じ格

好であつた。

「大なり小なり理由が伴うものなんですよ。ただ、その理由が問題でしてね。ある種の後ろめたさゆえ、なのかも知れません。やむにやまれぬ事情があつたのかもしれない。真実がわかつたからといって、それが当人にもまわりにも、良いことであるとも限りません」

「あなたは、私があなたの依頼人突き止めようとしていることを、あきらめさせようとしているのね」

私は男の正面に回つていった。やっと私の鈍い頭でも理解できた。さきほどの男ののりくらりとした態度は、私の意気込みを削ごうとする意図が明白だつた。よくよく考えれば、彼が何処の会社に勤めているか、男の言うようなアライバ会社を本当に利用しているかどうかなど、男はすでに調査済みのはずではないか。私の不安をあおり、また私を怒らせることにより、本来の目的や目標を見誤らせる魂胆であるのかもしれない。

「かも……しれません」

男は頭を掻きながら、また断定を避けるかのように答えた。これも男のポーズなのだ。その手にはのるものか。

「だからといって、知らないままであることの方がいいことだとは限らないじゃないですか」

と、私は言つた。それならば、私の方にだって大きな理由というものがあるのだ。

「それでも、あなたのやろうとしていることは……無謀だと思ひます」

男は言いにくそうに言つた。

「そんなことはわかつています」

「いいえ。わかつていらつしやらないんだと思います」

男は今度はきつぱりと言つた。だが、その顔はあの悲しそうな表情をしていた。

「あなたは真つ直ぐな方なのだと思います。そして物事に対して、すべて真正面からぶつかろうとしている。あくまで正攻法でね。そ

して相手に対しても、そうあるべきだと考えている」

「そのどこがいけないのですか？ ……確かに私は馬鹿正直かもしれません。でも、私にはこんな生き方しかできないのです」

「……本当にそうでしょうか。世間では、もっと巧妙でしたたかな生き方もあるじゃないですか。たとえ昨日愛する人が亡くなったとしても、明日には別な恋人を作ってその時間をすごすことができる。そんなものなんですよ」

ふと私の脳裏に、バイト先のあの娘の姿が浮かんだ。

「それは……あなたは私に、彼のことをあきらめるとおっしゃっているんですか」

「別な生き方、別な人生の過ごし方もあるんじゃないか、そう思っただけです。あなたにふさわしい……何か別の人生が……」

「ありがとうございます。でもそれは、あなたにも言えることじゃありませんか。人を殺すより、何かほかのやり方が……」

男は黙ってしまった。私たちはお互い見つめあったまま、なかなか口を開こうとしなかった。長いながい間があった。

「彼はもう……死んでいるのですか」

私は精一杯の力を振り絞って、言った。

「いいえ……まだ……」

「本当に」

「本当です」

男も私から視線をそらさずに、はっきりと答えてくれた。私は大きく息を吐いた。

「そう……ですか」

「……」

「もうひとつ……お聞きしてもいいですか」

「……なんでしょう」

「気を悪くしたらごめんなさい。その……つまり……あなたは一体、何ですか？」

「……私はただの殺し屋ですよ」

「うつん、そうじゃなくて。……なんていえばいいのかしら」

「……どうぞ」

「つまり、私は、あなたという人が、よくわからなくなってきているのです」

強い冷たい木枯らしがふいた。だが、男も私もそれをさけようとはしなかった。

「あなたはゆうべから、何度も私の目の前に現れていますよね。そんな目立つ格好をして私に印象付いたり、いきなり声をかけたりして私を怖がらせたり。かと思うと、不良たちから私を守ってくれたり、今のように親身になって忠告をしてくれたり……。あなたの目的は、彼なんでしょう？　なのになぜ、私に必要以上に接してくるのですか」

「……」

「前にも言ったかもしれませんが、殺し屋というのは、それこそ人知れずに行動しなければいけないんじゃないでしょうか。ただあなたはその逆を行おうとしている。私の目に止まろうとしている。……どうしてです？」

事実、（まだ男の手によるものだとはいきり確認したわけではないが）先の彼の同級生の死は、それぞれ事故死として処理されている。それと同じように、時間と場所と方法さえ気をつければ、たとえ彼が突然死したとしても、その死因を疑う人間なんて（私を含めて）ほとんどいないはずではないのか。

しばらく互いに沈黙が続いた。やがて男は私の視線をそらすかのように、ゆっくりと壁から離れて話し始めた。

「しばらくこんな仕事をしていますとね。たまに趣向を変えたいなるときがあるんですよ。……ただそれだけのことです」

抑揚のない喋り方だった。私は男が本当のことを話してないと思った。それこそ理由がきつとある。何故話してくれないのだろう。

「でも、まったくそうですね。あなたのおっしゃるとおりだ。……おかしい話ですよ、こんなの……」

「このお仕事、長いんですか」

淡々と話し続けようとする男の言葉を遮って、私がした質問はなんと人間の抜けたものだった。相手は人を殺して、しかもその犯罪を商売にしている人間なのだ。だが男は笑うでもなく、真面目にその問いに答えてくれた。

「そうですね……。もう七、八年にはなりますか」

「どうして、こんな仕事を……？」

いずれにせよ、割に合う仕事とも思えない。

「さあ、忘れました。昔のことです」

ここでやつと男は笑みを浮かべた。しかしその笑いはどこかぎこちなかった。それに、私とは視線を合わせようとは決してしなかった。

「私には……あなたがあんなことをするような人には……とても思えないんです」

私の目の前にいるのは、シャイで真面目で不器用そうな一人の若者だった。わざと偽悪ぶろうとして、変に肩に力が入りすぎてしまうような青年だった。気持ちよりも体の方が先に大きくなりすぎてしまつて、それをいつまでも持て余しているかのようにも見えた。

「それは買いかぶり過ぎですよ。私はそれほど立派な人間じゃありません」

「そんなことは、ないと思います」

「……ありがとう」

男は軽く頭を下げた。さっきよりは少しは柔らかな笑みになっていた。しかしそれとは逆に私の心には、先ほどから淀んだ霧のようなものが覆い始めていた。それを口に出すことを私はためらい、何とかそれを押しとどめて、必死に別な言葉をつむごうとしていた。

「お金をもらつて人を殺すつて、楽しいですか？」

私ははつとなった。それまでの気持ちを抑えるのに集中しようとしたあまり、あまりにもそれとはかけ離れた言葉が口から零れ落ちてしまつていた。自分の心の奥底に、そんな秘められた悪意があつ

たことを知って、悲しくなった。

「ご、ごめんなさい。こんなことを聞くつもりじゃ……」

「あなたはどっと思っていらっしゃるのですか」

今度は男の方が、私の弁明を遮るかのように問いかけてきた。先ほどの優しい口調ではあったが、あくまでそれはうわべだけのものだった。これまで少しずつではあるが、垣間見え始めた男の内に、また厚いカーテンが閉められたかのような感覚があった。

怒っているというわけではない。なんと答えようかと迷っているかのようにも見えた。意識して自分の意見を封じ込め、相手の出方を見て言葉を選ぶかのように。そしてそれは……その姿はまるで……。

「楽しいですよ。……とてもね」

そして男は、「わざと」、そう言い放つのであった。

「やめて！」

私は叫んでいた。

そうだ。私は男の姿に自分を見ていた。それは鏡に映った自分の姿なのだ。そして男も、そのことに気がついていて。お互いに相手が気になるのは、そのためなのだ。

「……すみません」

長い沈黙の後、私は深く頭を下げた。できればこのまま消えてなくなりたいとも思っていた。

「謝ることはありませんよ。悪いのは私の方なんですから」

「いえ……そうではないんです……」

私はこの男を否定したかった。私は私を否定したかった。なんてむなしいことだろう。なんて悲しいことだろう。

「……お願いがあります」

「なんでしよう」

私は何とか力を振り絞って、こう告げた。

「私のことを思ってくださいさるのなら、……彼を殺すことをあきらめて下さい」

「……」

「お金なら払います。依頼額の二倍、三倍、いえ十倍だってかまいません。お望みの額をお支払いします。今すぐには無理でも、何年かかっても必ず……。それでも不十分というのなら、私を、私のことを……」

「おやめなさい」

男は言った。またあの悲しそうな表情に戻っていた。私はどうなつてもかまわない。彼にどんな秘密があつてもかまわない。ただ彼のことは、彼を愛した自分の気持ちだけは否定されなくなかった。ただそれだけだったのに。

「いいですか。自分をこれ以上貶めることはもうおやめなさい。それに私はお金のためだけでこの仕事をしているわけではないんです」「それは今度のことも、同じなのです」

「……ええ」

彼は、死に値するような人間ということなのか。私の気持ちの中で、さつきまではすぐ近くまでたどり寄せることができたと思った男の存在が、今は前よりも遠く離れてしまったように思えた。

「わかりました。取り乱してすみませんでした」

「……いえ」

「最後にもうひとつだけお尋ねしてもいいですか」

「……どうぞ」

「仁科という名前に聞き覚えはありませんか？」

「……」

「答えてください」

「……いいえ。そのような『男』は知りません」

「……ありがとうございます」

それで十分だった。私は男に頭を下げて、再び駅への道を歩き始めた。背中に男の視線を痛いほど感じたが、私の後をつけてくる気配はなかった。

私の見え透いた問いかけに、男はわざとのつてきてくれた。私は

「仁科」という人物を、男性とも女性とも言っていない。だが黒服はそれが「男」であることを知っていた。単なる偶然であろうか。連続する彼の同級生の死は、やはりこの男の手によるものではないのか。

私はいつしか歩きながら泣いていた。せつかくの化粧も無茶苦茶になってしまっているに違いない。だが私は顔を上げたまま、まっすぐに前を見据えて歩いていた。くじけてなどいられない。なぜなら、まだまだスタートラインに立たばかりなのだから。

その八

駅のトイレで化粧を直すのに手間取ったが、何とか待ち合わせの時間には間に合った。島崎さんが指定した駅の近くの喫茶店は狭く、お昼時にもかかわらず店内には客はほとんどいなかった。私は食欲がやはり湧かなかったため、レモンティーだけ頼むことにした。

やがて待ち合わせの時間から十分ほど遅れて、島崎さんが姿を現した。

「いやいや、すみません。客からの電話に時間とられてしまつて。何言っているかさっぱりわからないやつで、ホント、困っちゃいましたよ」

そう早口でまくし立てると、席に座るや否や、大声でピラフとハムサンドとサラダとコーヒーを矢継ぎ早に注文した。

「いやあ、これくらい食べないと、午後からやっていけないもので」と照れくさそうに頭を掻いた。

「あ、あとですね。申し訳ないんですが、それほど長居できなくなつてしまいましたね。風邪でバイトが三人も休みやがりました。うちのフロアも手が足りなくなっちゃつて」

仮病を使つてバイトを休んでしまった私には耳の痛い話だった。

島崎さんは、都内にいくつも支店のある大型有名ディスカウントストアに勤めている。かなりのやり手らしく、もうフロアの主任を任されているのだそうだ。

「お忙しいところ、無理言つてすみません」

「いえいえ、他ならぬ奥さんの頼みですから」

そう言つて島崎さんは笑った。やっぱり面と向かつて「奥さん」と言われてしまうと、なんとなくむず痒い。しかし、その人懐こそうな笑顔を見ていると、いちいちそれを訂正する気にはならなかった。

「それであの、アルバムは……」

「あ、はいはい。ちゃんと持ってきていますよ。これです」

島崎さんはバックの中からそのアルバムを引っ張り出した。すぐに私に手渡そうとしたが、ちよつと思いとどまって、それをまた引っ込めた。

「奥さんさあ、夕べの電話で江藤のかわりに、仁科の葬式にも出たなんて言っていたけど、あれ、単なる口実でしょ」

「えっ？」

いったい何を言い出すつもりなのか。

「図星でしょ。あいつのことで何か気になることでもあったんじゃないですか」

「気になること……？」

「やっぱり、あるんだ」

「いや、でも、それは……」

「ゆづべもあれからいろいろ考えてみたんですけどね」

と言って、低い声で含み笑いをした。笑うと目と目じりのしわが一緒になって見えなくなる。見かけによらず（と言っては失礼だが）鋭いところもあるのかもしれない。島崎さんになら相談してもいいかも、と私は思い始めていた。今度のことについて、私の考えを笑うことなく、協力してもらえそうな気もしてきた。

「ズバリ！ あいつの浮気を疑っているんですよ？」

「は？」

まったく予想だにしない解答が返ってきて、私は啞然としてしまった。島崎さんは、そんな私を見て、わが意を得たりとケタケタ笑い始めた。

「例えばさ、高校時代にいつしよだった女からあいつに連絡があつてさ、それから妙に奥さんに対してよそよそしい態度をとるようになったきてさ、帰りは遅くなるし、連絡はいつも取れなくなる。本人は仕事だつていつていても、どうなのかこつちはわからないものね。今もどこかでその女といちゃついているんじゃないか、そう思ったらいても立ってもいられなくなっちゃって。そんなときにちょ

うど俺からの電話があつたものだから、これ幸いと俺のことをダシにして、その女がどんな奴か確かめようと思つたんでしょ。そんなところじゃないですか」

よくもまあ、そんな馬鹿な想像ができるものだ。私の島崎さんに対する評価は、また百八十度変わってしまった。

「違います！ そんなことじゃありません」

「いいですよ、隠さなくても。だってそういうことじゃなきゃ、アルバムなんて貸してもらうために、わざわざこんなところまで出てこないでしょう。あいつには秘密で、いろいろと調べたい大事なことがあつたんでしょ」

「ええ……確かに……それは……」

「ほづらやっぱりだ」

島崎さんはまた笑つた。明らかに他人の不幸を楽しんでいるかのように見えた。私はあきれた。これでは本当のことを話しても、まったく信じてはもらえないだろう。自分が了見の狭い女だと思われるのは癪だったが、あえて島崎さんの思い込みはそのままにすることをとした。とにかく、アルバムは見せてもらわなければならないのだ。

「でもなあ、俺も一緒にいましたからよくわかりますけれども、うちの学校、あんまり大した女子はいませんでしたよ……」

「と、とにかく、ちよつと見せてもらえますか」

やつとのこととで、私はそのアルバムを手にすることができた。緑色の装丁で、あまり厚くもない。まあかさばるような代物なら、たとえ私が頼んだとしても、島崎さんはここまで持つてきてくれることもなかったに違いない。

中身は一般的なよくある内容のようだった。最初に校歌が書かれていて、それから校長をはじめとする教職員の写真、校舎などの全体写真、体育祭や文化祭などのイベントや授業風景のスナップが続いて、それから一組からの生徒たちの集合写真と個々の顔写真のページになった。

彼と島崎さんがいたのは四組である。やや顔を斜め下に向け、眉間にしわを寄せながら上目遣いにこちらをにらんでいる彼の写真があった。

「馬鹿でしょう。つっぱっているのが格好いいと思ってたんだよね、この頃は。まあ、俺も人のことは言えないんだけどね」

見れば、島崎さんも似たようなアングルで写真に納まっている。何だか可笑しかった。

中島・仁科の両氏も見つけることができた。このわずか数年後に、自分の命が絶たれてしまうなんて、想像できなかったに違いない。「こちらが先日亡くなったという……？」

「えっ？ あっ、そうですそうです。俺たち三年間同じクラスでしたから。よくつるんでいましたよ。ちょっといいですか。確か前のページに……ほらこれ」

前ページの日常のスナップ写真の中に、文化祭のときのものだろうか、喫茶店の催しでエプロン姿の四人が写っているのがあった。「こんな気持ち悪い写真、残さなくてもいいのにさあ……」

それでもいい思い出なのだろう。私の体験することの出来なかった、文字通り高校時代の青春のページがここにある。島崎さんは照れくさそうだった。気がつく注文した品はきっちり平らげられて、ピラフの皿はすでに空だし、サンドイッチも後一切れぐらいしか残っていなかった。

「じゃあ、今度のことは、突然のことでショックだったでしょうね」「いやあ、ゆうべも言ったかもしれないけど、中島なんて高校出てからほとんど連絡とってませんでしたしね。仁科もねえ。あんまり悲しいとか言うのはちょっとないかもですね。まあ確かに死んでしまったって言うのは、びっくりしましたけれども、これで三人目のことですしね」

三人目？

「あの……三人目って、仁科さんと中島さん以外で、同じクラスでお亡くなりになった方がいらっしゃるんですか？」

「ああ、そうですよ。……ちょっと貸してください」

島崎さんは食後のコーヒーを飲み干すと、アルバムを手にした。

「ええと。コイツですよコイツ」

と言つて、メガネをかけたやせた一人の青年を指差した。

「なんか陰気そうな奴でしょ。実際そうだったんですけれどね。……向井って言つて、卒業してから一年か二年ぐらいしてかな、いきなり死んだらしいんですよ。なんでもなにかの病気でずうつと入院していたらしくて」

集合写真の中で見るとよくわかるが、小柄な上に痩せていて、確かに健康そうには見えない。うつむきがちにカメラの方に向かってこちらを見る目つきも、どこかうつろだった。

「病気で入院してたつておっしゃいましたけど、どんな病気だったんですか」

「さあ……」

「この頃から、お体も悪かったんですか」

「どうだったかなあ。いや、そんなことはなかったと思いますよ。体育だつていつも出ていた記憶もあるし。高校卒業してからの病気なんじゃないですかね。俺も知り合いからのまた聞きなもので」

「この方のお葬式には、皆さん出席されたんですか」

「だつて知りませんでしたもん」

島崎さんは、何を馬鹿なことを聞くのかといった表情をして、ポケットから煙草を取り出して、火をつけた。

「あと、これも聞いた話なんですけれどね。当時のクラスメイトだった人間には、誰にも知らせなかったらしいんですよ。それでもまあ、近所に住んでいた奴らはわかりますよね。で何人かは参列しようとしたんですけれども、母親に全部追いつ返されたとか」

「……どうしてなんですか」

「わからないですよ。わからないですけども、……言っちゃあなんですけど、聞くところによるとコイツの母親がちょっとコレらしくて」

と、頭の横で指をくると回して見せた。

「自分の息子が死んだのは、そのクラスメイトのせいだって思い込んでいたらしいんですね」

「クラスの皆さんが、原因？」

「ええ、というか、学校全体って行ったほうがいいのかな。向井が通っていたとき、その高校にいた奴ら全部です。当時の校長や担任も含めて」

まさか……それは……。

「……どういふことなんですか」

「いじめですよ、いじめ。その高校でいじめがあつたつていうんです」

やはりそうなのか……。一瞬、自分の学生時代のことフラッシュバックした。

「向井が死んだのは、それが原因だつたつて、葬式の時もわめき散らしていたらしいんですね。でも、誰もそんな大層なことした記憶がまったくなくて。へんな濡れ衣を着せられて、大迷惑ですよ」

「……本当なんですか？ いじめはなかったつて」

「そんな馬鹿なことしませんよ。だって写真見てもわかるでしょ。コイツ本当に暗くて、何考えているかわからないような奴だつたんですよ。声かけてもぼそぼそ聞こえないような声で話すし、気味悪いし。俺は係わり合いを持ちたくありませんでしたね。皆もそうだったんじゃないですか」

「それは、『無視』していた、ということですか、島崎さんだけでなく、クラスの方々も、みんな」

島崎さんはすぐには答えようとせず、さほど短くもなっていない煙草を、急いでもみ消した。

「……そうですね。無視していても視界に入ってくるような奴でしたけど」

結局、いじめはあつたのではないのか。肉体的ではなく、精神的なもの。あながちその母親が言っていることは、間違つてはいな

いのではないだろうか。

「でもコイツが死んだのは、卒業してからかなりたってからですよ。どこか勤め先か就学先でなんかあったのかもしれないし、自殺したわけでも遺書を残したわけでもないみたいだし……。昔のことをあれこれ穿り返して、逆恨みされても……ねえ」

私を見る目に、非難の色を感じ取ったのか、島崎さんは早口でそうまくし立てた。それはおそらく、その同じクラスの他の人たちもそう感じていることなのだろう。自分たちのせいではない。自分たちは悪くない。あくまで濡れ衣なのだと。だが、母親はそうは思わなかった。ひょっとしていじめがあつたこと、そしてその後の死の原因が高校時代にあつたということを、確信するに足る何かがあつたのではないだろうか。島崎さんたちが忘れてしまったような、ささいな、それでいて重要な出来事が。

私は今度の殺人の依頼をしたのが、その母親ではないかと思い始めていた。だがまだ情報としては少なく、決め手に欠ける。まさか彼を含めた当時同じ高校にいた人間全員を、皆殺しにするという訳でもないだろう。それはますます非現実な行為だ。

となると、ここ最近亡くなった二人と 考えたくはないが彼と、この向井という青年との間には、何か特別な関係があつた可能性が考えられる。他にもそんな人物がいるかもしれない。たとえば島崎さんもその一人であることも考えられるが、今の状況ではこれ以上聞き出すことは難しそうだった。

その母親に会ってみよう。私はそう心に決めた。素直に全てを認めてくれるとは思えない。だが、まずは一目見てみたかった。直接会話してみたかった。すべてを知るには、それが一番の近道ではないだろうか。一か八か、その可能性にかけてみようと思った。

あの黒服の男の言葉が頭に浮かんた。確かにもつとうまく、真実を突き止めるやり方があるのかもしれない。でも私には、やっぱり私にはこんなやり方しかできないのだ。後悔しないためには、今、自分が最良と思えることをやるべきなのだ。

いつしか会話はすっかり途絶えてしまっていた。島崎さんはそんな沈黙に絶えられなくなったのか、休み時間の終わりが近づいたためか、そそくさと自分の伝票だけもって出ていってしまった。結局アルバムは、そのまま借り受ける形となった。

私はずっと向井青年の写真を眺めていた。これまでも、そしてこれから会うことのできない人物。その当時に会っていれば、友達になることもできただろうか。互いに相手を理解することもできただろうか。私が本当に話をしてみたいのは、母親ではなく、実はこの青年なのであった。

その九

店を出てから、携帯から彼に電話を試してみた。

「……はい」

「もしもし、哲ちゃん。あたし」

彼は電話に出てくれた。まだ生きているし、きっと会社にも（本当の会社にも）出社しているに違いない。私はほっと胸をなでおろし、あまりにも安心しすぎてしまったため、その時の会話に大きな間が空いてしまっていることに、しばらく気がつかなかった。

「もしもし？ 哲ちゃん？」

「聞こえてるよ。……なんだよ。何か用かよ」

「ごめんなさい。でも心配で……」

「何がだよ」

「ゆうべはアパートの方に戻らなかったじゃない。だから……」

「留守電にメッセージ入れといたろ。仕事で遅くなっちゃったから、帰るのがめんどくさくなっただけだよ」

島崎さんの言葉が頭をよぎった。 「帰りが遅いのは仕事のせいだって言うけど、本当のところは……」 馬鹿な。彼の何を疑うというのか。

「ねえ、朝ご飯はちゃんと食べた？」

「食った食った。……もういいか。切るぞ」

「あ、待つて。……今日も遅いの？」

「……そんなもん、わかんねえよ。仕事の出来次第だからな」

「後でちゃんと帰れるかどうか連絡頂戴ね」

「ああ。わかったわかった」

「……哲ちゃん」

「なんだよ。まだあんのか」

私は向井という彼の元同級生のことを聞いてみたかった。彼は覚えていたのだろうか。

「うっん。何でもない。……お仕事頑張ってね。それから……気を付けて」

だがそのことも、あの黒服のことも、何も聞くことはできなかった。

「わかったよ。じゃあな」

電話は切れた。まだ大丈夫かもしれない。知らないままならその方がいい。私は携帯電話をかばんにしまった。

私はこれからのことを少し考えるために、近くの公園に入った。そこは昨日の公園とは違い、都会の緑化対策のために設けられたかなり大きな場所で、一息入れにきているサラリーマンやベビーカーを押す若い主婦、散歩に来たと思わしきお年寄りたちが点在していた。しばらく歩いた後、まわりに人がいないベンチを見つけ、そこへ腰掛けた。

遠くから音楽が聞こえてきた。近くの店が店内で流している有線なのか、誰かがラジカセを持ち込んでいるのかはわからないが、最近、良く聞く曲であるようだ。歌っている歌手や曲名についてはよく知らない。だが、よく聞くということは、それだけ人気のある曲なのだろう。それとも流行らせるために、頻繁にかけているだけののだろうか。

しばらくその曲に耳を傾けていると、それはいわゆる「信じれば夢はきつとかなう」ということを言いたいらしかった。サビの箇所ですそのことを強調するかのように、なんども繰り返している。それはこれまで手を変え品を変え、常にずっと歌われてきたことでもあるのだろうか。

夢……。私の夢とは何だろう。私は子供のころ、どんな夢があったのだろうか。

少なくとも、今の私の夢は、このまま何もなく平和に今の生活を続けて行きたい、ということだけだ。自分が愛した人、自分を認めてくれた人と一緒に、ずっと生きてゆきたい。貧しくなったってかまわない。誰にもわかってもらえなくてもかまわない。ただ、彼がい

れば。ただ彼と一緒にならば、それでいいのだ。

精一杯努力をすれば、心からそれを願うならば、そんなささやかな夢でもかなえることができるだろうか。

でも、何をどう努力すればよいのだろうか。何を信じればよいのだろうか。

私はかばんの中から、あのアルバムを取り出した。おしまいの方のページには、教職員と卒業生全員の住所が記載されている。先に亡くなった二人と彼の実家の住所、そして向井青年のものを急ぎメモした。そしてまた、クラス写真のページを開いた。

向井青年の写真をまじまじと眺める。ふと、この青年が抱いていた夢は何だったのだろうか、と思った。いじめを受けていたらしい高校時代。そして卒業後わずか数年でこの世を去るまで、何を夢見て生きていたのだろうか。叶うことはなかったかもしれないが、それは信じる力がたりなかったせいなのか。そんな馬鹿な。それは誰かが奪ったかもしれないのだ。そしてそれは……。

私の彼の仕業であるかもしれないのだ。

私の目の前に、あるひとつの可能性がある。それは今度の出来事のすべての真相であるかもしれない。仮にそれが本当のことであるのなら、私はどうするだろう。どうすればよいのだろうか。

私にできることは、この青年の死を悼み、そこから生まれてしまった恨みを開放することだけなのかもしれない。

私のために。私自身の夢のために。

それも、単なる私のおごりでしかないのだろうか。

私は必死にその考えを封じ込めようとした。その一方で、この青年ならわかってくれるはずだという、甘えにも似た期待があるのも事実だった。

その根拠はこの写真だった。この中にも、私がいる。いつも何かにおびえ、心を閉ざした悲しい目つきをした孤独な人間。それは学生時代の私のことではなかったか。ただひとつ違っているのは、もし私がクラスの何者かの手によって（直接的にせよ間接的にせよ）

命を落とすことになったとしても、私の親は恥じることはあっても悲しむことなどなかっただろう。もちろん殺し屋まで雇って復讐をしようなどと、これっぽっちも思いはしなかっただろう。

小さい頃から私は、親という暴君の元で虐げられ続けた奴隷のような存在だった。両親は二人ともプライドが高く、特に母親は世間体を人一倍気にするたちであつた。自分の生んで育てた子供たちは決して人前に出て恥ずかしくない存在でなければならぬ。と言うよりも、すべてにおいて人より抜きん出た存在でなければならぬ。と考え、それを強いた。実際高い学歴を持ち、職場でも世間でもかなりの地位を得ていた人たちではあつた。自分たちは優秀なのであるから、その子たちもそうあるべきだと考えていたのだ。

傍から見れば、単なる教育熱心な母親に見えたかもしれない。ところがそれは上辺だけで、その実その欲求は度を越していた。異常だつたと言つてもいい。

理想的なわが子を育てるために、まずあの人たちが行つたのは、親の絶対的な管理下におくことだった。テレビを見ることも許されなかつたし、自由に外で遊ぶこともままならず、決められたタイムスケジュールに沿つた生活を余儀なくされた。何時間もひたすらに机に向かう毎日。食生活にまで干渉して、間食や買い食いをすることなどもつての他であつた。そのころ家の外へ出られたのは、学校に行くときと習い事へ行くときだけだつたといつても過言ではない。

やがてそんな生活を続けているうちに、両親は自分の娘の方が大して優秀ではないことに気がついてしまった。私には歳の離れた兄がいたが、この兄がある意味要領がよく、親の期待にそれなりに応えたのに対し、私は劣等生であつた。ひとつの問題を解くだけでもすんなり答えにたどり着くことができず、理解するのに時間がかかり、同じ失敗を何度も繰り返す。特に一度躓くと、なかなか挽回できずに悪あがきして、ますます被害を拡大してしまう始末だつた。幼い頃から非常に不器用だつたのだ。

私なりに一生懸命努力は行っただが駄目だった。うまくはやらなかった。そんな私を両親はしかった。女だから幼いからということとは理由はならなかった。兄が出来ていることが私に出来なかったのだから。時には私に酷い体罰を与え、時には私をのしり、聞くに堪えない罵詈雑言が浴びせられた。ますます私は萎縮し、両親の期待からはどんどん外れていったのだった。

なかなか先に進めないのだから、成績も伸びなかった。管理や監視の目はますます厳しくなる。そして私は高校受験の時期を迎えた。両親は私を県内でもっとも優秀な進学校に入れたかった。でもその時の学力では、無理であることは誰の目にも明らかであった。担任もややランクの落ちる女子高を勧めたが、聞く耳はもたれず、その進学校にこだわり、無理にそこを受けさせられることになった。

それはあくまで面子の問題であった。それでもその時は、私はそれに従うほか道はなかった。今までの何倍もの勉強につぐ勉強。睡眠時間も減らされ、食事もろくにとれず、付きっ切りで私は監視されていた。今がいつ何処で自分が誰なのか何をしているのかさえわからなくなるときもあった。

そんな生活を続けていくうちに、私の体の方が悲鳴を上げた。一応病名は神経性の胃炎ということになったが、そんな生易しいものではなかったと思う。半死半生の状態で、ベッドに横たわる私に向かつて、それでもあの人たちはこう言い放ったものだ。

「こんな大事な時期に体を壊すなんてたるんでいる証拠だ」

冗談などではない。本当にそう言ったのだ。そして主治医の先生が止めるまで、私に病室で受験勉強を続けるよう強いたのだ。そんな度を越えた要求に、私はなんとか応えようとしていたのだが、無理だった。受験日までには退院することもできたのだが、さすがにそんな状態ではまともに試験を受けることなどできなかった。私はタフではなかった。逆境を跳ね返す力もなかった。私は受験に失敗した。高校はそこしか受験していなかったので、私は進学をあきらめざるを得なかった。

「お前は金ばかりを喰うクズだな」

発表の日、不合格の結果を報告した後で、母親はこうも言い放ち、さらに最後通告を下した。

「お前にはほとほと愛想が尽きた。もうお前に出してやる金など一銭もない。この家に居ようが外で暮らそうが好きにすればいいが、自分の生活費用は自分で稼げ。それから今までお前のために費やされた金も、全額返してもらうからそのつもりで……」

もうイヤだ。やはりこのことは思い出したくはない。私はベンチの上で、両の拳を握り締めたままぶるぶると震えていた。悲しみよりも、何よりも怒りが、あの人たちへの怒りが心のそこからわき出でていた。

死のうと思ったことも何度かある。でもそれを実行する勇気がなかった。たとえ私が死んだとしても、誰も悲しむ人間がいないのだと思うと、むなしくなり悲しくなった。私にできることと言えば、夜、やっと床に就くことのできた布団の中で、声を殺して泣くことだけだった。

こんな話は信じられないのかもしれない。しかし事実なのだ。あの人たちのせいで私は……私の人生は……。

お前たちこそ人間のクズだ。そうだ。死ぬべきなのはお前らのような連中なのだ。何故私が死ななければならないのか。何故彼が死ななければならないのか。何故あんな奴らがのうのうと生きながらえているのだ。そんなのは理不尽だ。許せない。許せない許せない許せない。努力すれば夢もかなう？ テレビの中でちやほやされているような人たちに、そんなこと言う権利などない。所詮口だけのたわごとだ。いつでも本当に救われたり、恵みを受けなければならぬ人間ばかりが、つらい目にあうなんて。世の中を器用に渡り歩くこずるい人間だけが、甘い汁を吸いつづけるなんて。そんな……そんなことって……。

私は負けない。私は間違つてなどいない。報われなければならぬのは私の方だ。そして今度こそ、夢をかなえてみせる。自分の思

い通りに未来を変えてみせる。必ず。全体に。きつと……。

ふとみれば、私のはす向かいのベンチには、いつしか一組の若いカップルがいた。女の子のひざの上に、男の子の方が頭を乗せて横になり、人目をはばからず、いちやっついて何事か話している。

私はその女の子に聞いてみたかった。もし今、側に居る彼氏が何者かに殺されるかもしれないとわかったら、生死にかかわる重大事に巻き込まれていたとしたら、あなたはいったい、どうするの？

自分の命をかけても、彼のこと守る？ それともそんな危険な状況からは逃れて、すぐに別な彼氏を見つけて、すべてを忘れてしまう？ それとも……それとも……？

私は、彼を、守ってみせるわ。必ず。

私は大きく深呼吸して空を見上げた。体が熱い。いろいろなことを考えいろいろなことを思い出し、体に変な力も入ってしまったためか、軽い疲労感すら感じられた。私は息を吐いて脱力し、そのまま空を眺めていた。いつしか大きな厚い雲が、空を覆い始めているのに気がついた。不吉な予感がする。だが私はあえて何も考えないようにした。ただひとつのことをのぞいて。

実は、今のこの世界は、嘘なのだ。このときの私の立場もこれまでの私の人生も、太陽を遮る黒雲でさえもすべて偽り……。誰かそうだと言ってくれないだろうか。何もかも、なくなってしまう……。私は目をつぶり、すべてが変わることの望みながら、ゆつくりとゆつくりと十を数えた。そして、再び目を開けたとき、その時、世界は……。

もちろん、何一つ変わってなどいない。負けるものか。その一言だけを、私は口にだしてつぶやいた。

その十

「もしもし。大丈夫ですか」

「……えっ」

はっと顔を上げると、目の前に心配そうな顔をした警察官が立っていた。

「どこかお体のかげんでも悪いのですか。真っ青ですよ」

「あつ、いえ、平気です。もう大丈夫です。ご心配なく」

私はあわてて立ち上がり、警官に頭を下げてそそくさとその場を離れた。いつの間にかベンチにへたり込んで眠ってしまったようだ。しばらくの間、記憶がまるでなかった。

心と体がうまくかみ合っていないかのようだ。こんなことで本当に大丈夫なのか。

先ほどから頭上を覆い始めていた雲が、さらにいつそう濃く黒くなった気がする。冬の早い日暮れとあいまって、あたりはすでに薄暗くなり始めていた。大した時間をこの街で過ごしたわけではないが、彼の田舎の方へ出向くのは時間的に難しいように思えた。見知らぬ土地でいろいろと調べたり、人に会ったりする（もちろん向井青年の母親ともできれば会わなければならない）には、もっと時間が必要だと思った。精神状態や体力にも不安があった。私はやむを得ず、いったんアパートへ戻ることにした。

しかし、次の日は無駄に時間を費やしたりしないようにしなければならぬ。ある程度は計画を立てておかねばならないだろう。私は帰りがけに大きな本屋に立ち寄って、地図と時刻表を探した。彼の地元の町並みと具体的な場所を確認し、移動や帰宅するまでの時間を調べておかねばならないと思ったからである。しばらく探していたが、なかなかいいの見当たらず、そこではやや大きめの地図と、ポケットサイズの時刻表を買い求めた。

会計を済ませ、外へ出ようと店内を横切った時、ふと、その一

角にいじめに関する書籍を集めたコーナーがあるのが目に止まった。ちよつと覗いてみると、小さなコーナーであつたが、多くの種類の書籍が並べられていた。過去のいじめが原因で大きな事件に発展したケースのドキュメント、現在の学校でのいじめのリアルタイムなレポート、どうすればいじめはなくなるのかといった対処方法等々……これだけの本が出ているということは、それだけ「いじめ」が深刻な問題であると言う証明であるように思えた。

だが 簡単にそれらに目を通した限りでは、どの本も根本的な問題解決のための術は見出せてはいない様子だつた。それは当然と言えば当然の結果なのかもしれない。「いじめ」が行われている最中は、いじている側や、それを取り巻くクラスメイトや教師や父兄たちにとっては、その行為が「いじめ」であるという認識は薄いものなのだ。何かことが起こつてはじめて、その重大さを知ることになるのである。そしてその時には、もう取り返しのつかない状態まで進んでしまつていくことが多いのだ。

私の小学中学時代も、「いじめ」はあつた、と言えると思う。このときの私は日頃から親にずっと責め続けられ、自分が無能な人間だと思わされて来ていたため、同じクラスの人間に対してもすっかり萎縮してしまつており、自然にコミュニケーションをとることもできなくなつていた。そして、まわりはそんな私のことを常に「無視」していた。何人かはちよつかいをかけてきたり、きまぐれに声をかけてくれることもあつたが、まともな受け答えすらできないので扱いづらいつわられるか、それつきりになることが多かった。

私はひとり隅のほうで、息を潜めて小さくなつていられるばかりであつた。心の中では誰かと友達になりたい、誰かに助けてもらいたいと考えていても、それを実行に移すことはできなかった。私にとって他人は、私を叱責しあざ笑うだけの存在に見えていたのだから。ここで何か事件や事故が起これば、世間の耳目を集めることにもなつたのかもしれないが、私はひとりで自滅しひとりで逃げ出しただけである。もつともその逃げるといふ行為ですらも、後の彼の存在がな

ければできなかったことだ。結果として、私は立ち直ることができた。私は過去を断ち切ることで、抑圧された人生にけじめをつけ、何とか生き延びることができているのである。

そうだ。いかにしてけじめをつけるか。というよりも、けじめは正しくはつきりとつけられなければならないのだ。そうでなければ、より悲惨で大きな事件が引き起こされてしまうことになるのではないか……。今回のように。

向井青年の母親にとってのけじめのつけ方が、今度のような誤った行為であったとしても、まだ時間はある。ほんのわずかもかもしれないが、ゼロではない。私はそう思うことにした。彼の代わりに、私がけじめをつけよう。私が過去の恨みの連鎖を断ち切らせよう。

私はその場を離れた。これらの本は参考にはなるが、実用的ではない。ただ、私ははつきりと、自分に必要とされるものがなんであるかを自覚することができた。この危機的事態を耐え抜く強さと、この状況を好転させる術を見つける理知。この二つだ。それがわかっただけでも、頼るべき人のいない私にとって、よいと思わねばならない。私は本屋を後にした。

駅に入ったあたりで、とうとう雨が降り出してきた。急いで飛び乗った電車の窓を無数の冷たい雨つぶが覆いはじめていた。傘は準備していない。駅に着くまでに、小降りになっているといいが。私は雨に関するいやな思い出を呼び戻すまいとしていた。あの日の、兄と母との……思い出を。

私はぐったりと電車のシートに深くもたれかかった。体がいやに重い。昨日あんなに走ったおかげで、足は筋肉痛だった。何度も転びそうになった。これまで運動とは無縁の生活を送ってきたので、当然と言えば当然なのかもしれないが。体を鍛えれば、あの黒服の男のようにすくなれるのだろうか。何の気なしに見上げると、その視線の先に都内の有名スポーツクラブの広告が私を見ていた。私はなんだかおかしくなって、声を出さずに笑った。偶然にしてはでき過ぎだ。

あの男はどこであんな体を作ったのだろう。どういう鍛え方をすれば、あんなに物凄くなるのだろうか。冬場とはいえ、何キロ走っても汗ひとつかかず、危険な三人の若者たちをあっという間になぎ倒す。まるでスーパーマンだ。まったくあの三人も、とんでもない人間を相手にしたものだ。

そう言えば、あの不良たちは結局どうなってしまったんだろう。

あの血だらけの惨状がフィードバックして、寒気がした。しかし元はと言えば、私がぶつかって謝らないで逃げようとしたことから始まったのだ。事の発端は私なのだ。あの三人の生死も気になる。もう一度現場へ行ってみようか……そんなことも考えた。

そうだ、新聞。ゆうべのあの出来事が事件記事になっているかもしれない。朝はいろいろなことで頭がいっぱいで、朝刊に目を通すことも、テレビを見ることもしなかった。あれだけの事件がニュースになっていないはずはない。もし誰か死んでいたらなおさらである。

私は駅に着くと、売店でビニール傘（無駄とは思いつつも買わざるを得なかった）と、いろいろな種類の新聞をまとめて購入した。それぞれに別角度から様々な情報が載っているかもしれないと思ったからだ。そして急いでアパートへ飛んで帰り、地元の新聞とあわせ一紙一紙くまなく目を通した。ところが……。

何も載ってはいなかった。どの新聞もすべて。

これは一体どういうことなのだろう。何がなんだかさっぱりわからない。夕べのことは、あれは夢だったのか。そんなことはない。あの血、あの声、あの鈍い音。忘れたくとも忘れられるものではない。それにあの男が逃げる前に、確かにパトカーのサイレンが聞こえてきた。誰かが現場を見ていたのだ。あの現場を見ていれば、誰だって騒がずにはいられないのではないか。なのに小さな記事にもなっていないのだ。

私はあれがニュースにならない可能性について考えてみた。一つはあの三人の怪我が思った以上に大した物ではなかったということ。

パトカーが近くを通っていたのは単なる偶然で、無事に三人はあの場を離れることができたという場合だ。

しかし、あの大量の血はどうだろう。路上にあれだけの血が残っていたら、皆何事があったかのかと、大きな騒ぎになるはずだ。まさかあの後、きれいさっぱりとなくなってしまうたわけではあるまい。それにあの量の血を流して、当人が無事でいられるとも考えられなかった。

もうひとつは警察などが何らかの形で、事件の公開を差し止めている場合だ。他に何らかの大きな組織が動いているかもしれないと考えたが、新聞社やマスコミを押さえ込むことができるほどの組織など、警察以外に考え付かなかった。しかしこちらでも納得できない。誘拐事件ならともかく、傷害事件（ひよつとしたら殺人事件）なのかもしれないのである。より広く事件の詳細を広めた方が、重要な情報や手がかりが手に入りやすいはずだ。

私はすぐにでも警察へ行つてすべてをぶちまけてしまいたかった。だが、すべてを相手に納得させる自信がなかった。あの時、一緒に男と逃げてしまったのが悔やまれる。警察は男と私の関係を深く追求するだろう。誰が信じてくれると言うのか。あの男は殺し屋で、私の大事な彼氏を殺そうとしている奴だと。名前も居場所も何も知らない男の言葉を鵜呑みにしている馬鹿な女と見られるだろう。

何一つ確かなものなどない。すべてが推測ばかりである。彼のかつての同級生の相次ぐ死を、今度の彼の殺人予告と関連があるのだと思い、そしてそれがやはり過去のいじめを受けた青年の死から端を発しているのだと、その母親が、復讐のために殺人を依頼したのだと。なんと冷静に考えればかけた発想なのだろう。

でも私は、あの男と会ったのだ。あの男と話したのだ。それをすべて否定することはできなかった。

何でもいい。はっきりしたことが知りたい。自分の力で、真実にたどり着きたい。後になって、こんなことがあったのだと、笑い話にできるならその方がいい。

私は新聞を片付け、テレビをつけた。ちょうど夕方のニュースの時間だった。新聞には載っていないくても、テレビで取り上げてはいないだろうか、そんな気持ちであったに過ぎないのだが……第一報で流れてきたニュースに私は愕然となった。

「本日、S区M公園内のベンチ付近で男性が倒れ、そのまま死亡するという事件が発生いたしました。この男性は内ポケットの社員証から、近くのディスカウントショップに勤務の島崎一夫さん、二十五歳と判明……」

私は画面に釘付けとなった。画面に映っているのは、さっきまで私がいた公園であり、写真は出なかったが、画面に出た文字は昼過ぎにあつたばかりの島崎さんの名前であつた。そしてその名前のすぐ側には、「死亡」の文字が……。死んだ？ 島崎さんが？ 私と会った後で、私もいた公園の中で殺されたのだ。

「……後頭部に錐のような鋭利な刃物で刺した後があり、この傷による出血死が原因と見て調査を進めております。島崎さんは本日の昼休み、人と会う約束があると言って外出してから職場には戻っておらず、警察ではこの待ち合わせの人物が、このたびの事件と何らかのかかわりがあると見て、調べを進めています」

携帯が鳴った。突然のその大きな音で、心臓が飛び出るかと思つてしまった。番号表示は非通知となっていた。普通ならそんな電話は無視するのだが、なにかの知らせのようなものを感じて、私はおそるおそる電話に出た。

「私です」

あの男だった。私ののが大きく鳴った。

「テレビをご覧になりましたか」

「……はい」

それから長い沈黙があつた。

「あなた……なのですね」

「はい」

簡潔な答えだった。

「私があそこで島崎さんと会うことを知っていたんですね」

「ええ」

「そして別れた後で、島崎さんを……」

「ええ。殺しました」

その短い受け答えの意味するものはとんでもなく重いものだった。

「私も……あの公園に行きました……」

「ええ。知っていましたよ」

「知っていて……ひょっとして、わざとそこで島崎さんを殺したのですか」

「そうかもしれません」

何か得体のしれないものが、頭の中を、体中を這いずり回っている。私の行動は、男にすべて筒抜けであった。私は男の手の中で、みじめにうごめいていただけにすぎないのだ。

「私……今度のことをすべて警察にお話します」

「それはやめた方がいいでしょう」

男は相変わらず抑揚のない声で答えた

「なにか確実な証拠でもあれば別なのでしょうが、警察は信じてはくれませんよ。それに生きている島崎に最後に会ったのはあなたですから。逆に変な疑いをかけられるかもしれません。ゆうべもあなたは私と一緒に逃げていますし」

「あれは……では、ゆうべのことが新聞にもテレビにも報道されていないのはどうしてです」

「さあ……何故でしょうね」

何という言い草だろう。私は腹が立った。私の心の中で黒服の男の存在が大きくなる分だけ、私のこの男に対する怒りも大きくなっていった。

「次は……彼の番なのですか」

「かも……しれませんが」

「私は今度の件の依頼人が誰であるか、うすうす検討がついています」

私ははつきりとそう告げたが、男は少しも動じる様子を感じさせなかった。

「それはすばらしい。でも、仮にあなたが思っている人がそうであったとしても、依頼を取り下げるなんて事は絶対にはないと思いますよ」

「何故ですか」

「それはその人にお会いになってみればわかるでしょう」

「負けるな。負けるな負けるな挫けるな。ここで負けてしまつてはいけない。」

「依頼人は、かつて彼や島崎さんと同じ高校に通っていた、向井という人のお母さんなのでしょう」

「……どうでしょう」

「それあの方の逆恨みです。向井さんがなくなったのは、高校を卒業してから何年もたつてからですし、それを今になって復讐しようだなんて、馬鹿げています」

「あなたは、あなたご自身も、本当にそうお考えなのですか」

私は息を呑んだ。その言葉に、そして男のその話し方に。いつの間にか、いつものあの男に戻っているようだ。悲しそうでそれでいてどこか寂しそうな……電話口の男の表情まではつきりと見える気がした。

「……すみません」

「いえ、あなたが謝られることはありませんよ。私も調子に乗りすぎました」

違う。いつも先に謝らなければならないのは、私の方だ。男は常に、本音で話をしようとしている。正面から私に向き合おうとしている。それから逃げようとしているのは、私なのだ。

「……いつ、何が起こったか、それは大した問題ではないんです。その結果として何が『残った』かが重要なのではないでしょうか」

と、男は続けた。それは私がこれまで考えていたことと、おおむね合致する考えともいえた。

「そしてそのために何をするのか、何をすべきなのか。それは今度のように、法的には道の外れた行為であるのかもしれませんが。それでも裁かれるのは、自分の心の中だけなのだと思います」

「でも……それがまだ間に合うのなら、私はなにかをしたいと思います」

「そうですね。それは正しいと思います」

その言葉を受けて、私も男に自分の決意を伝えることとした。

「私……明日、その向井さんのお母さんに会います」

「……そうですね」

返事が発せられるまで、やや間があった。

「自信なんてありません。でも、知りたいんです。何があったのか。話したいんです。今何を思っているかを。何故こんなことをなさったのか、そのわけを」

「前にも言ったかもしれませんが、真実を知ることがすべてよいことであるとは限りませんよ。あなたにはさらにづらい思いをなされるかもしれません」

「その覚悟は……できていると思います」

そうだ。私はひとりで闘うと決心したではないか。でも……。

「そうですね……あなたなら大丈夫でしょうね」

私は、男にもうひとつ伝えたいことがあった。

「あの……ひとつお願いがあります」

「何でしょうか」

私は呼吸を整えてから、

「明日、またお会いしていただけませんかと
言った。」

「えっ」

「私が母親の方とお会いした後で、もう一度直接お話がしたいんです。あなたと」

「それは……いったいどういうお考えなのですか」

男は明らかに戸惑っている様子だ。無理もない、と私も思う。

「不安……だからでしょうか。昨日から私の中で、色々なことがぐちゃぐちゃであやふやになっているんです。でもただひとつだけ、あなたが、あなたの存在だけが、確実なものなのです」
「……」

結局私はひとりでは何もできないということだろう。気持ちでは負けたくないと思っけていても、誰かの助けがほしかった。それを頼めるのも、もう黒服の男しかないのだ。

「わたしとあなたは今、どういう立場にあるのか……ご存知ですよ
ね」

「はい」

「つまりそれは……その……」

男が言葉を選ぶよりも先に、私の方から助け舟を出した。

「……そうですね。あなたの口から『はい』とは言えませんか
」
「……すみません」

電話の先でも、男は深く頭をたれているのだろうか。

「いえ、無理を言ってすみませんでした」

「でも……考えておきますよ」

「ありがとうございます」

「じゃあ……これで……」

「はい……」

電話は切れた。私は電話を受ける前とは、まるで違った気持ちになっけていた。心の安らぎと、ふつふつと湧き上がる前向きな意欲。あの男と話をした後は、なぜかいつもそんな気持ちになっている。私はまたゴロンと横になった。つけっぱなしだったテレビを消した。おなかも少しすいてきた。まだ化粧も落としていない。私にはやらなければならないことがたくさんある。これから、そしてあしたも。

私は勢いをつけて起き上がって、卓上の鏡を私の正面に置き、自分の顔を見つめた。そして朝と同じように笑顔を作っけて、「頑張れ」と自分に言い聞かせるのであつた。

その十一

週末ではあったが、都心行きの電車は嘘のようにすいていた。その後、別の郊外へ折り返す電車に乗り換えても、同じ状態であった。昨日から降り続けている雨のせいなのかもしれない。私はいろいろと静かに考えたい気分だったので、ゆっくり座って行けるのは好都合だった。

考えると言っても、実はずっとまったくの堂々巡りであった。何よりまだ、あの向井青年の母親と連絡を取っていなかったのだ。いきなり行ってもよいのだが、不在であるかもしれないし、会ってもらえるかもわからない。だからとりあえず連絡を先にしてみようと考えたのだが、家でも駅でもできずじまいだった。私はまた自分の優柔不断さをのろいながら、目的地向かう電車に揺られていた。

ゆうべはあまりよくは眠れなかった。極度の緊張とプレッシャーのためか、眠ることはできても、なんだか短い嫌な夢を見て、それですぐに目を覚ましてしまうということを繰り返した。その夢は、自分の忘れたい過去のものばかりであった。その中の、あの時の兄や母親の嗤い顔……。

私は頭を振った。忘れよう、思い出すまいとしても、あのことだけは強烈に頭に焼き付いていた。それはいつも思いがけない時にフラッシュバックして、私の心を暗く、みじめなものにしてしまうのだ。

窓から外を見る。曇ったガラスの向こうは、いつ止むともしれない強い雨が降っていた。そしてあの日もこんな雨が降っていた……。

それは、私があの家をでるきっかけともなった出来事であった。私はバイトを終えて帰ろうとしていた。外は雷も鳴るようなひどい夕立になっていた。出掛けに天気予報を確認してこなかったせいもあって、私は傘をもって来てはいなかった。しばらく待ってみた

が、雨脚はますます強くなって止む気配がみられない。私はあきらめて走って帰ることとした。

あの時、どこかで傘を買うかバイト先で傘を借りてさえいれば。急いで帰らず、どこかでゆっくり時間をつぶしてから戻っていれば。

バイト先から自宅まで、普通なら歩いて二十分ぐらいの距離だった。まだ暗くなっていなかったし、ほとんど道なりにまっすぐ進めば家に着くのである。少しぐらい濡れてもかまわないと思ったのが失敗だった。

私はすぐにずぶ濡れとなった。小さな鞆などでは、少しも雨よけにはなりはしなかった。服や靴は水を吸って重くなり、顔には強い雨粒が当たって痛かった。すぐに後悔したが、後の祭りである。必死になって走り続けるしかなかった。そしてなんとか家に着くことができたが、こんな濡れた格好では玄関からは入ることができない。母親に見つければ、何を言われるかわかったものではなかった。私は裏口にまわった。裏から入ってすぐの場所に風呂場があり、私は暖かいシャワーで早く体を洗い流したかった。

家の中に入る前に、できる限り服から水を絞って、おそろおそろ戸を開けた。母親がいれば別の雷が落ちる事を覚悟しておかねばならない。傘を忘れた私の不注意をのしり、こんな姿で帰ってきた私を叱責するだろう。しかし、そんなことは後でゆっくり聞くつもりだった。とにかくまずはシャワーを浴びることが、頭の中の大部分を占めていた。そうして中に入ってみると……

兄が立っていた。

私はびっくりして、しばらくその場に固まってしまった。何故なら兄は大学に入ると同時に独立し、都内で一人暮らしをしていたからである。休日でもないこの日に、我が家に兄がいたことに、私は困惑していた。

すでに私は兄とは、会話らしい会話をほとんど交わすことがなくなっていた。以前にも述べたとおり、兄は親の期待にそこそこ応え

る人間であり、逆に不器用で失敗ばかりの私を、いつしか見下すような目や態度をみせるようになっていた。口数が少なく、何を考えているかがわかりづらいこともあり、次第に私は兄を避けるようになっていた。母親とは別な意味で、兄が怖かったのである。なるべく顔を合わさぬように、こそこそ逃げ回ってばかりいた。だが事情はどうあれ、こうばかり出会ってしまつては、無視するわけにもいかない。私はぎこちなく頭を下げるだけだった。

兄は動かなかった。私なんかには挨拶をする義理などないと言うのだろうか。だが目だけはしっかりと私を見ていた。その目つきの異様に、私はもっと速く気がつくべきだった。

私は、白のブラウスを着ていた。そしてそれは雨に濡れ、肌にぴたりと張り付いて私の下着をはつきりと浮かび上がらせていたに違いない。兄の視線は、間違いなく、それを捕らえていた。

その時、兄が嗤った。

私はすぐに風呂場へ駆け込み、中から鍵をかけた。「視姦」という言葉があるが、まさにあの時の兄が取った行為がそうだった。しかもその卑しい態度を隠そうともしなかった。逆に見せ付けるかのごとくだった。あの嗤いがすべてをあらわしている。私は強い恐怖と深い憤りを感じていた。

狂ったように湯を浴び続けた。しかし先ほどの不快感は、熱いシャワーできれいに流がせるようなものではなかった。それに浴室のドアをすり抜けて、後ろからあの目が私の裸をじつと眺めているように思えて、気が気ではなかった。

私は少し冷静になつてから、あることに気がついた。最初に風呂場などに向かわずに、自分の部屋へ逃げ込めばよかったということに。洋服や下着の替えは、部屋の洋服ダンスの中にはいつている。私は今度はバスタオル一枚の姿で、あの兄の前を通らなければいけないのだ。

脱衣場から耳を澄ませば、家の中は驚くほど静まり返っている。母親もどこかへ出かけてしまっているようだ。雨音だけが遠くから

聞こえていた。近くに兄のいる気配も感じられない。

私はこの時も、母親が戻ってくるのを待つべきだったかもしれない。だがまだ心のどこかで、この状況を甘く見ていた。裸を見られたわけではない。兄だってそんなに長居をするはずはない。少しだけ怖い思いをするだけだ。それに自分と血が繋がった妹に、これ以上酷い目にあわせるはずはないとも考えていた。まだまだ兄のことを信じていたのだ。

私はおそろおそろ脱衣場の扉を開いた。開けた先には誰もいなかった。そおとそこから出て、居間の方も覗いてみたが、人がいる気配はない。いつのまにか家の中は真っ暗になっていた。もう兄は下宿へ帰ってしまったのかもしれない。

私は二階の自分の部屋へ向かって走り出した。部屋に入ってしまったえば、乾いた服を着てしまえば、この不安から開放される。暗闇の中、おそろおそろ階段を駆け上がり、目指す部屋のドアを開いて明かりをつけたその瞬間　私は、見た。

兄が、私のベッドに、座っていた。

やがて私を見上げたその顔は、先ほどの死んだ目と、卑しい嗤いで固まっていた。

兄は立ち上がった。そしてゆっくりとした手つきで、自分のシャツのボタンをはずしていく。ひとつひとつ。目は私を見据えたままだ。私は兄のその目に捉えられ、動くことができない。すべてのボタンをはずし終えると、無造作にシャツを剥ぎ取った。兄の異様にやせ細った上半身があらわになる。それから次にベルトとズボンのボタンをはずし、ジッパーをおろした。ズボンは蹴り上げるかのように乱雑に脱ぎ捨てられた。兄の体に実につけられているものは、グレーのブリーフのみとなった。中央の大きなふくらみ。兄はゆっくりと右手をそこへのばして……。

私はその時になつてはじめて、相手が何をしようとしているかが理解できた。というより、そうあつてはほしくないと願っていたことが、目前で行われていたのだ。たとえどんな人間であろうと、実

の妹に対してそんな……。そんなことを……。

頭よりも先に体が反応をした。ニゲナケレバナライ。すぐさま私は踵を返して、駆け出そうとした。だがそれよりも早く、ついさつきまで私の兄だと思っていた男の手が、私の髪をつかんだ。恐ろしい力で引つ張られ、私はベッドに倒された。

一匹の獣が私を襲ってきた。バスタオルがほどけそうになる。私は必死に抵抗しようとしたが、鬼のような力で手首をつかまれて離すことができなかった。胸がはだけた。そこへよだれをたらした大きな口がかぶさってきた。痛い。硬い歯がたてられて、乳房に激痛が走った。私は自分の足でなんとか相手の体を剥がそうともがいた。だが相手はその足すらも払いのけると、私の腹の上に馬乗りになった。その重みに顔をゆがめた瞬間、顔面に平手がとんできた。

何発も何発も私はぶたれた。体をよじって逃げようとしても駄目だった。そしてついに私が動けなくなるまで、その手は止まらなかった。

私は泣いた。なぜこのような目にあわなければならないのか。何故このような仕打ちを受けなければならないのか。荒い呼吸が聞こえる。そして私の体を何とも形容し難い、気味の悪いモノが這い回る感触がした。何をしているかわかりなくなかった。何も考えられなかった。

だが、やがてそれが下腹部に達しようとしたとき、どうにも我慢することができなくなった。私は思いつきり足に力を入れて相手を蹴り上げた。そうしてやつとのことで体を引き離すことができると、裸のまま急いで立ち上がり、出口へ向かって走り出した。しかし、私も完全に逃げ切ることはできなかった。後ろから羽交い絞めにあつて、そのままもつれてベッドに倒れこむ。また上から圧しかかられ、私は必死に抵抗を繰り返した。

すると突然、相手の手の動きが止まった。と同時に、何度も小さな痙攣を繰り返していた。恐る恐る顔を上げ、相手の視線の先をたどっていくと、あのグレーの下着の真ん中に大きなしみができてい

た。そしてそれは痙攣の動きとともに、大きくなっていくのであった。

男がはっと顔をあげた。顔を見合す形となる。一瞬にして相手の表情が悪鬼と化した。両の腕で私の髪をつかむと、強引に私の顔を自分の股間に押し付けようとした。不快なおいと感触で息もできない。苦しくてもがいたが、相手の力が緩むことはなかった。私は夢中で、思わずその部分を力いっぱい噛み付いてしまった。

「ぎゃっ」

初めて相手は声を出した。そしてやっと私から離れて、股間を押さえながら転げまわった。私は必死に口や顔をぬぐい、つばを何度も吐いたが、ぬるぬるとした不快感は、決して消えることはなかった。頭の中を鐘のようなものがめちゃくちゃに鳴り響いていた。早くこの場から逃げ出したい。早くこのいやな光景から目をそらしたい。私はゆらゆらと立ち上がり、三度出口へと歩を進めた。

「……………」

何か怒号のような咆哮のような声が聞こえた気がした。それはあの男から発せられたのかもしれないが、そうでないかもしれない。破れたグローブというか、つぶれたヒトデのみたいなものが、まっすぐ私に向かって伸びてきた。私はすんでのところでそれをかわし、やっと部屋の外へ出ることができた。私は後ろ手でドアを閉めた。中から恐ろしいほどの力でドアを叩いたり押したりしてくるので、私も全身で力を込めてそれを抑えなくてはならなかった。この部屋に何がいるのか、何故それを外に出さぬようにしているのか、それもわからなくなっていた。

それから先はよく覚えていない。すぐそばにいつの間にか誰かが立っていて、今度は甲高いノイズを奏でていた。それは母親であったような気もするし、近所の別の誰かであったような気もする。その音と同時に後ろから強い衝撃があつて、私は倒れ際に強く頭を打ち、そのまま気を失ってしまった。

再び目を覚ましたとき、私は両親の部屋のベッドの上にいた。い

つの間にかパジャマを着せられている。長い間眠っていたようだ。体が自分のものでないかのように重く感じられた。ひどい頭痛もした。そつと手を触れてみると頭には包帯が幾重にも巻かれていた。私はそのまましばらく横になっていたが、だんだんとひどくなる頭の痛みと、のどの渴きに耐えられなくなり、起き上がろうとした。だが、指一本動かそうとするだけで激痛が体を走った。なんとか片方の腕だけを布団から出すことに成功したが、そこにはいくつものみみず腫れと青あざがあった。これが体全体ではどのようなになっているのかと、想像するだけでも気分が悪くなりそうであった。

私は時間をかけてやつと布団から抜け出し、足を引きずりながら這うようにして部屋のドアを開いた。その瞬間、自分の部屋の惨状が目に入った。私の部屋は、この両親の部屋の隣に位置していたのだった。

部屋のドアは開いたまま斜めに傾き、大きな穴がいくつも開いて裂け目が斜めに走っていた。どす黒い血のしみが点々とついていた。部屋の中をのぞいてみると、さらにめちゃくちゃな状態になっていた。ベットから机から本棚からすべてがなぎ倒され、部屋中にいろいろなものが破壊され投げ捨てられていた。カーテンはぼろぼろに破かれており、窓ガラスにはいくつものひびが走っていた。強大な台風が、この部屋の中を通り過ぎて行ったかのようだった。

私はしばらく呆然とその光景を眺めていたが、次第に気持ちが悪くなり、その場を急いで離れようとした。と、そうして振り返ったとき、背後には、いつのまにか私の母親が立っていたのだった。

「……！」

母親の顔は無表情だった。だが、やがて母の心の中の声が、すべて私へと伝わってきた。それは耳をふさぎ、心を閉ざしてもどうすることもできなかった。

「今まで育ててやった恩を仇で返すようなまねを」

「世間様にどう顔向けすればよいのか」

「この娘があの子をたぶらかしたに違いない」

「いつもこの娘には裏切られてきた」
「ちゃんとした高校にも行かずまともに就職もせずぶらぶらと」
「外でどんなことをしているかわかったものじゃない」
「最近帰ってくるのも遅くなりがちだ」
「悪い男といちゃついて」
「このあばずれが」
「あの子はいいい子だったのに」
「親の言うことも良く聞いて」
「大学になじめなかったなんて間違いに決まってる」
「この女さえいなければ」
「私の人生もめちゃくちゃだ」
「被害者面してのうのうと」
「さっさと死ねばよかったのに」
「どうせ心の中では舌をだして」
「私たちをあざ嗤っているに違いない」
「満足行く結果になって良かったわね」
「かえせ」
「かわいかったあの子をかえせ」
「これまで築きあげてきたものをかえせ」
「私の幸せをかえせ」
「かえせかえせ今すぐかえせ」
「このメス豚」
「この人間のクズめ」
「私は決してお前を許しはしない」
「ひとおもいに殺してなどやるものか」
「お前のやったところへの報いを」
「その体に徹底的に刻み込んでやる」
「これからずっと」
「永遠に」
「永遠に」
「永遠に」

「永遠に」

「……」

昔読んだSF小説の中に、テレパシー能力を持つ少女の物語があった。少女は普段は意識して、相手の心を読まないように自分の心にも鍵をかけているのだが、なにかのきっかけでその留め金が外れてしまったとき、まわりにいる大勢の人の考えていることすべてが、洪水のように頭になだれ込んできてパニックを起こしてしまう、というシーンが印象的だった。その時の私は、その物語の少女と同じだった。ただひとつ違うことは、その思考はただ一人の人間、しかも母と呼んでいた女性から発せられた怨念であつたと言ふことだ。時間にしてみれば、ほんのわずかの出来事であつたかもしれない。しかしそれはまるで何百何千もの人から憎悪の念を浴びせられたかのようだった。

そしてその時、

母も、嗤った。

口元には確かに笑みが浮かんでいた。しかし目は真っ直ぐに射抜くように私を見つめ、その奥にはかすかに、それでいてめらめらと怒りの炎をたえぎらせていた。その表情は表面上は能の面を連想させたが、その内は悪鬼のごとくであつた。やがて私はその場に膝から崩れ落ちてしまった。

「……大丈夫？」

そつと女が私に近づいてきた。肩にその手が触れた。

「まだ歩き回れる状態じゃないわ……」

優しい言葉づかいとは裏腹に、その手には恐ろしいほどの力が込められていた。つめが深く私の肉に食い込んでいく。

「あんなことがあつたんですもの。当然よね。さ、ベッドに戻りましょう。元気になるまではずっと側についてあげる。これからずつと……」

ずつとずつとずつと……。

私は促されるままにベッドに向かうしかなかった。

……なんとかその手を逃れることができたのは、奇跡としか言いようがない。私にとって幸運だったのは、騒ぎがひと段落つくまでに時間がかかったことだった。女はおそらく警察などに呼ばれる機会もあり、一日中私を監視し続けることは不可能であった。父を名乗る人物は、あの日以来、自宅で姿を見せなくなっていた。家には私とあの女しか居らず、私が逃げるチャンスはまだまだ残っていたのである。私はじっくりと怪我を癒して力を蓄え、ある日とうとう逃げ出すことに成功した。私はその足で、彼のアパートへ転がり込んだ。その時彼はすでに就職をしていて、都内に居をかまえていたし、彼の存在についても、あの女に話してこなかったことが幸いした。彼も私を受け入れてくれた。こうして私は平穏で安息な地を、改めて得ることができたのである。

それから長い月日が流れた。確かにこのところの私たちの関係には、薄ら寒い木枯らしのような虚しさがあつたかもしれない。だがそれは私たちに課せられた試練なのだと考えることにした。お互い世人君子などではないのだ。それぞれ嫌な面、至らない面があつて当然なのだから。

そうだ。彼は何一つ変わってなどいない。それは昨夜あつた電話が証明しているではないか。

「俺……あいつの側についてやりたいんだよ」

彼からの電話がかかってきたのは、深夜遅くになつてからだつた。その声は暗く沈んでいた。島崎さんが運ばれた病院の外からかけているのだと言う。

「別に何ができるっていうわけじゃないんだよな。もうあいつは死んでしまつたんだし。もう何もかも手遅れなんだっていうことはわかってるんだ。わかってるんだけど……でも……それでも側にいてやりたいんだ。あいつとは小学校からの長い付き合いだったからな……」

長年の友人を失つた彼の気持ちを考えると胸が痛い。それにもち

るん、島崎さんの遺族の方々も、どんなに悲しんでいることだろう。

「司法解剖とかなんやらで、しばらくこの病院に安置されるみたいなんだ。俺もちょうど週末で休みだからさ、その間だけでも、一緒に……」

「……そう」

私は彼になんと言ってあげたら良いかわからなかった。

「ちくしょう、何処のどいつがあいつをあんな目に……許せねえよ、まったく」

私はそれが誰だか知っている。何故島崎さんが死ななければならなかったかも、ある程度の検討はついている。そして次は彼の番であることもわかっていいるのだ。この時なら彼も、ひよっとしたら、私の話を信じてくれるかもしれない。あるいは彼なら、良い智慧を出してくれるかもしれない。

だけどやつぱり、彼には言い出すことはできなかった。いや話してはいけないと思った。これは私自身の手で解決しなければならぬことだ。これまで幾度となく、彼に助けられてきたではないか。その恩を返すときなのだ。

「……じゃあ、そろそろ切るから。遅くにわるかったな。明日は早くにバイトなんだろ？」

「ううん。明日は休みだから……」

「あれ。今日がバイトの無い日だったんじゃないかったっけ」

「え、あ、うん。休んだことは変わりないんだけど、今日はちょっと風邪気味だったから……」

実は島崎さんと会い、島崎さんが殺された現場のすぐ近くにいたのなどとは、とてもじゃないが言えなかった。

「あ、ああ、そうなのか。大丈夫なのか」

「うん、もうだいぶよくなったから」

「そうか……。あんまり無理すんなよ」

「……うん。ありがとう……」

彼からこんな優しい言葉を聞いたのは久しぶりだ。付き合い始めた頃の、あのビデオ屋で一緒に働いていた頃の、彼の言葉であった。やっぱり彼は変わってなどいない。そしてそれは、私への十分すぎるほどの励ましとなった。

哲ちゃん、今度は私があなを救ってあげるからね

車内アナウンスが、いよいよ次が私の目的の駅であることを告げた。私は小さく気合を入れて立ち上がった。ドアの前に立つ。ゆっくりとその駅に列車が入り、止まった。

ドアが開いた。私はポンと飛び降りて、ホームですぐにバックから携帯を取り出した。

その十二

駅から十五分ぐらいの閑静な住宅街の中に、その家はあった。平凡な何処にでもあるような二階家で、私は迷うことなくそこへたどり着くことができた。表札の「向井」の文字を確認しながらインターホンのボタンを押す。

「……はい」

中から中年の女性らしき声が聞こえた。いよいよ母親と会うことになるのだ。

「先程、お電話いたしました伊藤というものですが……」

「……少々お待ち下さい」

私はもう一度大きく深呼吸した。しばらくした後、玄関のドアが開いて、小柄でやせた女性が姿を見せた。くすんだいろのセーターに藍色のスカート。それこそ何処の町にでもいるような「おばさん」であった。特に化粧をしている様子も見られない。

いささか拍子抜けしそうな感じであったが、私は身を引き締めた。この女性があゝの黒服に、連続殺人を依頼した人物であるかもしれないのだ。自分の息子の復讐を行おうとしているかもしれないのだ。

「わざわざ遠いところをごめんなさいね。寒かったですよ。さ、早く中へどうぞ」

傘をさし、急いで急いで表の門のところまで歩いてきた。そして門を開けると、私の濡れた肩にそっと手をやった。私は軽く頷いて、促されるままに家の中へ足を踏み入れた。

入った正面には階段があり、下駄箱の上には大きな花が飾っていた。階段脇の廊下を進むと、左手に八畳ほどの和室があった。中央に大きな仏壇が飾ってある。

「ゆっくりしていつて下さいね。今、お茶を入れますから」

「あ、いえ、お構いなく」

私を座らせるやいなや、すぐに台所へと消えた。かちゃかちゃと

カップか何かを用意する音がする。大きな石油ストーブがあかあかと火をともしていた。私が着くずっと前から、暖めておいてくれたらしい。見れば床の間にも、大きな花を生けた花瓶が飾ってある。生け花が趣味の方なのだろうか。

確かに鬼のような人物を想像していたわけではないが、しかし昨日の島崎さんの話から、会っただけでも相当手こずる事態になるのではと考えてはいた。

私は先の電話で、自分のことを中学時代の同級生だと名乗った（「伊藤」と言うのも思いつきで話した変名に過ぎない）。卒業前に引越してしまい、最近こちらへ戻ってきたので、死んだこともしなかったのだということにした。そしてぜひともご焼香させていただきたいのだが、といった風にお願いをしてみた。断られることも覚悟の上だったし、それでも何度でも頼み込もうと気合だけは十分だったのだが、相手はあっさりと来訪を承諾して、いきなり自宅に訪れた女をこうしてもてなしている。

「……昭一郎も、昔のお友達が見えると知れば、きっと喜ぶと思いますから」

電話口でこんなことまで言ったのだ。

私はまた、見た目の問題から、相手に別な懸念を抱かせるのでは（実際は私は向井青年よりも年下であるため）とも思ったが、こちらも杞憂に終わりそうだった（グレーのスーツが効果的だったかもしれない）。

まあいい。とにかく第一段階はクリアしたのだ。それでもやつぱりどこか落ち着かなくてそわそわしていると、おぼんにカップとお茶菓子をのせた母親が戻ってきた。

「何もないですけど」

「いえ、そんな……」

なんだか恐縮してしまう。

「あの……まず、お線香をあげさせて下さい」

「まあ、そうでしたわね」

テーブルをぐるりとまわって仏壇の扉を開いた。真ん中に向井青年の遺影が飾ってある。その写真は、昨日から私が何度も目に見ているものであった。上目遣いの悲しげな表情。あの卒業アルバムからとったのだろう。ただ、首から下は学生服ではなく、ワイシャツにネクタイをしていた。服を後から合成したものらしい。

「あなたが会っていた頃の面影があるかしら」

いつのまにか私のすぐ側に寄ってきていた母親がつぶやいた。

「本当はこの写真は使いたくなかったんだけど……。なかなか他にいいのがなくて。これでもまだ元気だった方なんです。高校を卒業してからのあの子はみるみるやつれていって……。仕事が忙しいうからだってあの子は言っていたけれど、病院に入院した頃にはもう……」

おしまいの方は声を詰まらせていた。私は遺影に線香を手向け、静かに手を合わせた。安らかに眠っていてほしい。そして彼や島崎さんたちが、あなたに対して行ったかもしれない罪を許してほしい。私は代わりに心からわびた。そしてもしこの母親が過ちを犯しているのならば、止めてくれるようお願いした。

「昭一郎、あなたの中学時代のお友達が、わざわざ来てくださったのよ。……中にはこんなに立派な方もいらしたのね……」

中には、か。私は実は面識があったわけではないし、決して立派な人間でもないのだ。でも、この母親の前ではそれを演じ続けなければならぬ。

「入院していたとおっしゃいましたけど、どこがお悪かったんですか」

「ええ、まあ……」

さすがに表情が曇る。やや単刀直入すぎたか。思い出すのはつかいかもしれないが、それを話してもらわなければならないのだ。

「昔の向井君は、確かに活発とは言えませんでしたけれど、だからといって、ひ弱とか、病弱であったとか、そんな感じではありませんでしたから……」

「ええ、昔のあの子はそうでした。ずっと皆勤賞をもらっていましたがね。……でも高校を出てから半年位した後で、急に倒れてしまったんです」

そう言つて遺影を見上げ、ふつとため息をついた。

「母一人子一人でしたからね。幼い頃から私が苦労してきたことを見ているせいか、一時は高校には進学しないで働く時まで言つてくれたんですよ。早く私を楽させてやりたいんだって。それでも高校ぐらいは出させてやりたかった。だから無理にでも行かせてあげたんです。それが……」

それが仇になったということなのか。その高校で、何かが起こつたというのだろうか。

それにしても母子家庭であつたとは知らなかつた。仏壇に父親らしき男性の遺影が飾つていないところを見ると、幼少時に別離したのかもしれない。すると彼女はこの家に一人で住んでいるのだろうか。自分の息子の復讐が遂げられるのを、今か今かと待ちわびながら。

しかし目の前の女性を見ると、何度も言うようだが、とてもそんな恐ろしいことを考えている人物には見えない。まだまだすべて憶測に過ぎないのだ。私は早く確証を得たい気持ちを抑えた。

「良かつたら……聞かせてもらえませんか。私に何か……もう遅いかもしれませんが……話していただければ、何かその、力になれることが……」

「ありがとうございます。その気持ちだけで十分です」

母親はハンカチを取り出して、そつと目じりを押さえた。二人の間に沈黙が訪れた。線香の淡い香りだけが、部屋の中を流れていく。「高校で何があつたんですか」

相手が硬直してしまつたのがわかる。またやつてしまつた。私は母親の顔がまともに見れなくなつて、うつむいてしまつた。まったく自分は何様のつもりなのだろう。上からストレートに問いただせば、何もかも話してくれると思つていいのか。これも愛する彼のた

めなのか？ なんとおごり高ぶった女なのだろう。

しばらくまた沈黙があった。私の勇み足が、まずい方向に進んでしまっていた。どうもこれ以上話を聞くのも無理そうだ。直接、一番怪しい人間に真相を問いただすというのは浅はかだったのだ。私はこれまでの非礼をわびて、辞去しようとしたその時、

「先日、あの子の命日だったんです」

と、母親がポツリと呟いた。

顔を上げると、母親は背筋をピンと伸ばし、まっすぐに遺影を見詰めていた。その顔は毅然としていて、先ほどの表情とはうってかわって、まるで別人のようだった。

「優しい子でした。誰に対しても。特に私に対する気の使いようといったら、それこそもったいないぐらいでした。就職先も、地元のあまり家から離れていないところを選んでくれて、判で押したかのように、毎朝同じ時間に出て、夜同じ時刻に帰ってきました。まだまだ遊びたい盛りであつたでしょうし、そんなに無理して私に付き合うことはないのだと、何度も言った覚えがあります。そんなときはいつも大丈夫だよと、笑って答えてくれました。でも、実際はそうではなかったんです。あの子の体は、だんだんと自分のいうことすらもきかなくなっていたのです」

その喋りはどことなくテレビのドキュメンタリーのアレシーションを思い出させた。なるべく感情をはさまないよう、声のトーンを抑えているように聞こえた。

「勤めていた会社では、経理に配属されていたようです。一日中電卓とにらめっこだなんて言っていました。ある日、最近右手が震えることがあって、その電卓のボタンが押し辛くなったということを、ポツリとこぼしたことがあったんです。お酒を飲んだわけでもないのに変だよ、と冗談ばく話していましたが、事態はもっと深刻でした。やがて手の震えがひどくなって、その腕全体がまともに動かなくなってしまったんです」

「腕が、ですか……？」

「腕だけじゃありません。おしまいには体の右半分が、ほとんど麻痺してしまうようになりました。歩くことはもちろん、話すことからままならなくなっていました……」

「病院で検査してもらったんですね。何が原因だったのですか？」
おのずと私の言葉も低くなる。それでいて先を促す自分がたまらなく嫌だった。

「頭です。脳の一部に障害が……」

「障害……」

「人の脳みそって、大きなおわんに浮かべたお豆腐みたいなものだって、お医者さんはおっしゃっていました。だから頭に強い衝撃を受けたりすると、まわり大丈夫でも、中身が……脳が思わぬ損傷を受けたりすることがあるんですって。今度の場合は、その脳の損傷が少しずつ、広がっていった……。もつと早くに、検査を受けて治療していれば、こんなにひどくはならなかったらうって」

「頭に……そんな強い衝撃を受けたことが、過去のあったんですか？」
「はつきりとはいえませんが、私はあの子が高校生のときに受けたあの傷が……原因だと思っています」

高校時代……。私の背中に冷たいものが走った。

「高校も三年になった時でした。あの子が頭に包帯を巻いて早退して帰って来たんです。本人はよそ見をしていて、電柱にぶつかっただんだといっていましたけど、後から保健の先生から連絡がありました。昭一郎は学校でひどいじめを受けていたんです」

恐れていた言葉が私の耳に入った。そしてその言葉は私の頭の中で、大きく反響し始めていた。

「誰が、という風に特定できたわけではありません。ただ同じクラスの不特定多数のグループが、たびたびあの子にちょっかいを出しているところを、目撃した先生もいたんだそうです。そしてその日も階段の下で倒れているあの子をある先生が見つけたとき、何人かの生徒が逃げるように走っていく足音を聞いたそうなんです。だから生徒の誰かがいたずら半分には足を引っ掛けるなどして、あの子を

上から突き落としたんじゃないかって……」

だがそれは、まだあくまで仮定でしかない。いくつかの些細な出来事や見聞が重なって生まれた、憶測に過ぎないのかもしれない。だがもちろんそれが間違っているとも言い切れない。何しろ結果的に、人一人の命が奪われる結果となっているのだから。

しかし、昨日の島崎さんは、いわゆる「肉体的」ないじめは、「なかった」ように言っていなかったか。「ちよっかいを出」したりはせずに、「無視」することで、間接的ないじめ行為を行っていたのではなかったか。それともそれは、島崎さんの口から出た、その場しのぎの「でまかせ」だったのだろうか。

「向井君は……何か言っていましたか」

「いいえ。何度も問いただしましたけど、階段から落ちたことは認めましたが、誰かに突き落とされたとか誰かに足を引っ掛けられたとか、そういったことは決して口にはしませんでした」

なぜ相手の名を口にしなかったのだろう。

「その時は保健の先生からも、すぐに病院で検査を受けた方がいいといわれていたんです。でもそれもあの子は嫌がって……。見た目は傷も大したことはなさそうでしたから、私も結局折れてしまいました。無理にでも連れて行っておけば、と今でも悔やんでいます」

そう言うといひざの上に置いた手をぎゅっときつく握り締めた。

怖かったのかもしれない。ふっとそんな考えが私には浮かんた。

そのいじめグループが、ではなく、ことが次第に大きくなってしまふことが。もし病院で脳にも重大な損傷が見受けられた場合（それは事実そうであったのだが）、それは単なるじゃれあい程度のいじめのレベルではなく、大きな傷害事件へと発展してしまうことになるかもしれない。学校内だけでなく、世間にも大きな波紋が広がるだろう。そして自分はその当事者として、その渦に巻き込まれていくのである。それに耐えられるだろうか。不安になるに違いない。

確かにそういった不当な行為は告発されるべきであるのかもしれない。でもそれはあくまで単なる「正論」に過ぎないのではないか、

とも思う。精神的に弱いのだと言ってしまえばそれまでなのかもしれない。しかし自分一人が耐えることによってすがが丸く収まるのなら……。そう思うことすらも「逃げ」なのだろうか。

私が先日バイト先で、女性客から受けたクレーム。そんな風に考える私のような人間が、あの時のとつた行動も、単なる「逃げ」でしかなかったのだろうか。

「結局、その一件はうやむやのままに終わってしまいました。何度も学校に詰め寄ったりもしたのですけれど……」

また目尻に涙が光っていた。母親はそれをハンカチでぬぐった

「ごめんなさい。こんな話をして……」

「いえ……」

いつもの私なら、それ以上のことは聞くことはできなかったろうが、このときは違った。

「その……向井君をいじめていた人たち……その場から逃げて行った人たちというのは、誰だかわかったのですか」

「四人の男子生徒が中心になって、いじめを行っていたらしいところまではわかりました。でもその子たちがあの日、階段の上にいたという証拠は見つかりませんでした。学校側も犯人探しには、非協力的でしたから」

男子生徒が四人。それがこの度亡くなった島崎さんたち三人と、彼を加えたメンバーなのだろうか。本当に「いじめ」は存在していたのか。

この母親の証言が、やはり「真実」なのだろうか。

「……憎いですか」

私は問うていた。

「えっ」

「その子たちが憎いですか。……殺してやりたいほどに」

「……」

私の問いは、唐突で珍奇なものに聞こえたかもしれない。しかし、それはあくまでこの母親が、今度の殺人の依頼とは無関係であった

ならば、である。

「……あなたなら、いかがですか」

「……」

はからずも、今度は私が問い返される立場となった。

「もし、あなたが私の立場であつたなら、どう思ったかしら」

「私は……」

相手は背筋をただしたまま、こちらをみすえていた。見えない威圧感が、私を捉えて離そうとはしなかった。

「……憎いと思うかもしれません」

「……ええ」

「殺してやりたいたいと思うこともあるかもしれませんが。でもそれは思うだけで……。結局、何もできないのではないでしょううか」

「そうかしら……」

「ええ……何より本当にその四人のせいなのか、確証もないわけですし……」

私はずっと抱いている疑念も口にした。ところが、

「それでは、もし、確証があつたら？」

新たな問いは、思いもよらぬものであつた。

「……どういふことですか」

「もしもその四人の生徒が、昭一郎を階段の上から突き落としたのだという確証が得られたら、どうかしら」

「でも、実際は得られなかったわけですし……」

「あの時は確かにそうでした」

あの時……？

「……どういふ、こと、でしょう……？」

「……」

返答はなかった。でもそれが、明確な答えだった。

「……殺さない、いえ、殺せないと思います」

「……何故？」

軽く首をかしげながら訊ねてきた。これが先ほどまで、涙に暮れ

てばかりだった弱弱しかった女性だろうか。

「何故って、それは……単なる逆うらみにすぎないから、だからです」

「いいえ。あの子たちがいわば昭一郎を殺したのも同然なのですよ。それならば」

「それでも……死ぬことが、いえ、殺してしまうことが、それに値する罰なのでしょうか」

「……！」

言葉の代わりにその目が大きく見開かれた。何を馬鹿な、とでも言うように。

「偶然、あるいは結果としてそうなってしまったかもしれませんが。それに確かに法的には、何の咎めもなかったのですが、精神的にはつらい目に、負い目を感じて生きているかもしれません。苦しんでいるかもしれないです。別な形で罰を受けているかもしれないません。それはそれで、十分なのではないでしょうか。それにその四人にだって、家族や友人や愛する人がいるはずです。その人たちを同じように悲しませるわけには行かないと思います」

昨日の島崎さんのあの態度。向井青年の写真を前に発せられた言葉。私はそれを思い出していた。

「同じ悲しみ？ そんなことはないわ。それはまったく違うものでしょう」

「そんなことはありません。その人を、心から愛していれば。そんな人が必ずいるはずです。そんな人たちも、その苦しみに巻き込むことはないと思います」

だから私が、ここに来ているのだ。

「じゃああなたは、私だけが、私一人が悲しめば、苦しめばよいとおっしゃりたいの？」

「そうじゃありません。ただ……」

「あなたが言っていることは、ただの理想です」

「……」

今度は私が黙り込む番だった。

「今も負い目を感じて苦しんでいる？ 冗談じゃない、あいつらはね、もう昭一郎のことなんて忘れていますよ。手荒くいじめていたことも、それこそこんな奴同じクラスにいたのなんてね。まわりのクラスメイトもみんな一緒。のうのと楽しくやっていやがるのよ！」

母親は矢継ぎ早にそうまくしたてた。言い終わると大きく肩で息をつく。

「……あなたには所詮、大事な人を失った本当の悲しみなんてわからないのですよ」

「そんなことはありません！」

私は叫んでいた。

「だから……だからそれを守れるなら、守ることができるなら、守りたいんです。あの人の、今のこの危機を救ってあげたいんです。愛しているから、本当に大切に思っているから、彼を……」

「やっと本当の目的を話してくれましたね」

はつとなった。まさかこの人は、最初から私が何者であるか知っていたのか。私の下手な演技は、とうに見透かされていたのだ。

重苦しい空気が漂っていた。私は母親を見つめたまま固まっていた。そして相手も同じく、私を見ていた。

「……不憫な子だったと思います」

やがてそんな言葉をふつと漏らされた。

「親ばかりかと思われるかもしれませんが、あの子は人の気持ちを一番に思いやる、優しい子でした。その優しさが、かえって仇になっちゃったのでしょうか。小学校の頃から、何度となく理不尽ないじめにあってきたようです。それは中学・高校と行っても替わりありませんでした。時にはクラス全員から、つまはじきにされるような目にあつたのだと聞きました。相手にとっては、たとえあの子が死んだからといって、心からお悔やみなど言う人はいないものと思っていました。特にあなたのような立派なお嬢さんが……」

それは買いかぶりすぎだと思う。私はすぐに否定した。

「そんなことはありません。中には過去の、自分の罪を悔いている人もいます。そんな人が存在するとは、考えなかったのですか」

事実、向井青年の葬式に訪れた者がいたのではないのか。それを追いついたのは誰なのか。

「まさか。何度も言いますが、もう昭一郎のことなんて、すっかり忘れてしまっているに決まっています。あの子をどんなに傷つけたのかも」

「そんなことは……ないと思います」

そうだ、きつと彼なら向井青年のことは覚えていてくれているに違いない。私に漏らさなかっただけで、私に見せなかっただけで、きつと学生時代の不祥事を、心の奥底で悔いているに違いない。きつと、きつと……。

「皆が皆、いじめに加わったわけではないでしょう？」

「変にかかわることを恐れていただけです。下手をすれば自分がいじめを受けることになるわけですからね。見殺しにしていたんです」

「違います。それは絶対に違うと思います」

私は大きくかぶりを振った。

「たった一人かもしれません。いえ、たった一人でいいんです。同じクラスでなくても、それどころか同じ学校でなくても、年上でも年下でもなんだったっていいんです。誰かいたはずですよ。向井君のことを理解してくれて、思っていてくれた人が」

「それは、私以外にありえなかったと思います。世間の人たちは皆、あの子に、いえ私たち親子にいつも冷たい仕打ちをし続けてきました。その結果……あの子はあの若さで……」

それは……違う。例えば、私がそうだ。私がここに来た目的は、彼のためだけでなく、この向井と言う青年のことをもっと知りたいと思ったからなのだ。そんな人間が、何処か他にもいたはずなのだ。きつと、きつと……。

「だから世の中に復讐しようというわけですか、こんな仕打ちで。向井君やあなたに対して行われたことを、思い出させようとしたんですか」

母親は口をつぐんだ。なんて悲しい人だろう。他のやり方で自分の過去を清算することができなかったのだろうか。

「……その理由がどうであれ、こんなことをして、向井君が喜ぶと思いますか」

「あの子が何をしたって言うんですか！ 何故、あの子が死ななくはならなかったのですか！」

「……何もしなかったからだと思います」

私の声は自分でもゾツとするほど低かった。

「……何がおっしゃりたいんですか」

「いえ……あの……」

「あの子が死んだのは、自業自得だったとおっしゃりたいの」

「そうじゃありません……そんなことじゃ……ただ……」

「ただ、何ですか」

私は必死になって言葉を搜していた

「ただ……その状況を受け入れたのは、向井君自身なのです。すべて……自分の問題なのです。死ぬも生きるも……向井君が責任を負って行動した結果なのです。だから……あなたが……介入すべきことではないと思うんです」

「……」

しかしそれは、私にも、私自身にも言えることではないのか。

「あなたがやっていることは、向井君のためでも何でもありません。あなたのエゴでしていることです。そして、そのことは……それは愚かな行為だとも思います……」

自分のことを棚に上げて、よくもそこまで言えるものだ。しかし、この女性には、そこまで言わなければならなかったのだ。

母親は答えなかった。目を閉じて、平静さを装っているが、拳は先ほどよりも硬く強く握り締められていた。別の怒りが、その中で

燃えたぎっているのかもしれない。それを表に出そうとしないのは、プライドゆえなのかもしれない。

「……ご立派ね」

「えっ？」

「あなたのおっしゃっていることは、嫌になるくらい正しいことだと言っているのです」

そう言つて、私をキツとにらみつけた。

「でも、それだけでは生きてはいけません」

それこそ抑揚のない喋り方だった。

「……わかつています」

それは十分過ぎるほどだった。

「わかつちやいないわよ！」

いきなり相手は私を怒鳴りつけた。

「あなたには何一つわかつてなどいないわ。生きるっていうことがどういうことか。人を愛するってことがどういうことか」

そう一気にまくし立てた。そこには一人息子をなくした悲しい母親の姿はなかった。一人の、ただの、女だった。

「あなたは言葉は、私に死ねと言っているようなものです」

「……」

私は答えられなかった。

「何と言われようと、私はあの子の為だと思ふことをやるだけです。それがたとえどんなに間違つたことでも。鬼にでも何でもなるつもりです」

相手の為だと思えるからこそ、何でもできるのだらう。

私も、彼の為だと思えるからこそ……。

「もう、お引取り願えますか」

そう言つて私に背を向けた。

「帰って下さい！」

私は無言で頭を下げて立ち上がった。きっと私の前では、声を上げて泣くことができないに違いない。それが、この母親に残された

最後の意地であるような気がした。私はそのまま家を辞した。

冷たい雨はまだ降り続いていた。外に出た私は、二三歩ほど歩きかけた後に振り返り、中にいるあの母親のことを考えた。私に生きることが愛することが何なのか、それがわからないと言った、あの言葉。そうじゃない。いや、そうじゃないと思ったかった。愛する人のことを想うこの気持ちに、優劣などないのだと思いたい。私だって鬼になりたい。何としても、彼を守りたい。

だが結果として、状況はまたも何一つ変わりなどしなかった。そればかりか、もっと悪くさせてしまったかもしれない。でも、私にあれ以上何ができたというのだろう。あの場で他に何が言えたというのだろう。

私はとぼとぼと歩き出した。歩きながらも、そのことばかり考えていた。

やがて、通りの向こうに一人の男が立っていることに気がついた。黒いこうもり傘をさして。こちらを見ていた。

黒いコートに黒のスーツ。帽子も靴もネクタイも黒づくめの。

あの男が立っていた。

私との約束を守るために。

その十三

私たち二人は、並んで通りを歩いていた。ずっと無言だった。私の赤い傘と男の黒い傘とが、降りしきる雨の中、川を漂う葉っぱのように流れていく。

「あの……」

私の方から、小さく声をかけた。雨音に隠れてしまうほどの小さな声であつたが、男は立ち止まって私を見た。

「はい」

私も足を止めて男を見上げた。しばらくずっと、男の顔を見ていた。男も特に続きを促すわけでもなく、そのまま黙つたままで私を見ていた。何処からか、子供のはしゃぐ声が聞こえてきた。

結局、私は話をする事ができずに、また歩き始めた。男も一緒だった。

角を曲がると、正面に児童公園が見えてきた。中を覗くと、小さな子供が二人、それぞれに色違いの雨合羽と長靴をつけて、小さな傘を振り回しながら、この雨の中を走り回っていた。水溜りを見つけては、互いに両足から飛び込んだりしている。

私はその公園へと入っていった。男も後からついてきた。するとその子供たちは、叱られるとも思つたのか、せつかくの楽しみを邪魔されるとも思つたのか、すぐに走って出て行ってしまった。

そこは何処にでもあるような小さな公園だった。この間のところよりは、やや広く感じられるのは、頭上に高速道路のように遮るものがないせいだ。中央には馬を形どつた大きな遊戯具がそびえ立っていた。滑り台や鉄棒などと一体になっている。私は歩をゆるめずに、まっすぐそこへ近づいていった。

遠目にはあまり汚れていないようにも見えたが、近くで見ると、ペンキの剥れた箇所や傷ついているところがいくつも目についた。大勢の子供たちがさまざま遊びをした結果なのだと思うと、痛々

しくもあり微笑ましくもあった。さっきの子供たちも、天気がよければここに上って、いろいろな遊びをしていたに違いない。大きくなってから、ここで遊んだことを思い出したりすることもあるのだろうか。

「公園にも、いろいろな種類があると思いませんか」

男が後ろから声をかけてきた。考えてみればこの数日間、私たちは共に異なるタイプの公園めぐりをしているのだ。

「そうですね」

私は遊戯具のまわりを歩きながら答えた。

「昔を、幼い頃を思い出していらっしやるんじゃないですか」

「……ええ」

私は同意したが、今回は正確には少し違っていた。

「でも私にはこんな公園で遊んだっていう記憶は、実はあまりないんです」

私が思っていたのは、楽しい思い出ではなかった。必死になつて考えていたのは、自分が幼い頃に戻れたら、晴れた日にこんな公園でどんな遊びをするだろう、ということだった。あの子供たちはいつもは、どんな遊びをしているのだろう。「いろいろな」遊びといつても、具体的に何をするのか、何をどうするのかということとはわからないままだった。

「小さい頃から、塾とか習い事に無理やり行かされていましたから」
本当の幼い頃の私は、こんな公園で遊んでいる子供たちを、はたから見つめるだけだった。それは小学や中学になってもかわらなかった。

「私も似たようなものでしたよ」

意外な言葉に私は立ち止まって、男の方を振り向いた。

「小さい頃はとても体が弱かったんです。いつも病氣ばかりで、ベッドに横になる生活が多かった。病院や家の窓から、こんな公園で遊ぶ子供たちを見ているのは、とても辛かったですよ」
「そうなんですか？」

「今では想像もつかないかもしれません」

そう言って、男は笑った。

「だから逆に、強さに憧れがありました。自分の体の弱さがたまらなく嫌でした。必死になって体を鍛えましたよ。おかげで病気ひとつしなくなりました」

自分の過去と照らし合わせながら、男の過去を想像してみた。広くて大きな家の、二階のはずれにある子供部屋。その窓側に備え付けられたベッドの上に横たわる、小さくやつれた一人の少年。その瞳は大きく見開かれ、食い入るように外の風景を眺めている。だが現在の目の前に立っている男の姿とは、どうしても結びつかなかった。

「あの……お聞きしてもいいですか」

「どうぞ」

「私も必死になって鍛えたら、今からでもあなたみたいになれるでしょうか」

車内の中吊り広告が思い出される。私のかけた質問に、男は真面目に答えてくれた。

「かもしれませんが……たぶん。でも……」

「でも、なんですか」

「『健全な精神は健全な肉体に宿る』というのは、あれは嘘ですよ。体を鍛えるのなら、何よりまず心を鍛えないと。……私みたいになつてしまいます」

「そんな。あなたは……」

立派な人だ、と言いかけて止まってしまった。どうも私は、この男が殺し屋だということを忘れがちだ。

男はそんな風に言いよどんでしまった私を見て、また笑って先を続けた。

「結局、私の心はベットから外を眺めていた幼い頃から成長していない気がします。自分の身に着けた強さをもてあまして、そらがどれほどのものか証明したくてたまらなくなつたんです。武道もいく

つか、かじりましたからね」

ただ見ていたわけではないのだ。変わろう、変わりたいと、ただいつも漠然と思っていただけの、私とは違うのだ。

「そして……人を……？」

「ちつとも強くなかなっていなかったんです。今もそうですね……」

「でも今なら……今からでも、やり直すこともできるんじゃないですか」

そこまで変わる事ができたのなら、もう一度変わる事もできるのではないか。それがわかつているのなら、もうこれ以上、罪を重ねる必要もないのではないか。これ以上、人を殺さなくても良いのではないか。……彼を殺すことも止めることができるのではないか。

しかし男は、そんな私の浅はかな思惑など、やはりお見通しのようだった。無言で、ただ首を振るだけであつた。

「……また失礼なことを聞いてしまうかもしれませんが……」

私はならばと、別な問いかけを行った。

「はい」

「今まで……何人の人を殺したのですか」

これは失言ではない。私は必死に虚勢を張って、男を睨みつけながら訊ねた。男はそんな視線をすうつとそらして、傘を手にしたまま大きく伸びをした。

「忘れました。……というより、忘れようと思いました」

「どうしてですか」

「いろいろな人の恨みとか悲しみとか……そんなものを抱えたまま生きていけるほど、強くはなれなかったからですよ」

「そんな……そんなことって……ずるい」

私の小さな本音が、ポロリと零れ落ちた。

「そう……ですね」

「もし彼を、江藤哲夫という人間を殺したとしても、いずれはそのことを忘れてしまふんですか」

「たぶん。でも……あなたもそうなりますよ」

「そんなことは、ありません……」

私ははつきりと否定したかったが、何故か語尾はかすれて小さくなっていた。

「でも、忘れた方が良くもあります。あなたも……いつもまでも過去に囚われていてはいけないんじゃないかと思います」

「囚われてなんて……」

「そうでしょうか」

だがそれを言うなら、そういう人間は、私だけではないはずだ。

「じゃあ、何故あの母親の依頼を受けたんですか」

「……仕事ですからね」

「それは、ずるい……やっぱ、ずるいです。そんな言い訳で逃げるなんて……」

私はこの期におよんで、何を知ろうとしているのだろう。この男の本心？ でもそれを知ってどうするのだろうか。

「……ただ、前にもお話したかもしれませんが、私はむやみやたらと人を殺してまわっているわけではありません。たとえば、どんな大金を詰まれても」

「それは……」

私は迷った。次の句を続けるのが怖かった。だがあえて話し続けた。

「それではやっぱ、彼は死ぬべき人間だとお考えなのですね。でも、世間知らずで愚かな娘がずっと側にくっついていてから、仕事に支障をきたすから、必死で引き離そうとしているわけですね」

「そうは言っていないですよ」

「でも、そうでしょ、そういうことなんでしょ！」

あの悲しそうな表情が、男の顔に浮かんだ。私たちは見つめあいながら、長い沈黙の時間が流れた。

「……これも前にお話したことですが、そんなに自分を貶めてはいけませんよ」

「でも……」

「過去に囚われている人間がどんなものか、どんなに悲しいものか、あなたはついさっき、その目でごらんになったはずです」

「だから、私を……あの母親にあわせたのですか」

「……」

男は答えなかった。

「私がどんな過去を過ごしてきたか、あなたはご存知のはずですよね……」

「……ええ。まあ」

私は改めて同意の言葉を引き出した。

「でも……でも、彼は……彼はまだ生きています。まだ死んではいないんです。私の力で……なんとか助かるかもしれないんです。だったら……だとしたら……」

私にできることは……いや、無茶を思われるようなことでも、やらなければならぬのだ。

「確かに戻るかもしれませんが。誤った選択をしてしまった前の、以前のあなたに戻るかもしれませんが」

「私が彼を愛したことが、『誤った』選択なのでしょうか」

「いや、それは……」

「……今にして思えば、私はこれまでにいくつも『誤った』選択をしてきたのかも知れません……」

親の言いなりになり、世間とは干渉をもたず、ただ小さくなって己を苛み続けた末、どのような結果が待ち受けていたというのか。

「でも、彼を選んだこと、彼を守ろうとすることが、そうであるとは私には思えません」

というより、そう思ったかった。「誤った」ことだと思いたくなかった。

「はっきり言いますが、あの男はあなたが愛するに値するほどの人間ではありません」

他人だから、直接会って話をしていないから、実際に救われてい

ないから、そんなことが言えるのだ。

「私だって、彼に愛されるに値するほどの立派な人間ではないかもしれない」

「そういうことではなくて……」

「あなたは……人を好きになったことがありますか」

思わずそんな言葉が口に出てしまった。すると男は、はつと息を呑み、そしてそんな自分を恥じるように下を向いてしまった。それまでずっと年上の人のように思えた男が、急に若い少年のように見えた。

「……ある……と思います。……いえ、あります」

どれも雨音に消えてしまうほどの、小さい声だった。

「だったら、少しいいんです。私の気持ちもわかって下さい」

「はい……すみませんでした」

男は深々と頭を下げた。

その時、私に少しだけ傲慢な気持ちが芽生えてしまったことは否定できない。理由はわからないが、結果として、やや私が精神的に優位に立ったように思えたのだ。このまま責めれば何とかなるのではないか、そう私は思い始めていた。

「もう一度、もう一度だけお願いしまう。彼を殺すことはあきらめてくれませんか」

私ははつきりと男の顔を見据えながら言った。だが男はあの悲しそうな表情のまま、視線を合わせようとはしなかった。

「……お願いです……」

「……」

男は無言のまま二三歩ほど歩いて、すぐに立ち止まった。目を閉じて、傘を持たぬ手をポケットに入れ、いつそう背中を丸めるようにうつむいた。そして大きくため息をついた。

「私は……やはりあなたとは会うべきではなかったのかもしれない」

「えっ？」

男のぼそぼそと喋りはじめた。それは私に向かって、というより自分自身へ、といった感じであった。

「……今さら、何を言っているんだ……」

「あの……」

声はますます低く、小さくなっていった。

「……つくづく自分がいやになる……」

「……」

「何様のつもりなんだ……何とかなると思っていたのか……お前の方が世間知らずの大ばか者だ」

「あの！」

つい声が大きくなった。でも、この声のおかげで、やっと男はこちらを向いてくれた。しかし、男は私が側にいたことすら忘れてしまっていたかのように、その表情には驚きの色が浮かんでいた。

「……」

男はまた恥じるかのように俯いてしまった。体が小刻みに震えている。実は私も、男の言葉に動揺を隠せなかった。それはまるでまたこの私のことを言っているかのように思ってしまったからだ。だが、男が私の方を見ていないおかげで、心のうちを悟られることにはならなかった。

「……ごめんなさい。無理なお願いだったことはわかっているんです。でも……」

よくもまあ、そんな言葉がすらすらと口から出るものだ。そんな自分に、次第にまた嫌悪の情が湧き上がっていくのを感じはじめたその時、

「違うんです。そうじゃないんです！」

大声で男が叫んだ。

「……」

「あ………すいません」

男はまた弁明の言葉を繰り返した。ここでも私の本当の気持ちを知られずに済んだ。

「何と言つか、……その、つまり……時間が欲しいということですよ。……ひとりで、考えたいんです……」

「……」

「……もう一日だけ時間をくれませんか」

何と、答えてあげればいいんだろう。

「……お願いします」

「……わかりました」

それが男にとって、ぎりぎりの譲歩なのだろう。私は素直に、それに従うことにした。というより、もはや、この男にすぎるより他にないように思えた。男はまた、歩き始め、今度はそつとあの馬の遊戯具に手を触れた。走り終えた競走馬を、慈しむように。

「あなたと私は敵同士なんですよね」

ふいに男は言葉をもらした。

「えっ？」

そして、問い返した私のすぐ側まで歩いてきた。

「今日はもうアパートへお帰りなさい。それに、彼とも今日は会わないほうがいいでしょう」

「……どうして」

「彼は今、病院にいるでしょう。友人の遺体に付き添うために。ですよね？」

どうして男が知っているのだろうと思ったが、知る術などいくらでもあるのだろうと考え直した。

「……え、ええ」

「私が言うのも変ですが、ひどくまいっていると思います。そんな彼の側についてあげたいと思うかもしれませんが、今は逆に、一人でそつとおいてあげるべきです。彼自身、いろいろと考えたいでしょうから」

「でも……」

「今は待つべきなのだと思います。私を信用してください。約束は必ず守ります。それに、男というものはですね、あまり女の人に悲

しんでいるところや、惨めな気分にいるところを見られたくないんです。察してあげてください」

「……わかりました」

ひどく饒舌になった男の態度をいぶかりながらも、私は了承した。「改めて、ご連絡をします」

男はそう言つて、すぐに踵をかえして歩き出した。男の背中がひどく寂しそうなのは、私の気のせいだろうか。

「あの！」

私はその背に向かって声をかけた。男が立ち止まる。

「ありがとうございます……」

男は振り返らず、すぐにその歩を進めて、そのまま公園の外へと出て行ってしまった。

その十四

男が去って行った後も、私はしばらくその公園でたたずんでいた。さて、これからどうしようかと、思案にくれていた。それから、意味もなく巨大な馬の遊戯具のまわりをぐるぐると回ってみたいもした。じっとしていることができなかったから。

この日の朝までは、私には何をすべきか、はっきりとした目的があった。向井青年の母親に会い、私の彼への殺しの依頼を取り下げてもらふこと。それは失敗には終わったが、その後、黒服の男と話し合うことができた。見たところ、男は心の中で迷いはじめているようだった。そして事態も、はからずも好転しかけているのではないだろうか。

だが、急にそのようになってしまったことで、私自身も動揺してしまっていた。何をしたら良いのか、わからなくなってしまうのだ。

男は「まっすぐアパートに戻った方がいい」と言った。その言葉の通り、部屋で待つべきなのか。だがしかし……と私は思う。本当にそれでいいのか。他に、私のやるべきことがあるのではないのか。もう一度、あの母親と会ってみようか、そんなことも考えた。もっと時間をかけてゆっくりと説得すれば、理解を示してくれるのではないか。母親が殺しの依頼を取り下げられれば、あの男も悩まずに、彼を殺すことをやめることができる。

……なんと虫のいい考えだろう。

これから行って、あの母親が私と会ってくれるわけがないではないか。それに説得できるというって、何かそういうことに対する当てでもあるのか。けんもほろろに追い返されたのは、それこそつい先ほどのことではなかったか。

じゃあじゃあじゃあ……。本当に私には、もはや何もやるべきことはないのか。一番大切なことを、人任せにしているだけではない

のか。

結論を先に延ばしているだけではないのか。

私にも何かできることが……。

そこまで考えてしまうと、また頭に変な痛みを覚え、体と心に疲労を感じてしまう。雨が降っていないければ、またその場に、公園のベンチにへたり込んでしまったに違いない。体を使うことも、頭を使うことも駄目だなんて。

私は怖かったのだ。取り残されてしまった感じがして、もう自分が必要無いのだと言われてしまった気がして、寂しかったのだ。

自分がタフな人間でないことは、自覚しなければならぬ。私ができることなどたかが知れている。だからといって、待つことだけに耐えられる強さもなかった。

彼に会いたい。

心のそこからそう思う。誰かに側にいてほしい。すぐにへたり込んでしまう私を、支えなくてもいいから。一緒にいてくれるだけでいいから。あの日の朝が、はるか遠い昔のように思えた。あの時以来、電話以外に彼と話す機会は訪れなかった。あの駅へと向かう彼の後姿が、ますます遠いものになってしまったように思えた。

彼に会いに行こう。私はそう決めた。黒服の男との約束を忘れたわけでは決していない。ただ、そっと遠くから眺めるだけでいいのだ。生きている彼の姿を、自分の目で、はっきり見ておきたいだけなのだ。そうすれば、ほんの少しの間は我慢することができる、ほんの少しの間だけでも息をつくことができる、そう思えた。

私は公園を出た。駅の方に向かいながら、まずは島崎さんの実家へ電話してみようと考えた。

司法解剖というものが、どれくらい時間のかかるものなのか私にはわからなかったが、遺体はまだ病院からは戻っていないのではなにかと思う。そしてその安置先の病院がどこなのか知れたかった。昨日の話では、彼は島崎さんの遺体にずっと付き添いたいと言っていたから、その安置先さえわかれば、彼の居場所もわかることにな

る。もしくは先に実家の方へ移動しているかもしれない。

島崎さんには私自身もいろいろとお世話になったし、何より向井青年の存在を教えてくれた人だ。しかも、その私と会った直後に殺されてしまったということであれば、本当のことはまだまだ話すことはできないにしても、せめて哀悼の言葉くらいは、私の口から遺族の方に伝えたかった。

「はい、島崎ですが……」

番号はすでに登録済みだ。早速携帯からかけてみると若い女性が出た。島崎さんのご姉妹の方だろうか。

私は自分の名前を名乗り、生前、私の彼を通じて親しくお付き合いさせていただいていたことを話した。続いて、今度の悲惨な出来事に対するお悔やみを述べた。

「わざわざ兄のためにお電話頂き、ありがとうございます」

どうやら妹さんらしい。

「ご遺体は、もうそちらに戻られたのですか」

「いえ、まだ……。何でも明日にならないと戻してくれないみたいです。通夜も明晩に行う予定です」

いろいろと事細かく調べられるのだろうか。身内の体を切り刻まれるなんて、遺族の心中を思うと胸が痛くなった。

「あの……お忙しいところ申し訳ないのですが、彼が……江藤が来ていると思うのですが」

「江藤さん？ ……いえ、いらっしゃいませんが」

「では病院の方ですか？」

「いいえ。あちらには両親しかいないはずですよ。母は兄の側から離れることができないみたいで。夕べは私もいたんですけど、通夜の準備もありますので、先に戻ってきているんです」

彼が、いない？

「じゃあ、あの、失礼ですけど、彼が、江藤が何処にいるかご存知ありませんか？」

私の心の中を一抹の不安がよぎった。

「さあ……。江藤さんとはここ何年もお会いしておりませんし。兄とはちよくちよくお会いになっていたのかもしれませんが」

会っていない？ 何年も？

「でも、ゆうべは島崎さんが運ばれた病院へ、彼も行っているはずです」

「いいえ……。確かに病院へは、兄の会社の方や親しいお友達とかがお見えになってくれましたけど、……。その中には江藤さんは、いらっしやいませんでしたね」

……。

「もしもし？ もしもし？」

彼は病院へは行っていない、そんな馬鹿なことがあるものか。昨夜の沈痛な声で、私に電話をしてきたではないか。島崎さんの側にいてやりたいと、涙ながらに語っていたではないか。

落ち着け落ち着け。ひよつとしたら、妹さんの勘違いかもしれない。何年も会っていないと言ったではないか。他の誰かと間違えているかもしれないではないか。あるいはたまたま、妹さんのいない時に訪れたのかもしれないではないか。ずっと側にいる決心をしていながら、いたたまれなくなつて外へ出てしまったのかもしれないではないか。中に入ることができず、病院の外をぐるぐる歩き回っているかもしれないではないか。あるいは……。それとも……。

では、彼は、何処にいるのだ？

「もしもし。どうかなさつたんですか。もしもし？」

私はようやくまだ通話中であつたのを思い出した。私は今の非礼を詫び、もし良かったら、島崎さんが安置されている病院名を教えではもらえないかと頼んでみた。

「それは構いませんけど……。今から行つても中には入れないと思いますよ」

私の心の中を見透かすように、妹さんは答えた。

「私が言うのも何ですけど、犯人もまだ見つかっていないし、あんな形で兄が殺されてしまったものですから、マスコミの方も大勢来

ているんです。こちらにも何人が張り込んでいるらしくて……。なので兄の元には、警察の方か、うちの両親ぐらいしか近寄れないくらいなんです。だから、江藤さんが病院にいるとは思えないのです
が……」

おそらくその通りなのだろう。それでも私は無理やり病院名を聞きだし、形ばかりのお礼の言葉を付け加えて、電話を切った。

心臓が破裂しそうなほど、大きく脈打っていた。頭の中が、煙を上げそうなほどフル回転していた。それでも私は何度も深呼吸すること、冷静になろうとつとめた。

ひよっとしたら彼は、自分の実家へ戻っているかもしれない。やはり病院へ行くことはできなかったのだろうが、それでも明日の通夜には参列するだろう。それならば実家からの方が何かと便利に違いない。私はすぐさまそちらへ電話した。だが……。

「哲夫ですか。いいえ、こちらへは戻ってきてはいませんよ」

電話口に彼の母親と思わしき人物が出て、そう告げた。

「仲の良かったお友達があんな目にあつたのにねえ。知らないはずはないと思うんだけど……。こつちから何度電話しても出ないんですよ。喪服だつてこつちにあるんだから。でもつながらなくてねえ、どうするつもりなのかしら、あの子」

会社へ出ているかもしれない。確かに今日は彼の会社は休日のはずだが、今までも何かといつては休日出勤をしていたではないか。きつとやむにやまれぬ事情があつて、会社へ出勤せねばならなかったのではないか。きつとそうだ。

だが彼のオフィスへは何度電話しても、誰も出るものはいなかった。

ここでやつと私は、彼の携帯電話に電話してみた。「……電波の届かないところに居られるか電源が入っていないため……」というコールがむなしく響く。何度でも何度でもかけなおしてみたが同じだった。

わからない。彼は何処へ行ってしまったのだ？

……「彼とは会わないほうが良いでしょう」……

男の言葉が頭をよぎる。

彼はもう殺されてしまったのであろうか。

いや、そんなことはない。そうではないと思いたい。あの男も言っていたではないか。「もう一日だけ時間をくれ」と。「改めて連絡する」と。

やはり私には、待つしか道が残されていないのだろうか。

はっと気がつくと、いつの間にか雨はやんでいた。あわてて傘をたたむと、ちょうど雲の切れ間から、太陽が顔を覗かせてまばゆい光を差し込んできた。光は一陣の線となってあたりを貫き、その光景はまるで宗教画のようでもあり、いやになるほどきれいだった。

その十五

その後、私は念のため病院の方へも行ってみたが、あの妹さんの言うとおり、門前払いをくわされただけだった。そして、もはや私にできることと言えば、あのアパートに帰ることしか残されていなかった。あたりはすっかり暮れていて、冬の夜風が身にしみた。室内に入って、薄暗い部屋の真ん中に座ると、出るのはため息だけだった。そういえば今日も朝から何も食べてはいなかったが、少しも食欲は感じられなかった。

私は携帯を手にして、彼の元へ電話をかけた。これで何回目になるだろう。一度だって、彼が出ることはなかったし、そして今回もまた同じだった。

「……あなたのおかげになった電話番号は、電波の届かない所におられるか、電源が入っていないため、かかりません……」

無機質で乾いたアナウンスが流れた。私はまた力を落とし、電源を切った。

彼は一体何処へ行ってしまったのだろう。

先ほど島崎さん宅や、彼の実家などあちこちに電話をかけて以来、私の頭の中にはいくつもの嫌な考えが、浮かんでは消えていった。やっぱり彼はもうこの世にはいないのではないか。あるいはどこかに軟禁されているのだろうか。裁きが下されるまで、何処か暗い地下室に閉じ込められていやしないか。そして彼のすぐ側には、あの黒服の男が立っていて……。

あの黒服なら、彼が今何処にいるのか、生きているのか死んでいるのか知っているに違いない。だが、こちらからあの男へ連絡を取る術はないのだ。男はいつも突然現れ、突然電話をかけてくる。ひよっとしたら今も、この近くで私を見張っているのかもしれないのだ。

私は外へ飛び出して、大声で叫びたかった。彼に会わせてくれと。

彼の声を聞かせてくれと。

結局、私があつた男を信用するにたる材料など、何一つなかったのではないだろうか。すべて私の思い込みでしかなかったのではないだろうか。……「あなたの存在だけが確実なもの」だなんて、お笑い種だ。あの男は人殺しなのだ。犯罪者なのだ。その話し振りや態度など、相手によつていくらかでも変えうるに違いないのだ。それに騙されてしまった私が馬鹿だったのか。現にあの男は島崎さんを、私と会つたすぐ後で、私も居た公園で殺しているではないか。あれこそ悪意の果てでなくてなんだろう。

しかし、あの男を否定しようとすればするほど、あの悲しそうな顔が、今日あの雨の公園の中で見た、あのやりきれなさをにじませた横顔が、私の瞼に浮かんでくるのだ。信じたい。信じてあげたい。それはとりもなおさず、その時の私を気持ちえ、私を信じるといふことなのだから。

だがそうだとすれば、今度は彼の方を疑わなくてはならなくなる。昨夜の電話。親友の死に対する戸惑いと悲しみにあふれたあの言葉。あんな真剣な彼の話し振りを聞いたのは、いつ以来だろう。でも実際は、彼は病院には姿を見せず、実家にも戻つていない……。

私は首を振つた。彼を疑うなんてどうかしている。きつとなにか理由があるに違いないのだ。すべてが納得できるような、何かしらの理由が。これまでの私の苦勞が報われる、すばらしい夢のような結末が準備されているのだ。

そう。そうであつてほしい。お願い。お願いだから。神様。いや、神様でなくてもかまわない。誰でもいい。誰でもいいから。笑つてそんなに気にすることはないよと言つて欲しい。こんな目にあうのはこれが最後だから。そう言つて。お願い。彼とはこれからやり直していけばよいのだから。別れたくない。捨てられたくない。一人でなんて生きていけない。私の至らないところは何でも治します。彼の言うことなら何だつて聞いてあげる。だから。私をこれ以上不安にさせないでください。幸せになりたい。これ以上私を、不幸に

しないで。だからお願い……。

私は泣いていた。両の目から、涙が無慈悲に流れ落ちていった。それと共に、私の想像はとめどなく悪い方悪い方へと流れていくのだった。

私は無力だ。どんなにあがいていても、どうすることもできない。何一つ変わりはない。私自身も、私を取り巻く環境もすべて、変えることなど出来はしなかったのだ。ここではない何処か。そんなものは最初から存在していなかった。幸せな生活。明るい未来。それもありはしない。すべては私の単なる思い込みの結果に過ぎなかったのだ。何もかもが私の幻想でしかなかったのだ。毎朝のように行っていた、あの一人遊びの延長が、惰性のごとく延長されていただけだったのだ……。

いやだ。そんなのはいやだ。

私は携帯を手に取り、もう一度、もう一度だけ、彼の携帯へ電話をかけた。いや、彼が出るまでかけ続けようと思っていた。出て。早く出て。すぐ出て。今出て。必ず出て。お願いだから……。

「……はい。もしもし……」

でた！ 間違いない、彼の声だ！

「もしもし？ もしもし？」

私は彼がまだ生きていることに思いが入っていたので、こちらから話すということが飛んでしまいそうだった。

「もしもし、哲ちゃん、あたし……」

それだけの言葉をひねり出すのにかなりの気力が必要とした。

「……ああ、わかってるよ。なんだよ、突然」

向こうにもこちらの番号が出るのだから、私からかけていることは当然わかるわけだ。でも、彼が少し動揺しているように思えるのは気のせいだろうか。声が少し上ずっているように聞こえるのも気のせいだろうか。

「何度も……何度も電話したんだよ。でもなかなか出てくれなくて……」

「ああ、そうだな。悪い。ほら、病院の中だと携帯が使えないからだから……」

……嘘……。

「……哲ちゃん。ねえ、哲ちゃん。今……何処にいるの？」

「……何処って、病院だよ。ほら、島崎が運ばれてきた。遺体はまだこっちなんだよ」

「なんて言う病院？」

「えっ」

「名前よ。病院の名前……」

逆に私の声はこれまで以上に低く、驚くほど冷静になっていた。まるで自分が喋っているんじゃないみたいだった。

「それは……いいじゃねえか。何処だって」

「答えられないでしょう」

「そんなことはねえよ。……S区だよ。S区にある大きな病院」

「だから、名前は？ S区の何ていう名前の病院？」

「……お前、何が言いたいんだよ」

「私は哲ちゃんの口から、島崎さんの遺体が運ばれた病院の名前が知りたいだけなの」

「ニュースでもやっていただろ？ 俺の口から聞かなくなっただって、わかるだろ」

「答えないのは、知らないからでしょう？」

「……」

「哲ちゃんは今、その病院にはいないんでしょう？ ううん、今だけじゃなくて、ゆうべから、島崎さんの処へは一度も行っていないでしょう？」

「馬鹿。そんなことはねえよ。……俺はずっといたよ。あいつの側に……」

嘘嘘嘘……。

「あたし、行ってみたわ。島崎さんが運ばれた病院に」
「なんだって？」

「でも、遺族の人でないと会わせてはもらえなかった。マスコミの人も大勢来ていたから」

「そりゃあ、お前はな。でも、俺は……」

「でも、島崎さんの妹さんとはお話できたわ。電話でだけど」

「……」

「親しいお友達の方が何人も来てくれたって言っていたけど、哲ちゃんも来ていなかったって。それに今日はご両親以外は、病院にいないはずだって」

「それは……」

「それから……それからいろんなところにも電話したわ。ずっとずっと、今日一日中ずっと哲ちゃんのことを探していた。携帯はぜんぜんつながらないし、ひよつとしてもう死んでしまったのかも思った。とてもとても悲しかった。だから、だからだから、こうして話をするのができて、うれしくて、それで……それで……」

私はまた泣いているのかもしれない。だがその涙は、何のための涙なのか。誰のための涙なのか。

「……ねえ、哲ちゃん、怒らないから、本当のことを教えて。今、

何処にいるの」

「何処って……さっきから言っているじゃねえか。病院だよ」

「哲ちゃん！」

「うるせえな。お前には関係ないだろ」

「哲ちゃん……怒らないって言っているじゃない。ただ……ただ、知りたいだけなのよ」

「知ってどうするんだよ」

「今から、そこに、行くわ……」

「はあ？」

「会いたい。会って話したいの。三日よ。もう三日も会っていないのよ」

「たかが、三日じゃねえか。付き合い始めの頃は、一週間以上、会わないときもあっただろ」

「違うの。そうじゃないの。……哲ちゃん、あなたこのままじゃ……殺されてしまうのよ。命をねらわれているの」

とうとう言ってしまった。

「……殺される？ 俺が？ 何を馬鹿なこと言ってるんだよ」

やはり彼の反応は想像通りのものであった。だが、わかってもらわなければならない。知ってもらわなければならない。

「本当なのよ。聞いて。高校時代のクラスメイトだった中島さんと仁科さんが、ここ何ヶ月かに相次いで死んでいるの。そして今度は島崎さんが殺されたわ。次は哲ちゃん、あなたの番なのよ」

「訳のわからねえこと言っているんじゃないよ」

「本当よ。本当なんだよ、哲ちゃん。でも、まだ助かる道はあるの。だから……」

「うるせえなあ。大体なんで俺が死ななくちゃならないんだよ。誰に殺されるって言うんだよ。ひょっとしてお前にか？」

「それは……」

「そりゃあなあ、確かに俺は嘘をついたよ。お前を騙したかも知れねえよ。だからって、殺すってどういうことだよ。わかんねえよ。

お前の言っていることは」

「だから……違うの、そんなことじゃないの」

「じゃ、なんだよ。何だって言うんだよ！」

落ち着いて。冷静になって、私の話を聞いて。だが彼は、その言葉が私の口から出るよりも早く、矢継ぎ早にまくし立て始めた。

「俺が何をしたって言うんだよ。仕事だってそれなりにやっているしよ。馬鹿な連中の言うことも聞いて、頭だつて下げてやっているんじゃないかよ。何一ついいことなんて、ありやあしねえしよ。我慢してやっているんだよ。それなのに、殺されるなあ？ ふざけんなって」

「うん。あたしはわかっているよ。哲ちゃん、一生懸命、頑張っているもんね。でも」

「『でも』なんだよ。結局お前も、俺なんか駄目な奴だと思ってい

るんだろ。俺なんか死ねばいいと思っているんだろ」

「そんなこと思っていないよ」

聞いて。お願い。

「お前にはわからねえんだよ。俺のことなんてよ」

「そんな……」

「そうだよ。だいたいお前、なんなんだよ。何様のつもりだ？　ちよつと告つたぐらいで、ちよつと付き合つたぐらいで、女房気取りで俺の家に転がり込んで来やがつてよ」

この人は本当に、あの優しかった彼なのか。これは本当に、彼の口から発せられた言葉なのか。

「……哲ちゃん。今は私のことなんかより、あなたのことが大変なのよ。私は心配しているの。あなたを助けてあげたいの」

「それだよ。俺がいつ頼んだ？　え？　あれもしてくれこれもしてくれ、俺は子供で何もできないから、みんなみんなやつてくたさい、お願いしますつて、いつ言つたよ。それを押し付けがましく、箸の上げ下げから何やら、何でもかんでも口を出してきやがつて。断ろうものなら、朝から恨みがましい目で睨みやがるしよ。お前が勝手にやっていることだろ。俺が悪いみたいじゃねえか。俺のことが心配だあ？　余計なお世話だよ」

「哲ちゃん……」

「もうたくさんなんだよ。お前の見下すような態度には、うんざりなんだよ。俺はな、何でも一人できるんだよ。ガキじゃねえんだ。好きにやりてえんだよ」

「あのね、哲ちゃん……」

「その『ちゃん』づけで呼ぶのが見下しているつて言っているんだよ。わからねえのか、馬鹿！」

突然、ブツツと嫌な音がして、電話は切れてしまった。何かなんだかわからないまま、私は携帯を握り締め、呆然としていた。今までの彼との会話を反芻しようとしたが、それもできなかった。何故彼はあんなに怒っていたのか。考えることすらできなかった。

私はすぐに彼の携帯へと電話しなおした。だが、受話器から聞こえてくるのは例の「お客様がおかけになった電話番号は……」という乾いたアナウンスでしかなかった。私はそれでも何度もかけなおした。そのたびにそのアナウンスが何度も何度も聞こえてくるのであった。

私がついにあきらめ、携帯をその手から引き剥がすことができるようになってから、少しだが落ち着いて物事を考えられるようになった。あれが彼の本当の気持ちなのか。あれが彼の真実の言葉なのか。私は邪魔なのか。余計なことばかりする？ 私が彼を見下している？

馬鹿な。そうであるはずはないではないか。

私のおかげで、彼はちゃんとやっていけているのではないか。すべて私が、彼の為にしているのではないか。私が毎日、食事を作つてあげているからこそ、病気をせずに健康な生活を送れているのだ。私が毎朝、ちゃんと起こしてあげているからこそ、彼は遅刻もせず、真面目に会社できているのだ。もちろん、掃除も洗濯もすべて私。みんなみんな私。わずらわしいこと、面倒くさいこと、それから、あんなこと、こんなこと、全部、私が、やって「あげている」のだ。私だって、毎日働きに出ているのに。家の中のことは、全部、私が。その他のことも、全部、私が。彼に、変な気苦労を、かけまいと。安心して、仕事に、打ち込めるように。感謝こそすれ、非難するなんて。それになにより、彼のことを、ここまで、こんなに、これほど、心から、心配している、人間が、愛している、人間が、他に、私のほかに、誰が、どこに、誰が、いるというのか。私だ私だ私だ私。……私以外には、いないのに。彼のことを一番知っているのも、彼のことを守つてあげられるのも、私しかないのだ。だから、この数日間、必死で、さつきも、彼のことを案じて、何度も何度も、何度も何度も、電話して。なのに、なのになのになのにそれなのに……。こんな私に、あんなひどい、あんなひどいことを言うなんて馬鹿。分からず屋。へそ曲がり。どうして私の気持ちをわかつて

くれないの。こんなに尽くしているじゃない。こんなに頑張っているじゃない。私のことを認めてよ。褒めてくれなくてもいいから。見返りがほしいわけでもないから。私を、私という一個の存在を、ただ単に認めてくれるだけでいいから……。

……。
もういい……。なんだか、疲れちゃった。結局あなたも、あの人たちと同じだったのね。私をいじめて、辛い目にあわせて、楽しんでいるんだわ。いいわ。いいのよ。そんな人、こちらからお見限りよ。私は、幸せに、なりたいの。私を不幸にする人は、みんなみんななくなってしまう。私に乱暴を働いたあいつも。私を閉じ込めようとしたあいつも。私の存在を無視したあいつらも。みんなみんな、全部。それ相応の、いえ、それ以上の、罰を受けるといいんだわ。そしてあなたもよ、哲ちゃん。あなただって……あんなにか……お前なんか……。

“死んでしまえばいいんだ”

その言葉が頭に浮かんだ瞬間、私は長い夢から覚めたかのように、はつとなった。私は今何を考えていたのか。その言葉は、本当に私の心の中から聞こえてきたものなのか。

突然、携帯がなった。

私は慌てて電話をとった。彼からだ。きっと彼からに違いない。すぐに私は詫びなければならぬ。先ほど心に浮かんだ言葉。あれは嘘だ。けっして本心からの言葉ではないのだ。そのことをはっきりと伝えたかった。

「もしもし、哲ちゃん。哲ちゃんでしょう？ ごめん。ごめんね。ごめんなさい。あのね、今ね……」

と、そこまで言った時、私は気づいた。
違う。彼ではない。

お互いに長い沈黙があった。私がかすかに鳴らしたのどの音が、

大音量で頭の中に響いた気がした。

「もしもし……どちらさまですか」

私はかすれた声で尋ねた。この携帯の画面には、非通知とだけ表示されていたのではなかったか。そして彼以外で、私の元へ電話をかけてくるような人物は、もう一人残されていないはずであった。

「……どうして待っていてはくれなかったのですか」

あの黒服の男からだった。

「もしもし、待ってください。違うんです。聞いてください、お約束を守らなかったわけではなくて、私は……」

「でも、結果的として、よくわかりになったと思います。あの男は、あなたのことなど何とも思っていないのです。いや、と言うより疎ましく思っている」

「そんな……そんなことはありません。今日はただ、疲れていて、イライラしているときに、私があんな電話をしてしまったから。私が彼を信じてあげられなかったから。私が悪いんです。日を変えて、時間を変えて、落ち着いて話をすれば……」

「いいえ。悪いのはあの男です」

「違うんです。彼は……」

「あなたを裏切って、別の女の元にいるような男を、もうこれ以上庇うことはありませんよ」

「えっ……」

別の、おんな？

「あの男は今、ある女のマンションにいますよ。この二日間、ずっとです。病院はもちろん、親友の葬式にすら行くつもりもないようですね」

「そんな……」

「あなたはお気づきではありませんでしたが、あの男は、数ヶ月前から別な女性とも交際を続けています。あなたの元へ帰らない日は、決まってその女の所に泊まっていたんです。仕事で帰れなくなったというのも、大嘘ですよ」

彼はずっと浮気をしていたというのか。もはや私を愛してさえいないと言っことなのか。

「嘘……嘘です。そんなことは出鱈目です」

「私は今、そのマンションのすぐ近くにいるんです。あの男が一緒なのも、確認済みです」

別な女との、別な住み処……。

「……何処なんですか、そこは」

「知らないほうがいいでしょう」

「お願いします。教えてください」

「……知ってどうするって言うんです」

「その女性と会います。会って話がしたいんです」

私は知りたかった。彼が私を裏切ってまで、ひそかに隠した女がどんな人間かを。

「無駄でしょうね。……もうこれ以上、あなたが辛い目にあうことはありません。あの二人が、陰であなたのことを何て言っていたかご存知ないでしょう?」

「大丈夫です。話せばわかってくれるはずですよ」

「もしそうだとしても、もう時間はありません。タイムリミットです」

タイムリミット……タイムリミット……タイムリミット……。

「それは……どういう意味ですか」

「あなたはもう、あの男と話すことはないでしょう。あの男から、卑劣な仕打ちを受けることもなくなりです」

それは最後通告ということなのか。

「待ってください。今日一日、あと一日待ってくれる約束ではありませんでしたか」

「約束を守ってくださらなかったのは、あなたの方ですよ」

わかつている。確かにそうかもしれない。でも……。もう一度、もう一度だけチャンスがほしい。

「なんとかあなたには知らせずに済ませたかった。あの女と別れて、

あなたの元へ素直に戻るくらいなら、命だけは助けてやろうとも思っていたのですが……。残念です」

「待つてください。教えてください。そこは何処なんです。彼は何処にいるんです」

「……」

「お願い！」

「あなたもよくご存知の女性が住んでいるマンションです。……その娘には、毎日お会いになつてるといつてもいいかもしれません」
そう言つて、電話は切れた。私は何度も携帯に向かつて叫んだが、もう遅かった。

私がよく知っている女。

私が、毎日、会っている、おんな。

まさか。……そんな、まさか……。

私はバイト先へ急いで電話をかけた。

呼び出し音がなっている間、いくつかの出来事がフラッシュバックする。……昨夜の電話のとき、彼はその日、私が仕事を休んだことを知っている様子だった。だからその日が、バイトの定休日だと勘違いしていた。では、誰が彼にそのことを告げたのか。

私はほとんどこの部屋と、バイト先を往復しているだけの毎日だ。大家さんとは直接お会いする機会はないし、他の部屋の住人たちとも話すことはない。そしてバイト先の店長は男性だし、同じ時間帯にパートで働く顔見知りの人は、一人を除いて中年のおばさんばかりである。

彼が付き合いそうな「若い」女性は、その「一人」しか思いつかなかった。

私といつも同じレジで働くあの娘……。

私はあの娘の、伏目がちの態度が頭に浮かんた。何と言うことだ。あれが、自分の本心を隠すための、見え透いたポーズであることはわかつていたのに。

……「陰であなたのことを何て言っていたかご存知ないでしょう

？」……

あの娘は自宅でも私のことを嘲笑っていたというのか。しかも彼と一緒にだって。

「ああ、どうも。どうしたの。体の具合はどう……」

私は、のんきな店長の言葉を遮って言った。

「そんなことよりも、あの女の子、今日は来ていますか」

「女の子？」

「ほら、いつも私と一緒にレジに入る……」

「ああ、大野さん？ 大野さんは今日は来ていないよ」

「あの、大野さんの住所を教えてもらえませんか」

「住所を？ なんでまた」

「あ、あの、お金を借りているんです。それを返したくて」

「へー……別に今度のバイトのときでもいいんじゃないかな。来週また同じシフトの日もあるんだし」

「いえ、今、返したいんです！ すぐに！」

「……」

思わず、声が大きくなってしまった。電話の向こうで戸惑っている様子が伝わってくる。

「あの……本当なら、昨日返すつもりだったんですけど、私休んでしまつて。大野さんの住所も、携帯の番号も知らないから、だからその、……直接お会いして、お金返して謝ろうかと……約束破っちゃったわけですし、その……」

「そ、そうかい。まあ律儀なんだねえ。……まあ、あなただったら別に問題ないと思うし。ま、いいか。ちょっとまつて」

保留中のメロディーが流れ始めた。その曲が、ひどく長く感じられる。

「おまたせ。いいかい」

「どうぞ」

「N町一丁目二十一の九……。ああ、大学のすぐ近くだね」

「大学って、店の側のあの大学ですか」

「そうだよ…… あそこの学生さんだからね。メゾン・ド・ブラウン 四 ……。 ああ、大学の表通りにあるでっかいマンションだ」

あの日、私があのお男と始めて会った日、バイト先にあのお男が現れた目的は、私ではなく、実はあのお娘にあったのではないか。そんな考えが頭に浮かんだ。私がその後、うろつろと歩き回っていた時に男の姿を見かけたのは、男があのお娘の住むマンションを探索（もしくは娘を尾行）していたためではないだろうか。たまたまそこに、ばったり私が出くわしてしまっただけなのではないだろうか。

「そこからだと、どちらの方角になりますか」

「えーと、向かって西側、になるのかな。結構でかいからすぐわかるよ。ここからでも見えるんじゃないかな。おしゃれなマンションだよ」

あのお娘の携帯の番号も聞いておいたよいだろうか。だが、あのお娘が電話に出ている間に、彼が殺されてしまったら？

「…… どうもありがとうございます」

私はお礼もそこに電話を切った。そしてすぐに外に飛び出していた。何とか間に合ってほしい。そして、心の中でひたすら祈っていた。

しかし。

私の目が遠くに一瞬の光をとらえ、私の体が小さな衝撃とかすかな振動をとらえた。さらに私の耳には、誰かの悲鳴のような声が聞こえた気がした。まさか……。

私はその方角へまっすぐに駆け出した。走り続けていくにつれ、私のすぐ側を救急車や消防車の一団が、猛スピードで通り過ぎていった。どちらも目的地は同じだった。おかげで私は迷うことなくまっすぐにその場所へたどり着くことが出来た。そして……。

私は見た。

確かに大きなマンションだった。外装もきれいで新しそうだったが、その中の一室から、黒々とした煙と真っ赤な炎が上がっていた。火元は、どうやらその四階にある一番端の部屋からのようだった。

た。

先ほどの消防車たちが、すでにマンションを取り囲んでいる。まわりには大勢の人が集まってきていた。私は人ごみをかき分け、警察がロープでその野次馬を食い止めている前まで出た。

「何が……何があったんですか」

私はすぐ側にいた初老の男性に尋ねた。

「なんだかよくわからないんだけど、ガス爆発らしいんだよ。ドーンって音がしたかと思うと、バァーッと火の手が上がってよお」

私の頭の中が真っ白になった。そして次の瞬間、私は中に入ろうと駆け出していた。

「危ない。入っちゃいかん」

慌てて警官が静止した。私はその手を逃れようともがいた。

「彼が……彼がああの部屋にいるんです」

「駄目だ。二次爆発が起こるかもしれないんだ」

「離して。行かせて下さい。お願い！」

どんなにもがいても、そこから先は一步も前に進むことはできなかった。そしてその場で、彼とあの娘がいたであろう部屋が燃え朽ちていくのを見ているしかなかった。やがて意識が遠くなっていくまで、私はずっともがき続けるだけであった。

その十六

また雨が降っている。そしてまた、私を憂鬱な気分にさせている。幾つかの辛い思い出が、この雨と共に呼び起こされるから……。いつか今日のことも、あらためて思い出す日が来るのだろうか。未来の私は、どんな風にこの出来事に思いを寄せるのだろうか。私は電話の呼び出し音を聞きながら、そんなことを思っていた。

「はい向井で……」

「わたしです」

私が答えた瞬間、相手の息を呑むような緊張感が伝わってきた。どうやら忘れずにいてくれたらしい。それも声を聞かせただけで、名前を名乗らずに誰だかわかってもらえたとは光栄だ。その後にく、こちらの出方を伺うような長い沈黙からして、歓迎ムードはまらずといえる。

「今からそちらにお邪魔してもよろしいでしょうか」

「……ごめんなさい。今から出かけなければならぬの……」

やや間をおいて、拒絶の言葉が帰ってきた。

「お買い物ですか」

「ええ、まあ……」

「では、お戻りは」

「さあ、いつになるか……」

「つい今しがた、お買い物からお戻りになられたのに、またお出かけになるんですか？」

「……！」

私はわざと電話口で、クスクス笑いを聞かせてやった。

「この雨の中、あんなに大きな荷物を抱えて、やつのことで帰ってきたのに、今度はどちらにお買い物に行かれるのですか？」

「どうして……」

「ぶしつけだとは思ったのですが、先ほどからもうあなたの家の前

に居るのです」

「！」

それぐらいは容易に推測できると思ったのだが。

「し、失礼じゃないですか。いくらなんでも……」

「だから、いきなりお宅にお邪魔しないで、こうしてお電話しているわけでしょう」

「……」

「お時間は取らせませんよ。私は教えていただきたいただけなんです。それもただひとつだけ……」

そう、ひとつだけ……。

「なんですか」

「あの男とは、どうやって連絡をとるのですか」

「あの男……？」

私の言う「男」とは、たった一人しかない。

「殺し屋ですよ。あなたが自分の恨みを晴らすために雇った、あの黒服の男です」

「……何を言っているの。ばかばかしい。殺し屋なんて……」

あくまで白を切ろうとする相手に対し、私は畳み掛けるように言葉が続けた。

「いいえ。御存知のはずです。よくね」

「ふざけるのもいい加減にして頂戴。さっさと帰らないと、警察を呼びますよ」

「どうぞ。もしそうになったら、私も真実を話すだけです。あなたがやったことすべてね」

「そんな。あなたみたいな人の言うことなんて、警察が取り上げるわけないわ」

正攻法で行けば確かにそうだろう。だが、

「かもしれませんね。でも、私とあなたのあの日の会話を、警察が聞いたとしたらどうでしょう」

「あの日の……会話？」

「ええ。実はあの日、はじめてあなたとお会いしてお話したとき、私、その時の会話をすべて録音しておいたんです」

と、私は奥の手をちらつかせた。

「……嘘」

「本当です。現にそのテープをここに持ってきているんです」

私は自身の携帯のすぐ側で、ケースに入ったカセットテープを振ってみせた。カチャカチャと言うかすかな音は、雨音に消されることなく、大きくあちらに響いているに違いない。

「最近の録音技術はすごいですよ。鞆の奥にしまい込んでいたわりには、はっきりと録れていますよ。みいんなね」

電話口の向こうにいるあの母親の姿が手に取るようにわかる。しばらくは私の手のひらで、転がせてもらおう。

「私を侮っていたんじゃないですか。それにあまりに短期間に、四人も続けて死に追いやってしまったのも、ちよつと軽率だったと思います。なによりあなたのミスは、自分の手を汚さずに殺し屋を……あんな男を雇ったことでしょうね。あの男は優しすぎました。もつと冷酷な、プロに徹した人間を雇い入れるべきでした」

やさしい殺人者。……お笑い種だ。あの男が、不良に絡まれていた私を助けたりしなければ。私の目の前に目立つ格好で現れ、似合わぬ皮肉や余計な忠告を残していかなければ。私の無理な願い事に応えようとしなければ。あんな悲しそうな表情を、私になんか見せたりしなければ。

私なんぞが、こうも簡単に事件の裏側を知ってしまうことなど、決してなかったに違いない。

「別に私の目的は、あなたをどうしようというのではないのです。ただひとつだけ、何でも言いますが、あの男との連絡の取り方を教えてほしいだけなんです。あの男にもう一度会いたい。それだけなんです。それさえ教えていただければ、あなたのことを警察に話したりなんかしません」

「……信用できないわ」

「信用していただくしかありませんね。別にあなたの方から、あの男あてに連絡を取っていただいてもいいんですけれど。……そうそう、ついでに私も始末させたらいかがですか。私みたいな小娘ひとりの命が、いくらかかるか知りませんが。もつとも、その時は息子さんのためだなんていう大義名分は通用しなくなりますよ。あなたはあなた自身の身を守る、ただそれだけのために、人を殺すことになるですね。それこそ、あなたのエゴで」

「……」

「でも、それが本当の姿なのかもしれませんね。誰かの為に何かをしてあげるなんて、奢り高ぶった感情は嘘なんだと思います。結局はみんな自分のため、それだけを考えて生きているんだと思いますよ」

そうだ。私がこんなことをしているのは、死んでしまった彼のためなんかではない。私は、自分自身のために、あの男に会わなければならぬのだ。

そのためになら、何だってできる。嘘をつく事だって　こんなに簡単にできているではないか。

「でも……知らないのよ。本当に」

「では、どうやって殺しの依頼を行ったのですか。いきなり向こうから現れて、あなたの恨みを晴らしてあげるとも言ったわけではないでしょう」

「それは……」

「答えてください」

「……」

また長い沈黙があった。何時間でも付き合っても良かったのだが、あえて私の方からそれを破ることにした。

「……わかりました。このテープと一緒に、警察へ行くことにします」

「待つて！」

今度はあの母親の喉が鳴ったように聞こえたのは気のせいだろう

か。

「……交換条件です。そのテープと引き換えに、すべてを教えます」
「いいでしょう」

「玄関を開けます。早く中へ入ってください」

「いいんですか」

「中身を確認させてもらいます。……あなたも雨の中、ずっと待っているわけにもいきかないでしょう」

「……そうですね」

「今、鍵を開けるから……」

と、そこで電話は切れた。やがてその家の玄関のドアが、半分だけ開いた。そおつと覗き込むように顔を覗かせた相手に、私はとびきりの笑顔を浮かべてやった。

あの母親が単なる小心者でしかなかったことに、少々私は幻滅していた。何故、あの時のように、凜とした態度で接してこなかったのだろう。何故、こんな簡単な嘘に、引つかかったりするのだろう。あの我が子を思う母親の姿というのも、単なるポーズでしかなかったのだろうか。親の愛情なんて、やはりこんなものなのだろうか。

もしそうならば。結局自分の欲求を満たすために、四人の人間を死に至らしめたということだけならば。

その罪は、裁かれなければならぬだろう。

私は玄関まで進み、傘をたたんでゆつくりとその家に入ると、後ろ手でドアを閉めた。

その十七

私が家を出たとき、雨は前より強くなり、風も出てきたようだった。私は自分の火照った体を冷ましたくて、そのまま駆け出してしまったかったが、これはまだ始まりなのだと思います、赤い傘を広げて駅への道を進み始めた。傘の柄を折れんばかりに、ぎりぎりと握り締めながら。

途中で、例の馬の遊戯具のある公園が見えてきた。この日は、雨の中でも遊ぶほどの元気な子供たちの姿は見えず、ひっそりと静まり返っていた。私は気まぐれにまた中へと入り、その遊戯具の前に立った。

雨の日はやはり嫌いだ。

また、今日も、私に、忘れることのできない、思い出を、ひとつ、作ってしまったから。

私のしたことは正しいことなのだろうか。

あの日この公園で思ったこと。その後で私がとった行動。さらに知ってしまった真実。そして……彼の死。

黒服の男も最後に荒っぽい手を使ったものだ。彼がいたあの部屋ごと爆破してしまうなんて。その時一緒にいた例の娘は、かなりの火傷を負ったものの、一命はとりとめたようだった。マンションの住人たちも、軽い怪我をした者が数名いただけだったという。あれだけの騒ぎとなり、あれだけの規模の爆発が引き起こされたにもかかわらず、なんと都合の良いことに、結局命を落としたのは彼一人であつた。

それでも、一步間違えば大惨事に発展していたかもしれないためか、警察もかなり力を入れて捜査を進めていたようである。そしてもちろん、私もあれこれと取調べを受けることになったが、あいにくと警察は有益な情報を引き出すことはできなかった。私が肝心なことを何一つ口外せず、知らぬ存ぜぬを押し通したためである。

警察はここ数ヶ月の間に、同じ高校のクラスメイトだった人間が、四人も続けて謎の死を遂げていることに気がついていて。そして後の二人（島崎さんと彼のことだ）が、明らかに何者かの手によって殺されたのだということを重要視していた。さらには、私が死の直前に島崎さんに会っていたこと、殺された現場の公園を徘徊していたことまで突き止められていた。おそらく私が一番の容疑者と目されていたのであろう。かなり長い時間、尋問を受けていた気がする。

だが結果的に私を逮捕するまでに至らなかったのは、私の自白が取れなかったことと、余りにも事件が非現実的で突拍子もなかったこと、そして犯行を裏付ける証拠が不十分であつたためだろう。私に彼を殺す動機はあつても（それが単なる寝取られただけだという陳腐なものであつても）、島崎さんたちを殺す動機は無く、最初の二人にいたつては確固たるアリバイも判明して（その日は運良く私のバイト日であつた）、すべての犯行は不可能であるという結論が出されたためである。この四つの死を関連付けて考えようとしていた警察にとっては、いささか暗礁に乗り上げた展開となつた。加えて言うなら、例えば彼の死の際に使われたと思しき時限爆破装置について、それらを作るために必要な知識や技術が私にはないことは調べてみればすぐにわかることだつた。

では、共犯者はどうか。彼の背後にあの娘がいたように、私の背後にも別な男がいたのではないか。これも私という人間に対する聞き込み等の調査が進められると共に、おのずと否定されることとなつた。以前にも述べたごとく、私の毎日はバイト先とアパートとの往復だけにほぼ費やされていたし、親しい知人友人はもちろん、直接会話を交わす人間もごくわずかに限られていた。家族とは連絡が取れない（取らない）状況のままである。たちまち「地味で無口で世間知らずの陰気な女」のイメージが、警察にも根付くこととなつた。

実際には、私の側にはあの黒服の男がうろついていたわけだが、捜査はその存在を突き止めるまでにはいたらなかったようである。

それは例の不良三人組の一件が、警察にも知られていなかった点を見てわかる。彼を含めた四人の死がこうして刑事事件となって騒ぎが大きくなっていくのと対照的に、あの事件は何の痕跡も残されず、男の影と共に霧の中へと消え失せてしまっていた。男の「イレギュラーな一件」という言葉が思い出される。結局「愛人説」「共犯者説」も可能性が低いとして削除されたのであった。

だからといって、すべての容疑が晴れたというわけではない。今は「灰色に近いが黒ともいえぬ」状況であるに過ぎない。いずれは私だけでなく、向井青年の母親のもとに捜査の手が伸びることも時間の問題だったろう。警察からのきびしい追及に、あの形ばかりの毅然とした態度で立ち向かうことができたのだろうか。……だが、あの女がその恐怖におびえることも、もうなくなった。私はあの黒服を除けば、事件の真相を知る唯一の人間となったわけだ。

確かに時間の問題だ。私はできるだけ早く、自分のやるべきことをやらなければならない。

そしてまた私は思う。彼にとって私の存在とは何だったのだろうか、と。

田舎から彼の両親が遺体を引きとりに見えたとき、私は自分の立場がいかにあやふやなものであったかを、いまさらながらに痛感させられることとなった。彼は私のことを何も話していなかったようなのである。私とご両親との初対面は良い形では訪れなかった。何より私は彼を殺した容疑者でもあり、彼を不幸にした張本人だと目されていたのだから。

もともと、私は彼を殺してはいないし、警察も（証拠不十分であったので）すぐに私を釈放している。しかし、向こうは明らかに私を煙たがっていた。私と穏便に手を切りたがっていた。これ以上、息子の醜聞を世間に広めたくなかったのだろうし、どうやら重症を負った娘の両親からかなりの剣幕で乗り込まれたらしく、私からも妙な因縁をつけられるのを非常に恐れていたようだ。確かに自分たちの息子が家出同然の女とずっと同棲をしていた上、実は別な女と

も二股をかけており、突然その女のマンションで二人とも爆破事故に巻き込まれたばかりか、さらにはどうやらそれは単なる事故ではなく、何者かに深い恨みを受けた末の、前代未聞の連続殺人の犠牲者になったかもしれないとあっては、ご両親の立場や気持ちもわからぬでもない。

私にしてみれば、そんないざこざはどうでも良くなっていた。その時すでに、私はある決意を胸に秘めていたからである。

私が伝えた要求は一つだけ。私たちが住んでいたアパートの契約が満了するまで、あの部屋に住まわせてほしいということだった。今すぐ、どこか別なところに住むことは難しいから、というのが相手への表向きの理由だった。けなげに懇願する態度を貫いたのが効いたのかもしれないが、彼の遺品はすべて両親に返すという条件で聞き遂げられることとなった。しぶしぶと言った様子で、強硬な態度にも出られないことが歯痒そうであった。

私は彼の両親にも幻滅していた。それはつい先刻、向井少年の母親にも感じた気持ちだった。あの人たちは、もともと私とは無縁の存在だったのだ。そして今後も関係をもとうなどとは、露ほども考えなかった。これからは彼の問題ではなく、私の、私自身の問題に、私一人で取り組まなくてはならないのだ。

別に彼と住んでいた部屋に、思い入れや感傷があったわけではない。私は活動するための拠点を確保したかっただけなのだ。……ただそれだけなのだ。本当に。

そして今日、私はやるべきことをやり、知るべき情報を手に入れた。

私がさらに行おうとしていることは、これまでの私の人生以上に滑稽なものになるのかもしれない。すべてが終わり、もし他の誰かがこの一連の出来事の真相にいたることがあったとしたら、いったい何と思うのだろう。馬鹿げた行為と笑うのか。それとも無意味な所業と蔑むのか。

しかし……この本質は、ひどく単純なものはずである。自分

のために何ができるのかということ。そしてその行為がかえって、自分に対しどういう意義があるのかということ。自身に納得ができれば、その行為がどんなものであると、それはそれで良しとしてもいいのではないだろうか。

私は踵をかえし、公園を後にする。次に私がすべきことは、アパートに立ち返り、男からの連絡を待つこと。それはかつて私が守れなかった約束と同じ行為ではあるが、今度の場合はその意図が大きく異なっていた。すなわち、あの男が私の誘いにのるかどうかにかかっている。だが、もし、今回は駄目でも、いつまでも、あの男の姿を追い求めるだろう。何処にしようとも、それこそ何年かかるうとも。

いつか、きっと。

私のために。私なりの決着をつけるために。

その十八

携帯電話がなった。もう動じることにはなかった。三回、四回。何
度も鳴り続ける携帯をみながら、なかなか出ようとはしなかった。
大丈夫。まだまだ落ち着いている。そして五回目のベルが鳴ったあ
とで、私はそれを手に取った。

「はい」

「……私です」

名乗らずとも、この携帯電話にかけてくる者など、もはや一人し
かない。

「早いですね。もつと時間がかかるものと思っていました」

男は答えなかった。

「私からのメッセージだとよくわかりましたね」

「ええ……あなたのことですから」

「大した自信ですこと。あなたはストーカーになれる素質がありま
すよ。この部屋に盗聴器まで仕掛けて、私の行動を逐一知っていた
わけですね。彼は死んだのに、まだ私の監視を続けているので
すか」

私はつとめて明るい声で話した。向井青年の母親へ電話した時と
同じトーンで。

盗聴器の件は、母親が吐露したことだ。種を明かせばなんでもな
いことで、男は私の前に現れるタイミングだけを考慮すればよかつ
たのだ。そうして私の心に最大限ショックを与え、自分の行動に対
する目くらましとした。だがもうその手には乗らない。

「……なぜあんなマネをしたんですか」

「先に聞いているのは、私ですよ」

「あんなに目立つことをすれば、いやでも目に入ってきます。私だ
けでなく、警察もそうです」

「それは何をさしておっしゃっているんです？」

さて、男は私の期待に沿ってくれるであろうか。それとも、私の挑発を見事かわしてしまうのだろうか。

「すべてです。今日、あなたが何をなさったかも知っています」

「そう……ですか」

どうやらまっすぐに私に対峙してくるようだ。まあ、それならそれでかまわない。

「何故、あんな馬鹿なことを」

「馬鹿なこと？ あなたがいつもやっていらっしゃることじゃありませんか」

「私の場合は……仕事です。きちんとした報酬が得られないのであれば、決してしない行為です」

「こちらからあなたに連絡を取る術を知らなかったんです。あなたはいつも、突然姿を現してばかりですもの」

だから、ここまで自分を追い込まねばならなかった。だから、その手を汚さねばならなかった。だから……。

「しかし……」

「じゃあ、きちんとした依頼をして、きちんとした報酬をお支払いするなら、私なんかの頼みでも聞いてもらえるんですか」

「えっ……」

「実はもう一人、殺してしまいたい人物がいるんです」

だから、こうして「真実」を伝えなければならなかったのだ。

「もう一人……？」

「ええ。……私、知らなかったんです」

「何をですか」

「人を、たった一人の人間を始末することが、あんなに大変なことだったなんて」

あの母親の姿がフラッシュバックしそうになる。私は慌てて、それを頭の片隅へと追いやった。

「……」

「やっぱりこういうことは、プロに任せたほうがいいと思いました。」

だからあなたにお願いするんです」

「それは……誰です……」

私は男の問いかけを遮って、

「ひきうけてくださるんですか」

「……まず、その名前を教えてください」

「電話なんかじゃこんな大切なことはお話できません。直接会ってお話したいわ」

と、畳み掛けた。そう。このことは面と向かって、一対一で話さなければならぬことなのだ。そして、

「あなたもよくご存知ですね。私には時間がないんです。すぐにも、お頼みしたいんです」

と、さらに言葉を続けた。

「……」

「……会って下さいますね」

「……わかりました」

低い声だった。無理に搾り出したかのように、しわがれていた。

「では、落ち合う場所を決めましょう」

私はそんな男の態度を、あえて無視して話を進めた。

「……あなたと初めてお話した場所で、お会いしたいです」

「初めて話した場所？」

男がオウム返しに問い返す。

「私が不良たちに絡まれた後、あなたと二人で逃げ込んだところですよ。頭上に高速道路が通っていた、あの人気のない公園です」

「ああ……憶えています」

「あそこにしませんか。いいですね」

「……ええ」

「時間は今から一時間ほど後で。いかがですか」

「……わかりました」

しばらく互いに間が空いた。あの男は今、何を考えているのか。

私の考えは、私の想いは、どれほどあの男に伝わっているのだろう。

「あの」

と、今度は男の方から声をかけてきた。

「何ですか」

「あ、いえ、……なんでもありません。会った時に話すことにしましょう」

「……そうですか」

男は何を言おうとしたのか。私に何を伝えようというのか。

「それでは後ほど……」

「……はい」

電話は切れた。慌てるな。すべては会って話せばすぐにわかることだ。そしてそれは、何もかもが終わりを迎える瞬間でもあるのだ。私はテーブルの上に携帯を置いて、大きく息をついた。そしてやおら立ち上がり、着替えに取り掛かり始めた。着て行く服はすでに用意してある。黒のタートルネックのセーター、黒のGパン。靴下も黒っぽいのを選び、ベースが黒いスニーカーも購入していた。そして黒の男物のハーフコート。これは私にとって、彼の唯一の形見の品であった。あの両親にも渡さなかったものである。

男物だけに小さくやせぎすな私の体には、かなりだぶだぶとした状態となったが、袖をまくるなどして、何とか見てくれだけは整えた。とはいえ、鏡で自分の出で立ちをみれば、やはり全身黒尽くめという格好は異様であった。夜ならともかく、昼間この格好で出歩くのは遠慮したい感じだった。

だがこれは特別の服装だ。これがあの男と闘うための、戦闘服なのだ。

それにこの大きな彼のコートが、私の秘密の武器を隠してくれる。

私は台所に行き、流しの下戸棚から、長い刺身包丁を取り出した。

まずはこれが第一の太刀である。

もちろん、こんなものであの男を傷つけることができるとは到底

思えなかったが、可能性が決してないわけではない。このところ毎日、布団や枕を実験台にして、素早く取り出して突いたり刺したりできるように、何度も練習を繰り返していた。あの男にだって、何らかの隙を見せる時はあるはずだ。ほんの一瞬でもいい。私はそこに、すべてをかけようと思っていた。

私は包丁の刃の部分をタオルでまいて、腰の辺りに仕込んだ。さらにもう一本、小ぶりのナイフを用意して、こちらは刃のあたりにハンカチをまきつけ、コートのポケットに忍ばせた。これが第二の太刀。だがこれは、もし男に齒が立たなかったときに、己の喉笛を掻っ切るための品であった。

あの黒服の男を殺す。それも私自身の手で。私は彼が亡くなってから、ずっとこのことだけを考えてきた。

彼の死に対する復讐？ そんなものではない。これこそ今度の一件に対する、私なりのけじめのつけ方なのだ。古い仁侠映画のようだと、笑いたければ笑えばいい。私は自分が不器用な人間であることは重々承知している。いつかあの黒服も言ったように、なんでも一人で背負い込んで、なんでも自分の力だけでやろうとして失敗してきた。もつと違うやり方をすれば、彼を助ける方法もあったのかもしれない。いやそれよりも、もつと平凡で普通に幸せな生活を、確かに送れたかもしれないのだ。

ある映画の中でも語られた、こんな話を思い出す。蠍が川を渡ろうと、蛙に橋渡しを頼んだ。蛙は「背負ったところで刺されてしまったら死んでしまう」と言っただけで断ろうとした。だが蠍は「もし渡っている最中にきみを刺してしまったら私も死んでしまうから」と抗弁した。それに蛙も納得し、蠍を背負って川を渡り始めたのだが、二匹が川の中央に差し掛かったとき、蠍は蛙を刺してしまった。蠍と一緒に沈みながら蛙は叫んだ。「どうして死ぬとわかっていながら刺したんだ」とすると蠍は言った。「わかっていても止められない。それが私の性なのだ」と。そうして二匹は死んでしまったのだった。私はそんな蠍のような人間なのだろう。それならば最後まで、蠍

であり続けよう。そしてその一刺しを、あの黒服の男に見舞わせるのだ。たとえ失敗しても、自分を責めることだけはするまい。そんな自分を、できれば誇れるよう思えたら……。

すべて準備は整った。私は部屋を出る前に、もう室内をぐるっと見渡した。もうここへは戻ってくることもない。別に感傷的な気持ちにはなかった。彼の私物だったものはすべて運び出されており、テーブルが部屋の中央に鎮座するだけの、がらんとした殺風景な眺めがそこにあるだけであった。それでも私は、この光景をわすれまいと、その目にしっかりと焼き付けた。

はじめて黒服の男と出会った朝に感じたあの感情。それがまた少しずつ湧き上がってくるのを感じていた。私はまた変わろうとしている。だがそれは、まるつきり別な人間に代わろうというわけではなく、過去の自分やこれまでのすべてを抱えたままで、もう一段階上になるといったような、そんな成長であることを願った。

そうであれば、私は強くなることができる。

そうであれば、私はまた生きて行くことができる。

さあ行こう。私は軽く両の頬をはって、二三度屈伸運動をしてから外へ出た。

雨はもう降っていないかった。そして今度は大きな月が、私を照らしていた。

その十九

公園へは私の方が先についていた。頭上を走る高速道路はこんな時間でも車の往来が激しく、特に大型トラックが通過した際には、巨大な騒音と地を揺るがすかのような振動が園内に響き渡っていた。私はあの日に座ったベンチを探し出し、埃を払って浅く腰掛けた。両の手がかじかんでしまわないように、何度も握ったり開いたりを繰り返した。

大きな影が公園の外灯の光を遮った。私が顔を上げると、長身の男が立っていた。

黒服の男だった。

「……どうも」

男はそう言つて、かすかに笑った。いや、笑おうとしていた。唇の端を少しだけ緩めて、肩をすくめるような動作をして見せた。だが、どちらも妙に力が入っていて、ぎこちなさが目立った。

私は立ち上がり、男の正面に向き直つて、まずは深々と頭を下げた。そして勢いよく頭を上げると、精一杯の笑顔を見せた。

「わざわざ来ていただいたて、ありがとうございます」

私の笑みは、男のそれよりはうまくできただろうか。

「その……格好は？」

やはり男は私の格好に訝しさを抱いたようだ。私はわざと外灯の真下へ、明るいところへ移動して、その姿を見せ付けるようにくるくると回って見せた。

「どうです？ 似合っていますか？ あなたに会つたために、わざわざしつらえてきたんですよ」

私は両手を後ろに組んで、顔を男に突き出すようにして、なるべくきはきとした口調で答えた。おろしたてのドレスを見せるお姫様、と言った風に。

「……」

男の眉間に皺がよっている。不快感を上手に隠す術も身に着けてはいないらしい。本心とは異なる表情を取り付くろう事に関しては、私も人のことは言えないが。

「お気に召しませんか？」

それでも私は、なんとか男を挑発する態度を崩さないようにした。

「……ええ」

男は軽く頷いてから、

「あなたは、もっと明るい色の服が似合いますよ」

と、意外な台詞がかえって来た。

「えっ」

男の言葉に、私の虚勢の鎧にひびが入る。

「私は特に女性の服に詳しいわけではありませんが……前から思っていました。ダークカラーの服よりも、赤とか黄色とかパステルカラーなんかを身にまとった方が、映えるんじゃないかな、と」

「……」

「あ、いや、本当にファッションなんて良くわかりませんから。忘れてください、すみません」

男はまた詫びの言葉を口にして、俯いてしまった。私の方はといえば、全身が火照るような感じがして、これもまた男の方が見れなくなつて俯く始末だった。なんだなんだこれは。下らぬ世辞に動揺などするな。

「あ、ありがとうございます」

それでも思わぬ礼の言葉が出た。それを気に二人とも顔を上げたので、互いに目と目があう状況となつた。私はまた恥ずかしくなつて、男に向かつて背を向けた。なんだなんだ何をやっているのだ、私は。

「あの、その、それはさて置いて。……仕事の話を、しましょう」

私はなんとか呼吸を整えながら、振り返つてそう話した。男ももう赤くなつてはいなかった。

「仕事、ですか」

「ええ。あなたに、依頼したいことが、あるんです」

私と男との立ち位置には、まだかなりの距離があった。ここで私が懐から包丁を取り出し、男に向かって切り付けたところで、さらりとかわされてしまうのが落ちだろう。もう少し距離を縮め、相手の不意を突かなければ、男の体に一太刀浴びせることなど無理なように思えた。

「電話でもいいましたけど、私は殺してやりたい人間がいるのです」
「……そうですね。それは一体誰なのです」
「それを確認する前に……。本当に私の頼みを聞いてくれるのですか」

「……ええ」

男は寂しそうにつぶやいた。

「それが、誰であろうと？」

「ええ。あなたの頼みですから」

「私の……頼み、だから？」

「そうです。他にもない、あなたからの、頼みだからです……」

まっすぐに私の目を見て話す時の男の言葉は重く、深かった。真剣そのものの男の表情に、私はまたもくじけそうになり、足元が崩れて、かすかによろめいた。

「大丈夫ですか？」

男が飛んできて、左から私の肩に手を回す。大きく厚い手で支えられた私は、倒れることなくその体を男の懐へもたれかかるような形となった。私の顔がちょうど男の胸の位置にきている。背の方に仕込んである刺身包丁が相手の体に触れぬように、バランスを取らねばならなかった。

「……ごめんなさい」

私は詫びを入れたが、体は男の側からは離さなかった。厚い胸の奥から、心臓の音が素早く脈打っている。それは私の心臓の音ではなく、この黒服の男のものであった。

「少し休みますか。そのベンチに座りましょう」

私は男に導かれるままに、歩を進めた。視線の先に見えるベンチは、あの日二人で初めて会話を交わした場所でもあった。

「ええ……」

いつ刃物を出すか。私はそのタイミングを見計らっていた。席につく瞬間に、座ると見せかけて一気に立ち上がり、勢いをつけて下から切りつけるというのはいかがか。いや、それよりも男がベンチを背にしたときに背後に回りこんで、まっすぐに突き刺すというのは？ 切るより刺すほうが致命傷を与えられるのではないだろうか。

「さ、どうぞ」

男がベンチに座るように誘う。男は私の肩に両手をかけたまままだ立ち位置は私の左側にいる。右手で背中中の包丁を抜きとれば、そのまま体を左にぐるりと回して、男の腹の辺りに刃を突き立てるところができる。チャンスは……。

今だ！

私は腰に挟んでいた包丁をすばやく抜き取り、一気にその刃を男の腹部にめがけて刺し込んだ。だが「すばやく」刺したつもりだったが、すでに刃先は空を描いていた。そして大きな手が私の手首をつかむと、くるりと簡単にねじ上げられた。男は私の背後にまわって、さらにぐつと力が込められ、その痛みに私はあっさりと武器を落としてしまった。包丁が地面を転がる乾いた音が響いていた。

「……こんなことだろうと思いましたよ」

「……離してください」

「こんなもので、私を傷つけられるとお思いですか」

「……」

悔しい。所詮私は何もできないのか。この男に対してだけでなく、この世のすべての出来事に対して。私は唇をかみ締めた。

「あんな……あんな男のために、ここまでして、何になるっていうんです」

「違います！」

私は叫んでいた。

「違います。彼のためなんかじゃ、ありません」

私の手を捕らえられていた痛みがふつとやんだ。私はすぐさま男から離れ、相手と真正面から向き合った。握られていた手首がじんじんと痛む。おそらく男の手の跡がくつきりと残されていることだろう。私はもう一方の手でそこをさすりながら、大きく肩で息をして呼吸を整えようとした。男に向かうための、臨戦態勢をとろうとしていた。

「私は……私のために、私自身のために……あなたに、あなたの体に、せめて一太刀、あびせただけです」

「わたしの……体に？」

「そうです。……本当なら、できることなら、あなたを殺してやりたいと、思っています」

「……」

「私があなたに、齒が立たないのは重々承知しています。もしもあなた以外に、殺しを引き受けてくれる人がいれば、私はこの身をも投げ打って、あなたを始末することを依頼したでしょう。でも、私はそんな人を見つける術も、知識も智慧もありません。だから、だから……」

「そんなに……私が、憎いのですか」

私は大きく首を振った。

「では、どうして……」

「……わかりません」

わからなかった。本当に。でも。

「あなたは、優しい方です。身を挺して私を守ってくれたり、いろいろと助言や忠告も与えてくださって、本当に感謝しています。できることなら、私も過去のことは断ち切って、新たに出直せればと思います。でも」

「でも……なんでしょう」

「でも、私はこれまで何もしてきてはいなかった。何も残しては来なかったんです。実家にいるときは母親の言いなりになり、彼と一

緒のときは彼の顔色ばかり伺っていました。怖かったです。あの人たちの手を離れるのが。叱られたり責められたりもされていましたが、私はそれを受け入れてきました。そうすることが……いえ、そうすることで、逆に自分を守ってきたんです」

「ですが、もはやどちらの手もあなたに及ばなくなっているはずですよ。過去の呪縛から逃れて、新しい未来に向かって生きてゆけばいいじゃないですか」

「でも、それは、あなたが用意してくれた『未来』なんですよね」

「えっ……」

「私は、ひとりになりました。あなたのおかげで、彼とは永遠に別れることとなりました。だけど、私は何もしていません。それにこれは、私が望んで得た結果でもありません」

私は何を言っているんだろう。だが私の言葉は止まらなかった。

「結局私は、誰かに頼ってでないと生きていけないんです。やがていつかまた、私は何も考えずに、ただ身を寄せるだけの場所を選んでしまうに違いありません。これじゃあ……これじゃあ、駄目なんです。何も変わってはいないんです」

「……」

「私は自分で、自分の生きる道を決めないといけないんです。自分ひとりの力で、立たねばならないんです。そして、そのためにはあえて頼れる幹ですらも、切り倒さなくてはいけないと思ったんです」

「……」

「……」

「……つまりは、私は余計なことをしてきたということですかね」
しばらくの後、男がつぶやいた。

「いいえ。あなたは私のことを本当に思ってくださいました」

「でも、それは無駄であつたと」

「そこまでは……」

「そうなんでしょう？」

男は例の悲しそうな表情で問いかけた。

「私は本当にあなたに感謝しています。すべては……私の単なるわがままに過ぎないのでから」

「そうでしょうか。……それだけなのでしょうが……」

男は私から視線をそらして、二三歩ほど別方向に歩いていった。そして何か意を決したように、すつと向き直った。

「あの……」

「私はやはり甘かったようです。あなたのために思ってたやってきたことが、何もかもあなたの枷となっていた。私はモラルを曲げるべきではなかった。粛々と人殺しとしての、ルールを守ればよかったようです」

男はそう言つて、ゆっくりと私の方へ歩いてきた。その目はまっすぐに私を見据えている。

「……」

来る。私は直感的にそう思った。何が？ 私の命を奪うものが。男が私のすぐ側までやってきたら、男は私を殺すことだろう。それこそ一瞬の間に。私は本能的にそう感じた。極度の緊張感が全身を貫く。

「……」

男が歩いてくる。私は息をのんでそれを待った。おのずと手が、先ほど男に握られたのとは逆の方の手が、ポケットに伸びていく。そこには小さなナイフが忍ばせてある。

「……」

男がさらに近づいてくる。この小さなナイフは己の喉を掻っ切るために準備したのではなかったか。しかし一方で、これで男を傷つけられないかという考えが沸き起こっていた。私は迷っていた。私は男に敵うわけではないのだ。ならば、いつそのこと……。

「……」

男がついに私の眼前に立った。ええい、ままよ。

「……！」

私は目をつぶって、そのままポケットからナイフを取り出し、男

へ切りつけようとした。しかしまたも目前でその手は男の手につかまれ、私の攻撃は防がれてしまった。

「……こんなもので、私を傷つけられると本当にお思いですか」

男は先ほどと同じような台詞を言って、ぐっとつかんでいる手に力を込めた。その痛みに思わず私の手から、またナイフが滑り落ちてしまう。

「私を……本当に殺してしまいたいのですね」

私が目を開くと、ちょうど真正面に男の顔が見えた。いつもの悲しそうな表情は失せて、真剣な面持ちが浮かんでいた。

私は頷いていた。

「……そう、ですか」

そう言うと、つかんでいた方の手を緩め、もう一方の手を優しく、私の手の上に重ねてきた。

「小さな……手ですね」

男の手は暖かだった。私が戸惑っていると、いつしか男は温和な表情となって、かすかに笑みも浮かべていた。

「人を傷つけるときは、むやみやたらと刃物を振り回しては駄目です」

男は少しかんで何かを拾い上げた。それは最初に私が使用した刺身包丁であった。

「人の心臓は、左胸からやや中央に位置しています。具体的に言えば、胸骨の左下から二三本目のあたりです」

そう話しながら、拾った包丁を改めて私の手にしっかりと握り締めさせた。

「まっすぐに心臓を貫こうとすると、この胸骨の骨の部分が邪魔になります。ある程度間隔があいて、隙間もあるのですが、そこにうまく刃を滑り込ませることは難しいです」

片手で上着のボタンをはずし、空いている方の手で指差しつつ、自分の体をモデルにしながら、人体の構造を逐一説明をし続けた。

「ですから、心臓を狙う場合は、下から胸骨の隙間に滑り込ませるように……。そう、丁度あなたが今包丁を構えている位置から、私の胸へ突き上げるように刺しこめば、ベストということになります」
男は片方の手で私の小さな手を包みこみ、指差していたもう一方の手を下から支えるように添えてきた。ひょっとして、まさか……。

「いいですか。狙うのはここです。そこからここを目指して、一気に突くのです」

さらに男はワイシャツの上から、刃先で自らの心臓部を指し示した。まさか、まさか……。

「……」

男は笑って、そして、

その包丁を私に握らせたまま、一気に自分の胸にその刃を突き上げた。

「！」

刃が肉にのめりこむ嫌な感触がする。そして柄の部分からゆつくりつつてくるのは、男の血だ。生暖かい血が手首から地面へと、ぽたぽたと滴り落ちていく。

「あ、あの、どうして……」

動揺する私を前に、男は

「あなたが、やりたかったことは、これでしょう……？」

「言い、さらに、

「私を、殺すこと……なのでしょう？」

と、声を絞らせながら続けた。

「……」

「よくご覧なさい。人が、人を、殺すと言うことは、こういう……」
そう言つと、男はガクツとひざを突いて崩れ落ちた。つかんできた私の手からも離れ、胸に包丁をつき立てたまま仰向けに横たわった。

「大丈夫ですか……！ き、救急車を呼んで来ます」

やっと我に返った私が、急いでその場を離れようとすると、男の大きな手が、また私の手首をつかんできた。だが今度は先ほどのような力強さは微塵も感じられなかった。

「待って、ください……。もう、無理ですよ……。この、血の、量、だとね」

黒い服装のおかげで目立たないだけで、あふれ出た血液はほとんど全身を染めているに違いない。さらに男は青ざめた表情で、笑みを浮かべようとした。ああ、どうしてこの人は、いつも笑おうとするときこなくなるのだろう。何故か私はそんなことを考えていた。「すいません……ちよつと、このまま横になつていますね……」

男の息は、だんだん強く、早く、荒くなつていくかのようにだった。私はその体に手を添えることしかできなかった。何もできない自分が、いつものように無力な自分が齒がゆくなつて、私は俯いてしまった。すると……。

「何を、して、いるのですか……」

男の声に私は顔を上げた。

「今ですよ。……今なら、私にとどめをさすことが、できますからこの人は、何を言っているのだ？」

「な、何をおっしゃるんですか。まだ間に合います。今から救急車を呼べば、きっと助かります」

「駄目ですよ……それじゃあ、何も、かわらないじゃないですか」「えっ……」

「あなたが、私を、殺すのです。そのために、いらしたのでしょ。こうして、幹は、倒れましたから、とどめを……」

ああ、この人は、私の勝手な願いを、かなえようとしているのだ。文字通り、体を張つて。

「この包丁に、あなたの体を、乗せるようにして、ください。そうすれば、一気に、心臓まで……」

「そんな……」

「今のままでも、長くはありませんが、刃が心臓を傷つければ、す

ぐに……」

「何故です？ 何故私なんかのために、こんなことまでしてくれるんですか？」

「……」

男はいったん目を閉じて、荒い呼吸を整えながらこう言った。

「『あなたのため』だから、ですよ……」

馬鹿だ。大馬鹿者だ。この人は。私の量の眼から大粒の涙が滴り落ちた。血に染まったシャツの上に、新たな滲みを作りつつづけていた。

「さあ……手を置いて」

男が私の手をいざない、腹部に刺さった包丁の柄の部分に添えた。「上から、体をのせれば、奥まで差し込めます……」

「……」

私は言われるままに、包丁の上に両手と上体を乗せるように合わせた。だがなかなかそれを差し込むことはできなかった。

「どうしました、さ、早く……」

「あの……！」

私の呼びかけに、男はゆっくりと瞼を開いて、私を見た。私と男の視線がひとつに合わさったとき、私は心の中で、

「……ありがとう……」

と、伝えていた。そしてそれに対し、男は、はじめて、自然な笑みを、返してくれた。

……そしてそれが最後の合図だった。私は目をつぶり、体ごとその包丁へ体重をかけて……。

男は悲鳴もうめき声も上げなかった。ただ反射的に体が硬直しただけで、それはすぐに弛緩され、それからピクリとも動かなくなつた。おそらく後から考えるに、そのとき刃は見事に心臓まで達したのだろう。それによる出血性のショック死をひきおこしたのではないだろうか。いずれにせよ、この男の息の根を止めたのは私だ。私が殺したのだ。

私は開いたままの男の眼を閉じてやった。そして長い両手を胸の上に添えてあげた。包丁も抜いてやりたかったが、柄が血で滑ってしまう上、その刃が胸の奥深くまで差し込まれていて、どうすることもできなかった。

それから私は……声を上げて泣き始めた。何に対する涙なのか。誰に対する涙なのか。

決まっているではないか。

誠実で、お人よしで、生真面目すぎて、不器用な、それでも一途に私のことを想ってくれた人。

これはこの黒服の男、すなわち……。

『彼』に対する涙なのだ。

エピソード

そうして私は今、暗い部屋の中にいる。

「彼」がまったく動かなくなつてからしばらくして、私は一人交番へと出向いた。深夜に全身血まみれの女が突然現れたことに、当直の警察官は驚いてかなり取り乱していた。私は淡々と供述し、公園で「彼」を刺して殺した、ということ伝えた。

ところがその警察官と共に、あらためて現場を訪れた私の目には、とんでもない光景が写つたのだつた。

死体がなくなつてしまつていたのである。

確かに「彼」が息を引き取つた場所には、おびただしい血の跡が残されていた。人が一人横たわつていたという痕跡もあつた。だが肝心の「彼」の姿がない。凶器も見当たらない。それでいて、その死体を動かしたり引きずつたという形跡は見られない。まさしく煙の如く消え失せたといった感じであつたのだ。

すでに述べたとおり、私は血まみれであつた。後の検査でその血は、私以外の人間のものであることは確認され、現場の血痕とも一致した。私がか行つたことは間違いない。だが、一体私が「何」をやつたと言ふのだらう。一体私は「誰」を殺したというのだらう。

当然警察は、その後の取り調べで、事態の真相を探ろうとした。

そして私は起こつたことを順に話した。曰く、かつてのいじめ事件の首謀者を抹殺すべく「殺し屋」を雇つた母親がいたこと。曰く、その標的となつた男の一人と私が「たまたま」同棲していたこと。曰く、その同居人が死んだ後で今度は私がその「殺し屋」を殺そうと企んだこと。曰く、そしてあの夜あの公園で「殺し屋」をついに殺してしまつたこと。この数日の間に起こつた出来事を滔々と語つた。だがそのことについて警察は、当然のごとく百パーセント信用しようとはしなかつた。もつと無難で理解しやすい現実的な着地点を示した供述を求めた。だが、私は嘘はつかなかつた。同じ話を繰

り返した。それを相手がどのように感じ取るうが、まったく考えなかった。

いずれにせよ、今後私にどんな裁定が下るか、それはわからない。例の母親の件もあるので、無罪放免とはいかないと思うが、どうやら刑務所ではなく病院の方に隔離されるという可能性もでてきた。しかし、私が「彼」を殺してしまったということは変えようも無い「真実」であるので、たとえどのような結果となろうとも、私は素直にそれに従うつもりである。

私は今後も繰り返し、実際に起こったこと「だけ」を述べるつもりだ。その一方で、もう一つの「真実」「何故」そのようなことが起こったか、つまり「動機」やその時の互いの心情の起伏などについては、誰にも話すまいと決めていた。「彼」が私をどう想っていたか、私が「彼」をどう想うようになっていったか。それをつまびらかにしてしまったら、私たちがやつと培うことのできた互いの心の繋がりが、他人に土足で踏みにじられ、汚され、無残に断ち切られてしまうことは目に見えていた。だからこの空想のノートにひっそりと、それらすべての「真実」を包括して書き記すことにしたのである。

「彼」の私に対する気持ち。

そして私の「彼」に対する気持ち。

これは守っておかねばならない。ありのままに残さなければならぬ。そして忘れてはならない。……絶対に。

はじめ私と「彼」は、敵同士として出会った。しかしその時から「彼」は私のことを考えて、私を見守り、私にとって最良の道を指示してくれていた。それらは私の愚かさゆえにほとんど実ることはなかったけれど、おかげで私は過去から開放されることができた。さらに「彼」はあまりにもやさしすぎる人であった。そんな「彼」に私は、いつしかひそかに「やさしい殺人者」というあだ名をつけ

るようになっていた。その呼び名はいささか滑稽なものではあったが、非情さを有しながら誠実でもあるという「彼」の二面性を如実に表しているのではないかとも思う。なので、恥ずかしながらこの物語の題としてつけさせてもらうこととした。

やさしかった「彼」のことを、深く心に刻み込もう。「彼」のための物語を紡ぎ、それを「彼」に捧げよう。きっと「彼」も喜んでくれるに違いない。そして、

いつか、きっと。

また「彼」が突然私の目の前に姿を見せた時、この物語と共に、素直な私のこの気持ちを伝えてあげたいと思うのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336o/>

やさしい殺人者

2010年12月4日20時55分発行